博多61

一下川端地区市街地再開発事業に伴う博多遺跡群第89次調査の概要一

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第556集

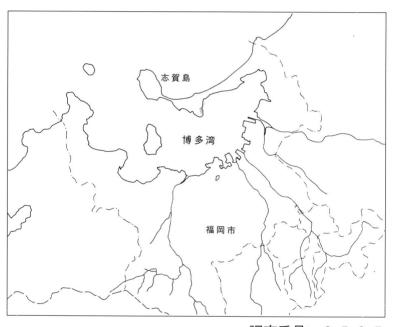
1998

福岡市教育委員会

博多61

ー下川端地区市街地再開発事業に伴う博多遺跡群第89次調査の概要ー

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第556集



調査番号 9 5 0 5 遺跡記号 HKT-89

1 9 9 8

福岡市教育委員会

JR博多駅から博多湾をのぞむ一帯は、弥生時代より大陸文化の窓口として栄えたところであり、中世には「貿易都市」として繁栄をきわめたところです。

この博多の町も、急速に進む都市部の再開発に伴って100次を越える発掘調査が実施されています。大量の輸入陶磁器をはじめとする多種多様な遺物の発見は、まさに国際貿易都市「博多」の繁栄を彷彿させるものがあります。

下川端地区の再開発事業に伴って実施した第89次調査では、中世末から江戸時代にいたるさまざまな遺構や遺物を検出しました。殊に、石積みの護岸跡の発見は16世紀後半の「息の濱」の西南縁を明らかにするとともに、その後の町の発展を考える上で貴重な資料となりました。

本書はこれらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民の皆 さんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとと もに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成10年3月10日

福岡市教育委員会教育長 町田 英俊

- 1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市博多区下川端における市街地再開発事業に先立って、1995 (平成7) 年4月から 11月に緊急調査した博多遺跡群第89次調査の発掘報告書である。
- 2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
- 3. 遺構は呼称を記号化し、建物跡をSB、井戸跡をSE、土壙をSK、石組土壙をSQ、ピットをSPとし、その後にすべての遺構を通番してナンバーを付した。
- 4. 本書に掲載した遺構の実測には、小林義彦、八丁由香があたり、一部に大塚紀宣、加藤隆也、長家伸、黒田和生、永井大志の助力を得た。また、石積護岸跡は写測エンジニアリングの写真測量による。遺物の実測は、小林、八丁、松浦一之介、今村ひろ子、大歯あずさ、鐘ケ江賢治、中園聡、平川敬治、無養久美子、吉岡和哉が作成した。
- 5. 本書に掲載した遺構、遺物の製図は、小林、八丁、松浦、今村、中園、吉岡、藤村佳公恵が分担して作成した。
- 6. 本書に掲載した写真は、遺構、遺物とも小林が撮影した。
- 7. 本書の執筆、編集は小林が行なった。
- 8. 本書に係わる遺物、記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管する予定である。

遺跡調査番号:9505 遺跡略号:HKT89 分布地図番号:49-A-1				
調査地籍:福岡市博多区下川端町				
工事面積:28,000㎡ 調査対象面積:調査実施面積:4,139㎡				
調査期間:1995年4月25日~11月30日				

本 文 目 次

Ι.	はし	じめに	• 1
	1.	発掘調査にいたるまで	. 1
	2.	発掘調査の組織	• 1
	3.	立地と歴史的環境	• 5
	4.	地形と地質	• 7
П.	調査	その記録 ······	. 9
	1.	発掘調査の方法と経過	. 9
	2.	基本的層序について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 12
	3.	調査の概要	• 13
	4.	第1期の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	· 14
		1).建物跡	· 15
		2).石積土壙	· 25
		3).土 壙	• 47
		4).井戸跡	115
		5).溝遺構	118
		6).ピット	119
		7).博多大水道	120
	5.	第2期の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	127
		1).石敷遺構	128
		2).護岸跡	129
		3).石積土壙	134
		4).土 壙	135
	6.	包含層出土の遺物	149
ш.	おれ	ວຽ ເວົ້າ	151

挿図目次 (図、写真)

1.	周辺遺跡分布図(1/50,000) 2	29.	215~221号建物跡実測図(1/60)24
2.	調査区全景(南より) 3	30.	21号石積土壙実測図(1/30)25
3.	博多89次調査地点位置図(1/7,500) 4	31.	21号石積土壙全景(北より) 26
4.	博多89次調査地点周辺現況図(1/1,500) 6	32.	21号石積土壙出土遺物実測図(1/3)26
5.	地質柱状模式図 ····· 7	33.	21号石積土壙出土遺物(1/3)27
6.	調査区とグリッド位置図(1/1,000) 9	34.	23号石積土壙実測図(1/30)27
7.	A区全景(南より)11	35.	23号石積土壙全景(南より)27
8.	B区全景(南より)11	36.	23号石積土壙断面(東より)27
9.	C区全景(南より)12	37.	24号石積土壙実測図(1/30)28
10.	22号建物跡実測図(1/80)14	38.	24号石積土壙全景(北より)28
11.	22号建物跡全景(西より)15	39.	25号石積土壙実測図(1/30)29
12.	22号建物跡東桁行基石列(北より)15	40.	25号石積土壙全景(南より)29
13.	22号建物跡北梁行基石列土層断面(北より) 15	41.	53号石積土壙実測図(1/30)30
14.	22号建物跡北梁行基石列裏込め遺物出土状況	42.	53号石積土壙全景(西より)30
	(南より)15	43.	53号石積土壙出土遺物実測図(1/3·1/4)31
15.	22号建物跡出土遺物実測図 1 (1/3)16	44.	53号石積土壙出土遺物(1/3·1/4)32
16.	22号建物跡出土遺物(1/2·1/3) 17	45.	65号石積土壙実測図(1/30)33
17.	22号建物跡出土遺物実測図 2 (1/3) 17	46.	65号石積土壙全景(北より) 33
18.	91号建物跡実測図(1/60)18	47.	73号石積土壙実測図(1/30)33
19.	91・130号建物跡全景(北より)18	48.	73号石積土壙出土遺物実測図(1/3)33
20.	130号建物跡実測図(1/80) 19	49.	73号石積土壙全景(北より) 34
21.	130号建物跡出土遺物実測図(1/4) 20	50.	73号石積土壙断面(東より)34
22.	91・130・133・145号建物跡全景(西より) 20	51.	76号石積土壙実測図(1/40)34
23.	133号建物跡出土遺物実測図1(1/4)21	52.	76号石積土壙全景(北より)35
24.	133号建物跡出土遺物実測図2(1/3)21	53.	76号石積土壙南側壁(北より)35
25.	145号建物跡全景(北より)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	54.	77号石積土壙実測図(1/30)35
26.	183号建物跡実測図(1/40)22	55.	77号石積土壙全景(東より)35
27.	183号建物跡全景(北より)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	56.	77号石積土壙断面(東より)35
28.	183号建物跡出土遺物実測図(1/3) 23	57.	76.77号石積土壙出土遺物実測図(1/3)36

58.	76号石積土壙出土遺物(1/3) 37	90.	2号土壙出土遺物実測図5(1/3) 52
59.	88号石積土壙実測図(1/40) 37	91.	2号土壙出土遺物実測図 6 (1/3) 52
60.	88号石積土壙全景(東より) 38	92.	2号土壙出土遺物 1 (1/2·1/3) 53
61.	88号石積土壙東側壁(西より)	93.	2 号土壙出土遺物 2 (1/3) 54
62.	88号石積土壙側壁断面(南より)38	94.	2 号土壙出土遺物 3 (1/3) 55
63.	88号石積土壙出土遺物実測図(1/3)39	95.	2 号土壙出土遺物 4 (1/3) 56
64.	88号石積土壙出土遺物(1/3) 39	96.	8号土壙実測図(1/30) 57
65.	89号石積土壙実測図(1/30)40	97.	9号土壙実測図(1/30) 57
66.	89号石積土壙全景(北より)40	98.	8・9号土壙全景(南より) 58
67.	89号石積土壙出土遺物実測図(1/4)40	99.	10・11号土壙全景(西より) 58
68.	89号石積土壙出土遺物(1/3)40	100.	5・9~11号土壙出土遺物実測図1(1/3) 59
69.	90号石積土壙実測図(1/30)41	101.	5・9~11号土壙出土遺物実測図 2 (1/3) 60
70.	90号石積土壙全景(北より)41	102.	1・2・14~19号土壙全景(南より)
71.	90号石積土壙出土遺物実測図(1/3)41	103.	17号土壙全景(北より)60
72.	94号石積土壙実測図(1/30)42	104.	19号土壙全景(北より)60
73.	94号石積土壙全景(北より)42	105.	14~18号土壙出土遺物実測図 1 (1/3)61
74.	96号石積土壙実測図(1/30)43	106.	14~18号土壙出土遺物実測図 2 (1/3)62
75.	96号石積土壙全景(西より) 43	107.	5·9·11·14~16号土壙出土遺物
76.	109号石積土壙実測図(1/30)44		$(1/2 \cdot 1/3 \cdot 1/4) \cdot \cdots 62$
	109号石積土壙全景(南より)44	108.	27号土壙実測図(1/30)63
78.	197号石積土壙実測図(1/30)45	109.	27号土壙全景(南より)63
79.	197号石積土壙出土遺物実測図(1/3)45	110.	27号土壙出土遺物実測図1(1/3) 64
80.	202号石積土壙実測図(1/30)46	111.	27号土壙出土遺物実測図2(1/3)・・・・・・・・・・・・・65
81.	202号石積土壙全景(西より)46	112.	27号土壙出土遺物実測図 3 (1/3)66
82.	2・18号土壙実測図(1/40)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	113.	27号土壙出土遺物実測図 4 (1/3)67
83.	2号土壙全景(南より)47	114.	27号土壙出土遺物実測図 5 (1/3) 68
84.	2号土壙遺物出土状況(南より)47	115.	27号土壙出土遺物(1/3·1/4)
85.	2号土壙漆器椀出土状況(南より) 47	116.	28号土壙出土遺物実測図(1/3)70
86.	2号土壙出土遺物実測図1(1/3)48	117.	29号土壙実測図(1/20)70
87.	2号土壙出土遺物実測図2(1/3)49	118.	29·30号土壙全景(東より)70
88.	2号土壙出土遺物実測図3(1/3)50	119.	29号土壙出土遺物実測図(1/4)7
89.	2 号土壙出土遺物実測図 4 (1/3)51	120.	29号土壙出土遺物(1/6)7

121.	31号土壙実測図(1/40)71	153.	48号土壙出土遺物(1/3)92
122.	31号土壙出土遺物実測図(1/3·1/4)72	154.	78号土壙出土遺物(1/2·1/3·1/4) 92
123.	31号土壙出土遺物(1/4)72	155.	78号土壙出土遺物実測図(1/3) 93
124.	32号土壙出土遺物実測図(1/3)72	156.	79号土壙全景(西より)94
125.	33号土壙遺物出土状況図(1/50)73	157.	82号土壙全景(西より)94
126.	33号土壙全景(南より)74	158.	79号土壙出土遺物実測図(1/3) 94
127.	33号土壙上層遺物出土状況1(西より)74	159.	82号土壙出土遺物実測図(1/3·1/4) 95
128.	33号土壙上層遺物出土状況 2(北より)74	160.	82.83号土壙出土遺物(1/2.1/3.1/4) 95
129.	33号土壙上層遺物出土状況3(東より)74	161.	83号土壙出土遺物実測図1(1/3)96
130.	33号土壙下層遺物出土状況1(西より)74	162.	83号土壙出土遺物実測図 2 (1/4) 97
131.	33号土壙下層遺物出土状況 2 (南より)74	163.	84号土壙出土遺物実測図(1/3·1/4)97
132.	33号土壙出土遺物実測図1(1/3)75	164.	85号土壙出土遺物実測図(1/3) 98
133.	33号土壙出土遺物実測図 2 (1/3) … 76	165.	84·85号土壙出土遺物(1/3) 98
134.	33号土壙出土遺物実測図 3 (1/3)77	166.	87号土壙出土遺物実測図(1/3)98
135.	33号土壙出土遺物実測図 4 (1/3)78	167.	87号土壙出土遺物(1/2·1/3·1/4)99
136.	33号土壙出土遺物実測図 5 (1/3)79	168.	92号土壙全景(東より)99
137.	33号土壙出土遺物実測図 6 (1/3)80	169.	92号土壙実測図(1/30)99
138.	33号土壙出土遺物実測図 7 (1/3) 81	170.	92号土壙出土遺物実測図1(1/3)100
139.	33号土壙出土遺物実測図8(1/4)82	171.	92号土壙出土遺物実測図 2 (1/3·1/4)100
140.	33号土壙出土遺物実測図 9 (1/4)	172.	92号土壙出土遺物(1/2·1/3·1/4)101
141.	33号土壙出土遺物実測図10(1/4) 84	173.	93号土壙全景(南より)101
142.	33号土壙出土遺物実測図11(1/4) 85	174.	93号土壙遺物出土状況(西より)101
143.	33号土壙出土遺物 1 (1/3·1/4) 86	175.	93号土壙実測図(1/30)102
144.	33号土壙出土遺物 2 (1/3·1/4) 87	176.	93号土壙出土遺物(1/4)102
145.	33号土壙出土遺物 3 (1/3·1/4) 88	177.	93号土壙出土遺物実測図 1 (1/3)103
146.	33号土壙出土遺物 4 (1/4) 89	178.	93号土壙出土遺物実測図 2 (1/3·1/4)104
147.	33号土壙出土遺物 5 (1/4) 90	179.	95号土壙全景(南より)・・・・・・・・・・・・・・・・104
148.	34号土壙出土遺物実測図(1/3) 91	180.	95号土壙出土遺物実測図(1/3·1/4)105
149.	36号土壙出土遺物実測図(1/3) 91	181.	95号土壙出土遺物(1/3)106
150.	39号土壙出土遺物実測図(1/3)91	182.	97号土壙実測図(1/30)106
151.	34·36·39号土壙出土遺物(1/2·1/3) 91	183.	98号土壙実測図(1/30)106
152.	48号土壙出土遺物実測図(1/4) 92	184.	97・98号土壙・99号井戸跡全景(北より)・・・・・・・107

185.	98号土壙出土遺物実測図(1/3)107	216.	71号井戸跡全景(東より)116
186.	102号土壙全景(北より)108	217.	99号井戸跡全景(北より)116
187.	102号土壙出土遺物実測図 1 (1/3)108	218.	100号井戸跡全景(西より)116
188.	102号土壙出土遺物実測図 2 (1/4)108	219.	71号井戸跡出土遺物実測図(1/3)116
189.	108号土壙出土遺物実測図(1/3)109	220.	100号井戸跡出土遺物実測図(1/3)117
190.	110号土壙出土遺物実測図(1/3)109	221.	138号井戸跡出土遺物実測図(1/3)117
191.	111号土壙出土遺物実測図(1/3)109	222.	100·138号井戸跡出土遺物(1/3)117
192.	119号土壙出土遺物実測図(1/3)109	223.	152号井戸跡出土遺物実測図(1/3)117
193.	131·132号土壙出土遺物実測図(1/3)110	224.	172号井戸跡出土遺物実測図(1/3)117
194.	131号土壙出土遺物(1/4)110	225.	40号溝出土遺物実測図(1/3)118
195.	142·143·144号土壙出土遺物実測図(1/3·1/4)	226.	139号溝出土遺物実測図(1/3)118
	111	227.	26号ピット実測図(1/30)118
196.	144号土壙出土遺物(1/3)112	228.	ピット出土遺物 (1/4)118
197.	146号土壙出土遺物実測図(1/3)112	229.	ピット出土遺物実測図(1/3)119
198.	146号土壙出土遺物(1/2)112	230.	博多大水道実測図(1/50)120
199.	153·158号土壙出土遺物実測図(1/3)112	231.	博多大水道全景(西より)121
200.	173号土壙出土遺物実測図(1/3)112	232.	博多大水道断面(東より)121
201.	182号土壙出土遺物実測図(1/3)113	233.	博多大水道南側壁(東より)121
202.	182号土壙出土遺物(1/2)113	234.	博多大水道北側壁裏込め(西より)121
203.	195号土壙実測図(1/30)113	235.	博多大水道出土遺物実測図(1/3)121
204.	195号土壙全景(東より)113	236.	博多大水道出土遺物(1/2)121
205.	195号土壙出土遺物実測図(1/3)113	237.	土製品実測図(1/3)122
206.	198号土壙実測図(1/30)114	238.	瓦拓影 1 (1/4)123
207.	198・199号土壙全景(西より)・・・・・・・・・・・・114	239.	瓦拓影 2 (1/4)124
208.	199号土壙実測図(1/30)114	240.	瓦拓影 3 (1/4)125
209.	199号土壙出土遺物実測図(1/3)114	241.	瓦拓影 4 (1/4)126
210.	12号井戸跡実測図(1/30)115	242.	第2面護岸跡全景(西より)126
211.	12号井戸跡全景(東より)115	243.	151号石敷遺構全景(東より)127
212.	12号井戸跡断面(南より)115	244.	151号石敷遺構実測図(1/60)127
213.	12号井戸跡井側桶跡(南より)115	245.	151号石敷遺構近景(西より)128
214.	12号井戸跡出土遺物実測図(1/3)116	246.	151号石敷遺構近景(南より)128
215.	12号井戸跡出土遺物(1/3)116	247.	151号石敷遺構横断面(南より)128

248.	151号石敷遺構裏込め(東より)128	279.	105号土壙銅銭出土状況(西より)138
249.	151号石敷遺構出土遺物実測図(1/3)128	280.	105号土壙出土遺物実測図1(1/3)139
250.	護岸跡全景(西より)129	281.	105号土壙出土遺物実測図 2 (1/3)140
251.	護岸跡全景(東より)129	282.	106号土壙実測図(1/30)・・・・・・・141
252.	護岸跡北部石積(西より)129	283.	106号土壙全景(南より)141
253.	護岸跡中央部石積(西より)129	284.	106号土壙出土遺物実測図(1/3)141
254.	護岸跡 A トレンチ土層断面(南より)130	285.	107号土壙出土遺物実測図1(1/3)142
255.	護岸跡 B トレンチ土層断面 (南より)130	286.	107号土壙実測図(1/30)143
256.	護岸跡 A~C トレンチ土層断面図 (1/50) · · · · · · · 130	287.	107号土壙出土遺物実測図 2 (1/3)143
257.	護岸跡 Bトレンチ石積裏込め板検出状況(東より)	288.	107号土壙全景(東より)144
	131	289.	169号土壙全景(西より)144
258.	護岸跡 D トレンチ土層断面 (西より)131	290.	211号土壙出土遺物実測図(1/3)144
259.	護岸跡東部遺物出土状況(南より)131	291.	214号土壙実測図(1/30)145
260.	護岸跡埋立地漆器椀出土状況(西より)131	292.	65号石積土壙・214号土壙全景(北より)145
261.	護岸跡埋立地サメ下顎骨出土状況(南より)131	293.	212·213·214号土壙出土遺物実測図(1/3)145
262.	護岸跡埋立地イルカ頭骨出土状況(南より)131	294.	銅銭拓影(2/3)146
263.	護岸跡 D トレンチ土層断面図(1/50) ······131	295.	土 錘(1/2)147
264.	護岸跡出土遺物実測図1(1/3)132	296.	包含層出土遺物実測図1(1/3)148
265.	護岸跡出土遺物実測図 2 (1/3·1/4)133	297.	包含層出土遺物実測図2(1/3)149
266.	63号石積土壙実測図(1/30)134	298.	包含層出土遺物(1/2)150
267.	64号石積土壙実測図(1/30)134	299.	包含層出土遺物実測図3(1/3)150
268.	63・64号石積土壙全景(西より)・・・・・・・・・・・134	300.	陶磁器編年表 1 · · · · · · · · 152
269.	64号石積土壙北壁(南より)134	301.	陶磁器編年表 2 · · · · · · · 153
270.	101号土壙全景(北より)135	302.	須崎町上・麹屋番推定復原図
271.	101号土壙出土遺物実測図(1/3)135		(文化文政年間)(1/1,000)154
272.	104号土壙実測図(1/30)135		
273.	104~107号土壙全景(北より)135		
274.	104号土壙出土遺物実測図1(1/3)136	付図	1. 第1期の遺構配置図(1/150)
275.	104号土壙出土遺物実測図 2 (1/3)137	付図	2. 第2期の遺構配置図(1/150)
276.	104号土壙全景(北より)138		
277.	105号土壙実測図(1/30)138		
278.	105号土壙全景(東より)138		

I. は じ め に

1. 発掘調査にいたるまで

「博多」は、弥生時代より大陸文化の受入口として長い歴史をもち、中世には泉州堺と並ぶ貿易都市として栄えた町である。なかでも川端地区は、博多商人発祥の地として江戸時代以降商業の中心的役割を果たしてきた。しかしながら、近年は天神地区や博多駅地区への商業機能の集積により、地域の地盤沈下が進み、かつての賑わいは次第に失われてきた。これに対して、都市部における均衡ある発展を目指して商業核の形成による回遊拠点づくりを行い、商業振興と博多部全体の活性化を図る再開発事業が提議された。1980(昭和55)年12月には、その実現にむけて再開発準備組合が地権者等によって設立された。その後幾多の曲折を経て1990(平成2)年に玉屋、高島屋、パルコ、東京ドームの4社がテナント出店の意向を表明し、1991(平成3)年3月の都市計画決定の告示を経て、1992(平成4)年8月に再開発組合の設立総会が開かれて具体的に再開発事業が動きだした。

この下川端地区は、広大な博多遺跡群の北西部にあたり中世から近世の遺跡が重複して拡がっていることが予想された。そのため円滑な事業の推進と文化財の保存を図るために1992(平成4)年10月より幾度となく協議を重ね、再開発地内の遺跡の拡がりや密度を詳細に把握するために試掘調査を実施することとなった。試掘調査は、建物の解体に合わせながら1994(平成6)年8月より1995(平成7)年3月迄の間に5度実施した。その結果、申請地の北東部には中世(15~16世紀)と近世(17~19世紀)の井戸跡や建物跡が密に重複して拡がっていることが確認された。

一方、下川端地区市街地再開発組合から出された開発計画案は、地域の浮揚を賭けた長年の宿願であるために計画案の変更は不可避であった。そこで、発掘調査による記録保存が必要となり諸協議ののちに新組織として発足したばかりの大規模事業等担当が発掘調査を担当することとなった。

発掘調査は、家屋解体の工程に合わせて便宜的に調査区全体をA~C区に3分割し、1995(平成7)年4月25日にA区より順次着手した。しかしながら、諸事情による家屋解体の遅延から契約期日での調査終了が危ぶまれたが、石組護岸跡の実測を写真測量によって期日を短縮し、11月30日に調査を終了した。写真測量は写測エンジニアリング(株)、空中写真は空中写真企画に委託して行った。

なお、発掘調査にあたっては、下川端地区市街地再開発組合をはじめ都市未来ふくおか(株)や家屋 解体に当たられた大成建設株式会社九州支店の関係者諸氏のご理解とご協力をたまわった。記して謝 意を表します。

2. 発掘調査の組織

調查委託 下川端地区市街地再開発組合

理 事 長 渡邊精二

副 理 事 長 新宮松比古 松本大二郎 川西 泉

理 事 明石照男 内堀 弘 川辺 清 百田 稔 和田十一

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊

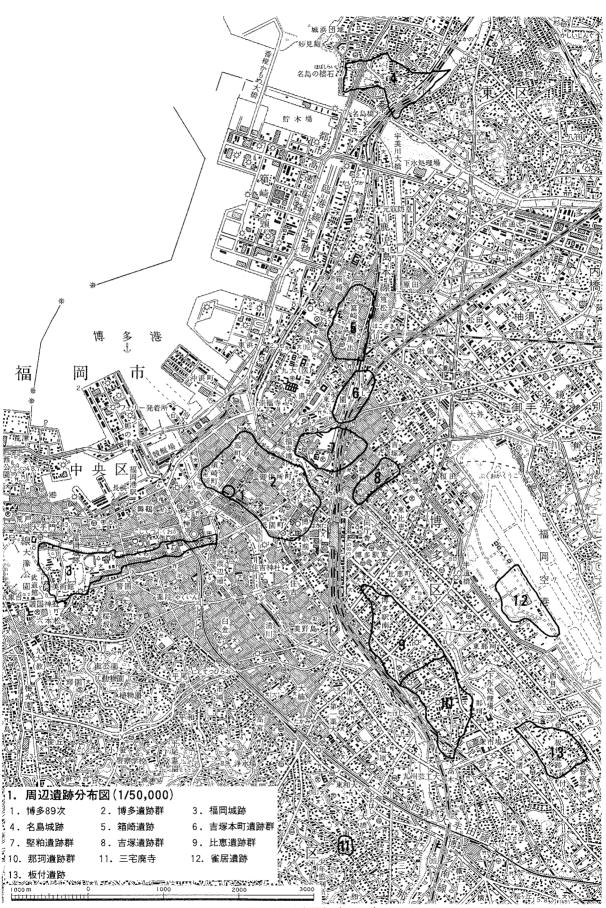
文 化 財 部 長 平塚克則(現在)後藤 直(前任)

調查総括 大規模事業等担当課長 山崎純男

調査庶務 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

河野淳美(現任) 西田結香(前任)

調査担当 主査 池崎譲二 小林義彦



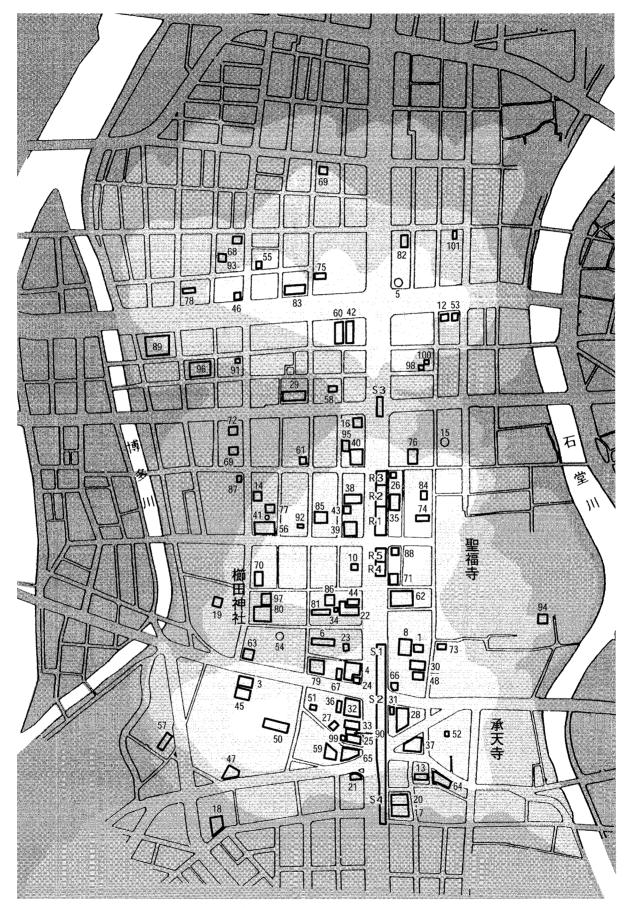
1. 周辺遺跡分布図(1/50,000)

調査・整理作業 網田美代野 石橋テル子 板谷元顯 井上トミコ 今村ひろ子 今村弘美上原千代子 遠藤貞子 大石裕美 大塩皓 大瀬良清子 岡部静江 尾崎瑞穂 甲斐正耕金子由利子 川上正子 川口シゲノ 木須昭三 清末シズエ 清原ユリ子 久保山勝広 隈部孝慈黒岩敬太 下司昭枝 小松富美 坂本ハツ子 坂本隆二 佐藤テル子 笹部幸子 指山歌子指山浩子 真田弘二 柴田タツ子 柴田常人 柴藤裕志 島崎昭二 白石泰一 末松克子 千住香織立川喜章 田中栄 津田和子 土斐崎新 土斐崎孝子 土斐崎恵美 永井大志 永田忠彦 中村昭市中山睦司 西尾タツヨ 西島マツコ 西嶋ムラ子 西嶋洋子 西畑盛行 萩尾寛文 長谷川鐡雄馬場イツ子 馬場久美子 馬場賢治 原ハナエ 日野光嗣 平田千鶴子 平田政子 平野義光堀ウメコ 堀川ヒロ子 松井フユ子 松田庄一 松園重子 松本愛子 松本藤子 三栗野明美三栗野和子 三島啓介 水野由美子 村嶋里子 森山早苗 門司弘子 山下アヤ子 山本雅美結城千代子 吉川春美 吉積ミエ子 脇坂ミサワ

資料整理においては、大橋康二(佐賀県教育庁)、又野誠(福岡市博物館)氏の適切な指導と助言を受けた。また、陶磁器編年表は今村ひろ子、麹屋番復原図は松浦一之介氏の協力を得た。



2. 調査区全景(南より)



3. 博多89次調査地点位置図(1/7,500)

3. 立地と歴史的環境(1・3)

三方を三郡山系と背振山系に囲まれた福岡平野は、北の博多湾にむかって開口し、平野を貫流する御笠川と那珂川の二筋の流れは河口を接して博多湾に注ぐ。博多遺跡群は、この両河川に挟まれた博 多湾岸沿いの古砂丘上に立地し、南は旧比恵川によって画される。

博多遺跡群は、弥生時代から古代、中世を経て近世まで連綿とつづく大複合遺跡であり、中世には泉州堺と並ぶ貿易都市として繁栄を極めたところである。この博多遺跡群の調査は、1977(昭和52)年の高速鉄道祇園町工区の調査に緒を発し、一連の高速鉄道や都市計画道路博多駅築港線関係の調査をはじめ100次におよぶ調査の結果、次第にその姿は明らかになりつつある。

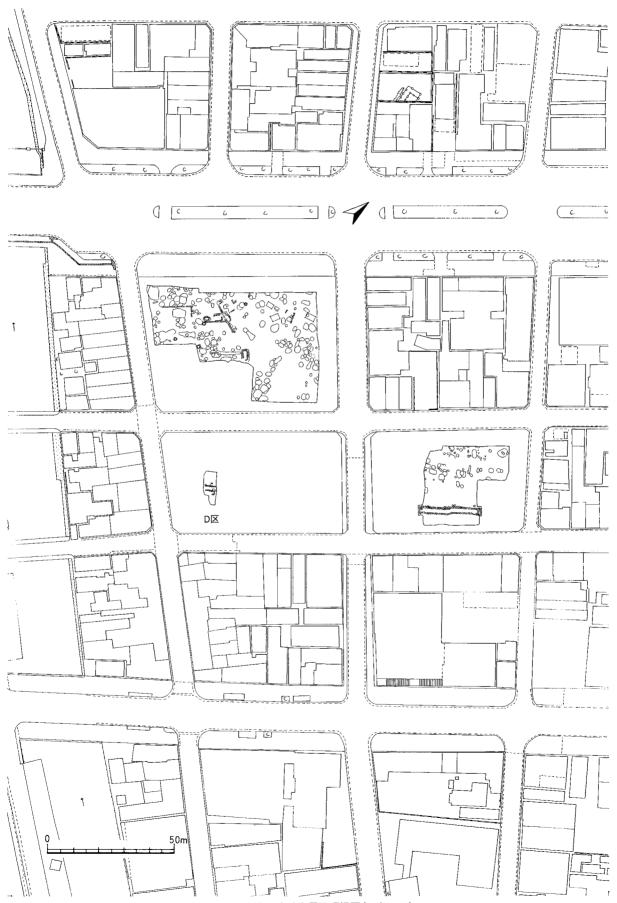
博多遺跡群を概観すると、その初見は弥生時代中期前半に遡る。祇園町交差点を中心とする古砂丘 上に円形住居跡や甕棺墓群が立地する。ここは博多濱のほぼ中央部で、古砂丘の最高所にあたり、弥 生時代後期になると、遺跡は南の後背地に拡がりを見せる。

古墳時代になると、砂丘の前進に伴って北方の上呉服町周辺まで遺構は拡がるが、遺跡の中心はまだ博多濱の最高所にあり、竪穴住居跡や方形周溝墓が調査されている。また、第28次調査区では、墳丘長が56mを越える5世紀初頭の前方後円墳が確認されており、那珂川右岸に展開する前方後円墳群の一翼として捉えられよう。

「那の津」の官家が設置された536(宣化1)年以降古代になると、博多遺跡群は対外貿易の拠点としての性格を強め、遺跡は博多濱全域に拡がる。688(朱雀3)年に初見する筑紫館、842(承和9)年以降に現われる太宰府鴻臚館は、博多遺跡群から入海ひとつを隔てた丘陵上に位置する。博多遺跡群に官衙が置かれた記録はないが、鴻臚館式瓦、老司式瓦、皇朝十二銭、円面硯、石帯、墨書須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器の外に越州窯系青磁、長沙窯系陶器等の輸入陶磁器が多く出土し、官衙的色彩の濃い施設の存在を想起させるとともに貿易都市としての性格を強めていったものと思われる。909(延喜9)年の遺唐使の廃止は私貿易を促すこととなり、古代末から博多は対宋貿易の中心地となる。発掘調査で最も多く検出される遺構や遺物は11世紀後半から13世紀前半のものであり、夥しい量の輸入陶磁器が出土するのもこの時期である。また、11世紀後半には博多濱北限の潟が砂州状に埋め立てられ、呉服町交差点付近で息の濱と繋がる。

鎌倉時代には、息の濱の開発が進み博多濱と一体化して都市「博多」を形成する。13世紀後半から14世紀初めには砂丘上に幾筋もの道路が開削され、室町時代を通してつづくが相互間の規則性や統一性は有していない。しかしながら、これらが中世後半期の博多の町並みの概観を示しているといえよう。一方、「元寇の役」後には鎮西探題府が置かれ、対外貿易都市としての機能のみならず西国の政治的中心地としての側面をももつに至る。

室町時代には、息の濱の発展が著しく、博多の都市機能の中心は内陸側の博多濱から湾側の息の濱へと移る。息の濱の商人たちは、朝鮮半島や中国大陸のみならず、遠く東南アジア地域まで進出していく。ベトナム陶磁器やタイ陶磁器の出土がこれを裏付けている。また、博多にも倭寇の存在が記されており、海賊である倭寇によって民間貿易が担われた側面もある。政治的には、足利幕府によって九州探題が置かれたが、南朝方の反幕的勢力が強くその政治力、軍事力は強大なものとは成りえなかった。その後、幕府権力の衰退とともに貿易権益を巡る争奪戦が筑前の小式氏、豊後の大友氏、周防の大内氏によって繰り返されている。そのたびに堺と並ぶ自治都市博多は兵火によって焼亡し、ついに1586(天正14)年の島津氏による焼き討ちによって灰燼に帰している。その後、豊臣秀吉によって復興される。これがいわゆる太閤町割であり、これをもって鎌倉時代よりつづいた中世の博多の道路、街区は廃される。この太閤町割は、不規則な道路や街区を統一し、博多全体を長方形の街区と鰻の寝



4. 博多89次調査地点周辺現況図(1/1,500)

床と呼ばれる短冊型の地割に区切るものであり、博多は中世都市から近世都市へと変容を遂げる。

この太閤町割で戦国期の荒廃から復興し、さらには朝鮮出兵の兵站基地として活況を呈した。しかしながら、1639(明正16)年の鎖国令によって貿易都市としての終焉を迎える。その後は、黒田氏52万石の城下町「福岡」と商人町「博多」は一体として黒田藩の藩都となり、そのまま明治維新を迎えるに至る。

4. 地形と地質(3~5)

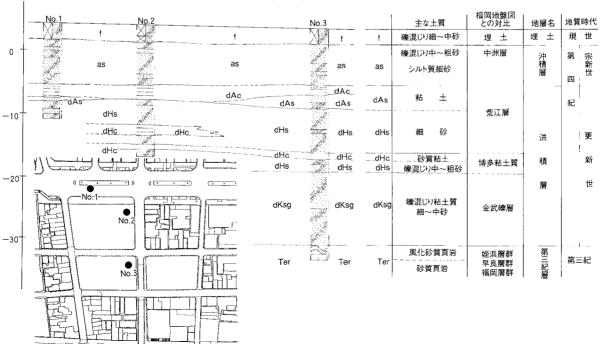
博多遺跡群の第89次調査区は、福岡平野北端の海岸砂丘上にある。この福岡平野はその東側を山郡 山系、南側と西側を背振山系に囲まれ、北方は博多湾に向かって開口している。

福岡平野は、地形的には海岸から山地までの奥行きが比較的短く、平野を貫流する河川の川床勾配が急なため扇状地が発達している。一方、地質的には古生代の変成岩類とこれに中生代に貫入した花崗岩類を基盤とし、その上層に新生代古第三紀堆積岩が覆うのが一般的である。博多遺跡群を含む北部では第三紀層が、南部では花崗岩が基盤層となっていることが多い。この基盤層中には北西~南東方向に走る多くの断層が認められ、そのうち高宮一警固一長浜を結ぶ「警固断層」は、地形的にも明瞭で断層線崖が発達している。したがって、博多遺跡群の南端部辺り(JR博多駅付近)では比較的浅くから第三紀層が分布するが、西にむかって深くなり、福岡城の東端部辺りでは約50mの深さに達する。

平野部ではこれらを覆って第四紀層が堆積しているが、概して沖積層は薄く、海成層は東平尾一山 王-塩原を結ぶラインより北にしか分布しない。また、この第四紀層は河床勾配が急なことと平野後 背部が主に花崗岩山地で囲まれていることから、扇状地性の真砂土の二次堆積物により構成されるこ とが多い。

1,沖積層

深度9~10 m までに分布する砂質土層で、横方向の連続性は良い。土質の主体は暗黄褐色を呈す礫混じり中~粗砂で、10~20mm程度までの石英や花崗岩礫を多量に混入し、細粒分の割合は少ない。また、下層に約2m程の暗灰色系を呈すシルト質細砂層を挟んでいる。この間では細粒分の混入がやや



5. 地質柱状模式図

見られ、一部に貝殻片を含んでいる。深度4m付近より以深で含水量が多くなっている。

2, 洪積層

深度10mから35mまでに分布する厚い土層で、さらに深度12~13mと23~24m付近を境として3層に細分される。これら3層は「福岡地盤図」の区分による荒江層、博多粘土層、及び金武礫層にそれぞれ相当する。このうち博多粘土層は、層厚、分布深度ともに不規則で変化している。

1) 荒江層

洪積層最上部に層厚2~4m程で分布するもので、土質は水平方向に連続性を示す暗灰色系の粘土と、その下位に伏在する砂層の2層から成る。粘土の粘着性は強く、一様に腐食物を含む。下位の砂層は、No.2地点では欠如し、No.3地点で層厚2.3mとやや厚くなっている。土質は細砂及び礫混じりで、20mm程度までの石英と花崗岩礫を含む。含水量は全体に多い。

2) 博多粘土層

深度13m付近より23m付近まで、層厚13m程を成し分布しており、粘土と砂とが何層も重なる互層を成す。これら単層の横方向の連続性は乏しく、砂層中にも粘土を薄く挟んでいる箇所がみられる。粘土は暗青黄灰色系で全体に砂分を含み、砂質粘土を主体とし、粘着性は乏しく、強固結状を呈するものが多い。層厚はNo.2地点の深度15.9~17.6m間が最大で1.7mを示す。砂層は淡黄灰色系を基調とし、中~粗砂粒を主体とする。全体に30mm以下の礫を多く混入し、含水量は多い。

3) 金武礫層

洪積層の最下部に分布する地層で、西区金武の丘陵地に段丘層として露頭している。分布はNo.3地点で深度23m付近以深にみられ、色調は黄褐色、黄緑色、黄青色系を呈し、一様に酸化された形跡を示し、風化が認められる。土質は礫混じり粘土質細~中砂より成り、礫の多少や細井粒分の差により、砂礫状や砂質粘土状を示すところもみられる。

礫の種類は花崗岩、頁岩、砂岩などさまざまで、最大50mm程度のものを含む。これらの礫の大部分は "腐れ礫"で脆く、指で容易に砕けるものもある。含水量は上位の博多粘土層と比べて少ないが、部分 的に多い部分もみられる。

3. 第三紀層

本層は、No.3地点の深度35m付近以深に分布する堆積岩類である。岩質は砂質頁岩より成り、炭質物を含む。この内上部の厚さ1.4m程は強風化のために変色し、土砂状を呈する。下部についても風化は進行しているが、軟岩状で掘進に際しては礫状を呈する。

参考文献

磯望・下山正一・池崎譲二ほか1991「博多遺跡群周辺における遺跡形成環境ノ変化」『日本における遺跡形成環境の変化』横山浩 一先生大鑑記念事業

大庭康時1992 「中世都市遺跡の調査=博多」『季刊考古学』第39号雄山閣

1995「大陸に開かれた都市博多」『中世の風景を読む一七東シナ海を囲む中世世界』新人物往来社

亀井明徳1986 「日本貿易陶磁史の研究」 同朋社

川添昭二1975「鎌倉時代の大概姦計と文物の流入」『岩波講座日本歴史6中世2』岩波書店

1987 「鎌倉中期の対外関係と博多一承天寺の開創と博多綱首謝国明」

1988 「鎌倉中期の対外関係と博多」『鎖国日本と国際交流』上巻吉川弘文館

1988『よみがえる中世 (一) 東アジアの国際都市博多』平凡社

佐伯弘次1987「中世都市博多の発展と息の濱」『日本中世史論攷』川添昭二先生還暦記念会

1993「中世の博多袖浜をめぐって」『法哈達』第2号博多研究会

福岡市博物館1992「博多と堺」展図録

博多研究会編1992~『法哈達』第1~4号

宮本雅明1989「空間志向の都市史」『日本都市史入門一空間』東京大学出版会

福岡市都市整備局交通計画課1992「川端地下駐車場土質調査報告書」

Ⅱ.調査の記録

1. 発掘調査の方法と経過

博多遺跡群は、弥生時代から中・近世までの複合遺跡である。それ故に調査地点によって若干の差異はあるものの基盤層となる黄白色砂層までの間には、1~5mにも及ぶ遺物包含層が堆積しているのが通有であり、この遺物包含層中には、幾面もの遺構面が重層的にあるが堆積土壌の変化は少なく、部分的に整地層が確認されても面的な拡がりとして捉えがたいのが一般的である。第89次調査区もその例に漏れない。試掘調査の所見によると、調査区の北東部では地表下約220cmと300cmの深さの2面で井戸跡や土壙などの遺構が検出されている。時期的には上面が近世、下面は15~16世紀頃とされるが下面の遺構は上層より掘り込まれた可能性も指摘されている。

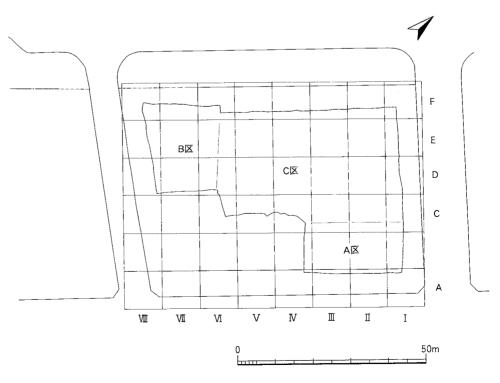
しかしながら、調査区内には戦災復興時の撹乱層が予想よりも深くまで達していた。加えて時間的な制約から試掘調査で確認された上層の遺構面は充分に掴みきれず、結果として一面的な調査となり遺構の切り合いや出土遺物によって遺構面を判断した。また、発掘調査では、重複する数多くの遺構や深い井戸跡などの発掘に時間を要した。殊に、石積土壙や建物跡基礎石列の検出やその記録には多くの時間と労力を費やし、調査の進捗に支障をきたす原因となった。その結果として、調査の終盤では遺構や遺物の検出に疎漏が生じたり、生活面のダメ押しを割愛せざるをえなかった。一方で、このような石材を用いた構築物は、土壙などより構築面や構造が把握しやすく切り合いや出土遺物から構築時期やその順序を比較的容易に推定し得る利便性も備えている。

発掘調査は、表土層の除去を重機で行い、包含層と遺構は人力によって掘り下げた。しかし、石積 護岸跡から西側の埋立地の堀下げは、A区では人力によったがC区では時間的制約から上~中層は重 機を使用して掘り下げた。そのためにC区の出土遺物はA区に比べるとはるかに少ない。

調査区は、調査順にA~C区に便宜的に区切って設定したが、天井石の崩落で発見した「博多大水道」部はD区とした。調査区内には、長軸に合わせて10×10mを一区画とするグリッドを設定し、北

A~F、北東-南西軸 を東からI~WIに分 け、その組合せで呼 称している。尚、長 軸の座標は、文化財 調査用の「博多地区 遺跡基準点 より延 引し、約39°東へ振 れている。また、調 査時は北東方向を東、 南西方向を西と仮称 した。写真の撮影方 向は、この調査時の 仮称を使用しており、 本文中の方位もこの 仮称による。

東ー南東軸を南から



6. 調査区とグリッド位置図(1/1,000)

発掘調査は、事前の協議に基づいて調査区全体を便宜的にA~C区に3区分し、家屋解体の終了した区画より順次着手する手順をとった。調査は、既に家屋の解体作業を終えたA区の表土層の剥ぎ取り作業を1995(平成7)年4月25日から先行して開始し、B~C区の順に実施して契約終了日の11月30日にすべての調査を終了した。ただし、条件整備の遅れから遺構面の調査に取り掛かったのは5月16日からである。また、この間には梅雨期の長雨による冠水やC区内に建つビルの解体作業の遅延から調査の中断が余儀なくされ、加えて天井石の崩落によって「博多大水道」(D区)の所在が明らかになり新たな調査が増え事前の調査工程には大きな齟齬が生じたが、関係者諸氏の協力によってつつがなく終了しえた。殊に、調査終了真近の11月には、雨中でも発掘作業を続けたが、この悪条件の中で発掘作業に従事された人々や無理な日程の中で写真撮影をされた写測エンジニアリング(株)、空中写真企画社の技術者諸氏には重ねて謝意を表します。

なお、発掘調査の時間的経過は概ね以下のとおりである。

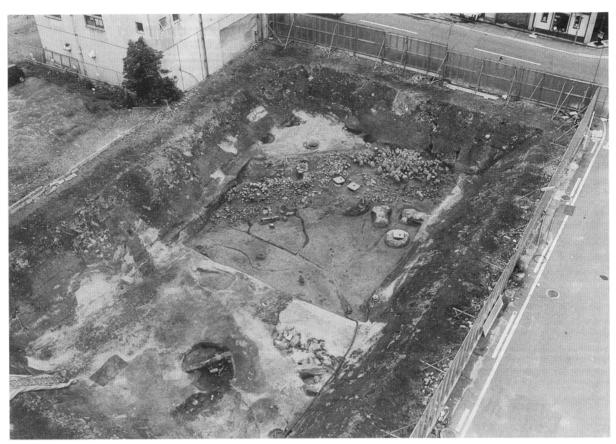
- 4月25日 A区の表土層のすき取り作業開始
- 5月10日 事務所への発掘器材搬入
- 5月16日 A区の発掘調査開始
- 5月25日~6月15日 B区の家屋解体作業
- 6月15日 再開発組合、都市未来ふくおかとの工程協議
- 6月21日 A区全景写真撮影
- 6月28日 A区の調査終了
- 6月30日~7月13日 雨が降り続き発掘作業は中断
- 7月20日 B区の表土層すき取り作業開始

B区の表土でA区を埋め戻す

- 8月3日 都市未来ふくおか、大成建設とのC区(松永測機、リンナイビル)の解体工程協議
- 8月11日 B区全景写真撮影
- 8月20日 C区の松永測機ビル解体完了
- 8月21日~9月15日 C区のリンナイビル解体 解体作業中は隣接するB区の発掘調査は中断
- 9月13日 C区の表土剝ぎ作業開始

C区の表土でB区を埋め戻す

- 9月19日~10月2日 博多大水道の調査
- 9月28日 C区の調査開始
- 10月24日 再開発組合、都市未来ふくおかとの工程協議
- 11月11日 C区全景写真(空中写真)撮影
- 11月20日 「歴史と自然を守る会」遺跡見学会
- 11月22日 「博多区我が町ウォッチング」遺跡見学会
- 11月24日 石積護岸跡の写真測量
- 11月25日 石積護岸跡の全景写真(空中写真)撮影
- 11月27日 再開発組合理事会の遺跡見学会
- 11月30日 調査終了
- 12月4日 C区の埋立地部分の埋め戻し終了
- 12月8日 事務所の撤収



7. A区全景(南より)

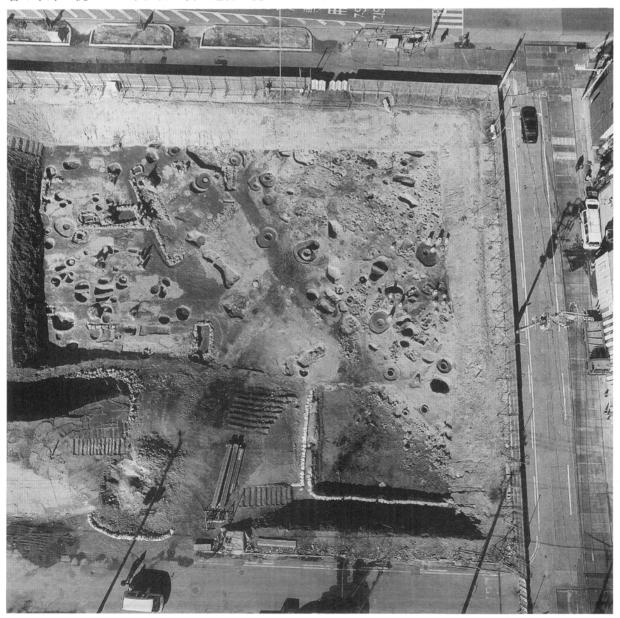


8. B区全景(南より)

2. 基本的層序について

博多遺跡群は、砂丘上に立地した遺跡であり、黄白色の風成砂層をその基盤層としている。この黄白色砂層上に幾層もの人工層(遺物包含層)が堆積し、その中に弥生時代以降の各時代の生活面が堀込まれている。

第89次調査地点は、博多遺跡群を形成するふたつの古砂丘のうち海側の「息の濱」の南西縁にあたり、北から南へ緩やかに傾斜している。そのために博多川に面した南ほど遺物包含層が厚く堆積していた。しかしながら、調査地周辺は、1945(昭和20)年6月19日の大空襲で大半の建物が焼失し、戦後の復興に際して家屋の瓦礫材で厚く整地され、もっとも厚い北(昭和通り)側では現地表下約2~2.5mの深さにまで達していた。そのために全体に1.5~2.5m程の整地層を取り除くと江戸時代中頃の遺構面が検出され、その下層には暗茶褐色~黒褐色土を基調とする中世末から近世初めの整地層がある。この整地層は黄白色の風成砂層上にのっている。ただし、この黄白色砂は基盤層ではなく、1~1.5mほどの層中に灰色の薄い粘性砂を互層的に含んで灰黒色粘性土(ヘドロ)層に達する。この粘性土層には箸や木片に混じって中世初め頃の遺物が混入しており、この頃には潟であったと推定される。



9. C区全景(南より)

3. 調査の概要(2)

第89次調査区は、博多遺跡群を形成するふたつの古砂丘のうち海側にある「息の濱」南西部の砂丘が那珂川にむかって傾斜をはじめる縁辺にあたる。そのために遺物包含層は、北東側が薄く、西~南側に厚く堆積しているものと想定され、試掘調査でもそれを裏付けるような報告がされている。しかしながら、調査地内は戦災復興時の瓦礫整地層が予想以上に深く、加えてビル建築の基礎杭や地下室のために試掘調査で確認されていた2面の遺構面はC区の一部を除いては良好な状態では検出できなかった。

発掘調査は、既存家屋の解体工程に沿う形で進めることとし、調査対象地をA~C区の3調査区に便宜的に区分してA区からB区、C区の順に実施した。まず初めのA区の調査では、調査区の北部の弧状の狭小な範囲で黄白色砂の風成砂を検出し、その上面には暗茶褐色砂層が薄く堆積していたが、遺物の混入は窮めて少ないものであった。この黄白色砂層上には土師皿を廃棄した土壙と近世~近代の井戸跡があり、その西~南側にはやや粘性をおびた黒灰色土が拡がっていた。そこでこの土層の性格を明らかにするために風成砂層に直交するように土層観察のトレンチ(Dトレンチ)を設定したところ、この風成砂層は南にむかって緩やかに傾斜しておりその斜面に沿って人頭大~拳大の円礫が並んでいた。この円礫群は、下面ほど大きく、しかも比較的整然と積まれていることから浜の護岸施設であると判断した。一方、埋め立て土の黒灰色土層下には細~粗砂層が互層的にあり、その下層には黒褐色のヘドロ層が堆積しており該期には干潟状を呈していたものと思われる。

次に、西端のB区では厚さ1mほどの瓦礫層下で建物跡基礎石列や石積土壙、土壙等を検出した。このうち33号土壙からは、16世紀中葉~後葉の肥前磁器が多量に出土した。B区では、この遺構面下には黒~茶褐色土層と砂層が互層的に堆積するのみで遺構面は検出されなかった。また、調査区の南側にはほぼ中央に既存建物の地下室があり、調査域から除外した。

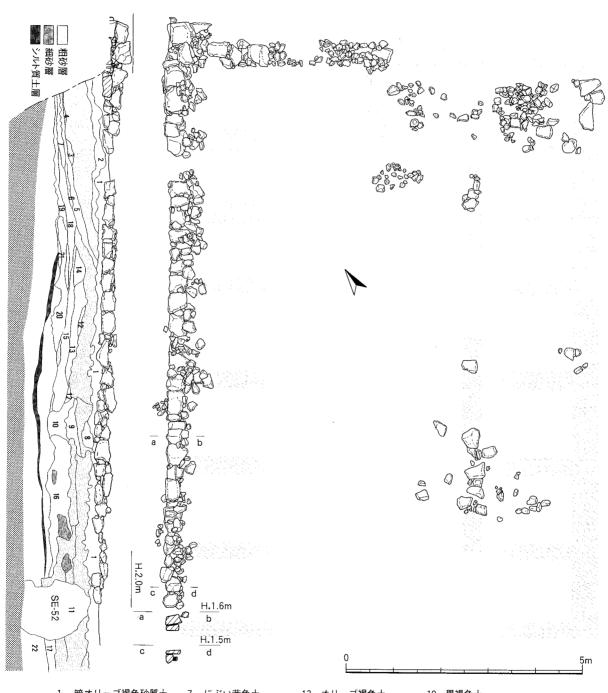
更に、調査区の大半を占めるC区では全域にわたって建物跡基礎石列や石積土壙、土壙、井戸跡等を検出した。調査区の中央部にはA区から続く護岸跡が弧状に長く延びている。その護岸跡の北端部には平石を浜底に敷き並べ、護岸の前面に割石を積み重ねた石敷きの施設が検出された。この護岸跡を境として北側の風成砂層上と南側の埋め立て地上では建物跡や石積土壙の在り方にやや異なった様相がみられる。護岸跡の北東側の風成砂層上には、柱穴内に平石を敷いて礎石とした掘立柱状の建物跡や拳大の円礫を帯状に敷き詰めて基礎石列とした比較的簡便な建物跡が拡がり、大石で築いた石積土壙も1基と少ない。これに対して護岸跡の南西側の埋立地跡では大きな割石や礫石で築いた大型の建物跡や石積土壙がまとまって分布している。調査区全域に拡がる井戸跡や土壙との間にはその在り様に大きな違いがある。いずれにしても埋立事業が完了した後は、比較的早い時期に新街区化し商人街が形成されていったものと思われる。一方、護岸跡の北東側の風成砂層上には遺物的にみて複数期の遺構面が存在しているが、瓦礫層が砂層近くにまで達していたために一面的な調査にならざるをえなかった。また、護岸跡の南西側の調査は、唯々時間的制約から護岸跡の検出にのみ終始した。そのために調査範囲も狭く、しかも上~中層の整地層は重機によって除去したためにA区のような多くの遺物は検出できなかった。

発掘調査で検出した遺構は、呼称をその機能ごとに建物跡をSB、溝遺構をSD、井戸跡をSE、石積土壙をSQ、土壙をSKとして記号化し、その後にすべての遺構を通して検出順に01からの番号を付した。ただし、土壙の中には性格やプランの曖昧な不整形土壙(SX)も含まれている。また、柱穴(SP)に限っては混乱を回避すめために1001からの番号を付した。本書中では、遺構名、遺構記号を併記して使用している。

4. 第1期の遺構(付図1)

第1期としたこの時期は、調査区の南東端から北西へ弧状に延びる護岸跡が、埋立事業の完了によっ て無機能化した後の17世紀から19世紀にかけての長い間のもので、江戸時代と呼ばれる時期のもので ある。しかしながら、その中心をなす時期は17世紀中葉から18世紀前半のものであり、大まかには17 世紀中葉から後葉と17世紀後葉から18世紀前半の時期とに細分することが可能である。

検出された遺構も基礎石列をもつ大型の建物跡や石積土壙、土壙、井戸跡などと多様である。その



- 1. 暗オリーブ褐色砂質土
- 2. オリーブ褐色砂質土
- 3. 黒褐色土
- 4. オリーブ黒色土
- 5. にぶい黄色土
- 6. オリーブ黒色土
- 7. にぶい黄色土
- 8. オリーブ褐色土
- 9. オリーブ褐色土 10. 暗オリーブ色土
- 11. 褐色土 12. オリーブ褐色土
- 13. オリーブ褐色土
- 14. 暗オリーブ褐色土 15. オリーブ褐色土
- 16. オリーブ褐色土 17. 暗灰黄色土 18. 灰オリーブ色土
- 19. 黒褐色土
- 20. 灰オリーブ色土 21. 暗オリーブ色土
- 22. オリーブ褐色土 23. 灰オリーブ~オリーブ褐色土

10. 22号建物跡実測図(1/80)

在り方は遺構によって多少の差異はあるものの調査区全域にわたって広範に、かつ濃密に分布している。出土した遺物には、陶磁器を初め土師器や瓦質土器、瓦、石製品、土製品のほかに銅銭、火箸、灰匙等の銅製品や櫛、漆器等の木製品があり、多様性に富んでいる。なかでも陶磁器は圧倒的に肥前窯系のものが多く、比較的早い時期から流入しているのが特徴的である。貿易都市としての機能を消失した後、鎖国後の国内流通拠点としてあるいは消費都市として都市機能の転換を図る近世都市博多の一面性として捉えられよう。また、「博多大水道」は、埋立都市の環境改善を企図した都市計画事業の一貫として把握されよう。いずれにしても文献資料を裏付けるものとして有為なものである。

1). 建物跡

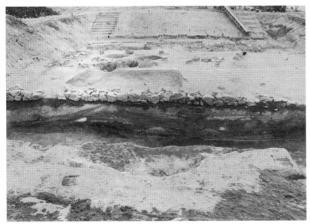
建物跡には、基石列を伴った大型の建物跡と掘立柱建物跡とがあり、基礎石列をもつ建物跡は6棟、掘立柱の建物跡が7棟の13棟を検出した。このうち基礎石列をもつ建物跡には、大きめの割石を外側に面を揃えて基壇状に数段積み重ねたものと拳大の円礫を帯状に敷き詰めて基礎石列としたものとがある。規模的には前者がはるかに大きく、後者は比較的小規模なものである。その機能とともに構造的な差異に起因するものと考えられる。また、掘立柱の建物跡は、柱穴内に平石を敷いて礎石とした比較的簡便なものであり、基礎石列をもつ建物跡との間には根本的な機能の相違があることが容易に想起される。分布的には、掘立柱建物跡が調査区の北隅部の風成砂層上にまとまり、基礎石列の建物跡はその西側の埋立地上に方向性を持つようにして占地している。時期的には、16世紀中~後葉に納まり得るが、掘立柱建物跡は土師皿のほかには小量の陶磁器小片があるのみで明言できず護岸跡の機能していた16世紀代に遡る可能性も否定できない。



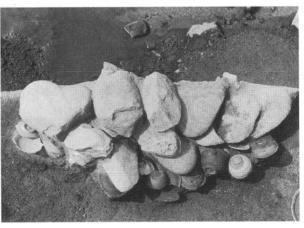
11. 22号建物跡全景(西より)



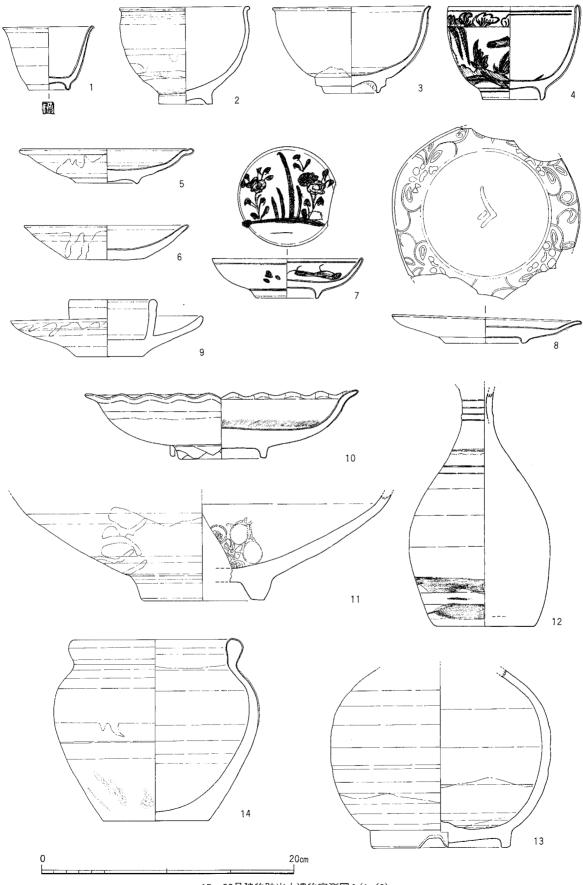
12. 22号建物跡東桁行基石列(北より)



13. 22号建物跡北梁行基石列土層断面(北より)



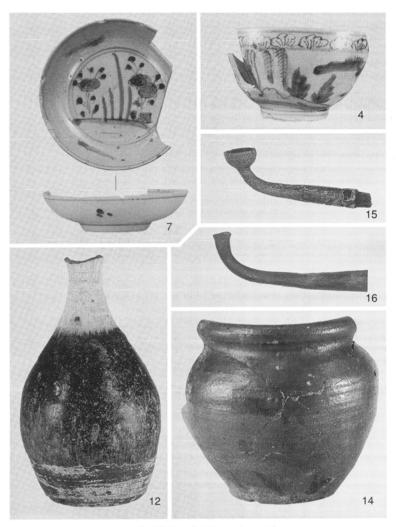
14. 22号建物跡北梁行基石列裏込め遺物出土状況(南より)



15. 22号建物跡出土遺物実測図1(1/3)

22号建物跡(10~14)

22号建物跡は、B区の北側にある 東西棟の基礎石列をもつ大型の建物 跡である。東側には約6mの距離を隔 てて91号建物跡が棟筋を同じくして 並んでいる。基礎石列は、北桁行側と 東梁行側が良好な状態で遺存してい る。北側桁行は全長12m、南側桁行は 東側に3~4石の基底石を残すのみで ある。東側梁行は9mを測るが、東側 は調査区の境界縁にあたり隅角部は 検出できていない。建物跡の大きさ は、桁行が7間、梁行が5間の規模と なるが、南側桁行の内側1間半や東側 梁行の内側1間のところには基礎石列 に並行する基石列が一部に残ってい る。同時に北側桁行の内側には、おお よそ1間ごとに南側桁行にむかって突 き出した石塊があり、布基礎の可能性 がある。基礎石列の組み方は、基本的 には30~60cm大の割石を外側に面を 揃えて横位に据え、その上に小振りの 平石を数段積み重ねて上面のレヴェ ルを揃えている。しかし、基石のやや 小さいものは同程度の石材をその下

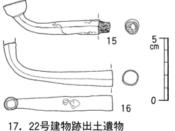


16. 22号建物跡出土遺物(1/2·1/3)

に敷き詰めて用材を補うとともに全体の安定を図っている。また、基石列の内側には、拳~掌大の円礫を詰めて裏込めとしている。この中には17世紀前半~中葉の肥前窯系の陶磁器が混入している。

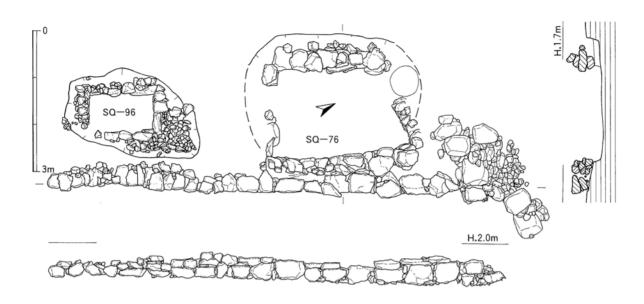
出土遺物(15~17)

1は、肥前焼の白磁小坏で、口径7.2cm。口縁部は小さく水平に摘み出す。高台の内面には砂目が付着し、外底面には「福」の銘がある。2·3は17世紀前葉の国内産陶器碗。4は1630~40年代の肥前焼染付磁器碗で、口径10cm、器高7.4cm。体部には草花文と柳文を描く。5は鉄釉の肥前陶



17. 22号建物跡出土遺物 実測図 2 (1/3)

器溝縁皿で、1600~30年代の作。口径13.4cm、器高2.7cm。6は糸切りの鉄釉陶器皿で見込に重ね焼きの跡が残る。7は肥前焼の染付皿で、見込には草花文、内面には魚文を描く。8は陽刻文を配する肥前焼の白磁皿で、釉はぎ痕がある。いずれも1650~60年代。9は糸切り底の肥前陶器灯明皿で、器高4.5cm。10は在地系の陶器皿で、口縁部は輪花形をなし、鉄釉と藁灰釉を掛分けている。11は陶器大鉢。12・13は肥前焼の陶器瓶。12は頸部は藁灰釉、胴部は鉄釉の掛分け。1590~1610年代の作。14は17世紀前半の肥前陶器壷。鉄釉で内底面には緑釉が付着している。15・16は煙管の雁首。15には吸い口とを繋ぐ竹管が残っている。

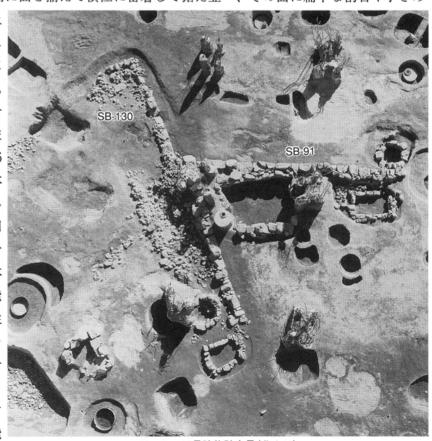


18. 91号建物跡実測図(1/60)

91号建物跡(18・19)

91号建物跡は、C区西隅部の $E-V\cdot W$ 区に位置し、西方約6mの距離には棟筋を並べた22号建物跡がある。建物跡は、堅固な基礎石列をもつ東西棟の建物跡である。基礎石列は東側梁行が130号建物跡によって切られ、南側桁行は7.3m残すのみである。そのために全容は明らかではないが、桁行は4間以上になる。これからすると梁行は少なくとも3間以上が想定される。基礎石列は、22号建物跡と同じく $40\sim60$ cm大の割石を外側に面を揃えて横位に密着して据え並べ、その面に扁平な割石や小さめ

の角礫を2~3段積み重ねて上 面のレヴェルを揃えて水平に している。内側には裏込めに 拳~掌大の礫石を詰めている。 また、基礎石列の内側には76号 石積土壙と96号石積土壙が並 んで接している。このうち、76 号石積土壙は、基礎石列と壁体 を接し、その構築方法もほとん ど大差ない。加えて石材も同 じであることからすると76号 石積土壙は、91号建物跡と一体 のもので、その半地下蔵的機能 を備えたものであった可能性 も考えられる。出土遺物がな く時期は明らかでないが22号 建物跡と同時期が考えられる が、76号石積土壙の遺物からす ると18世紀前葉まで降る可能 性もある。



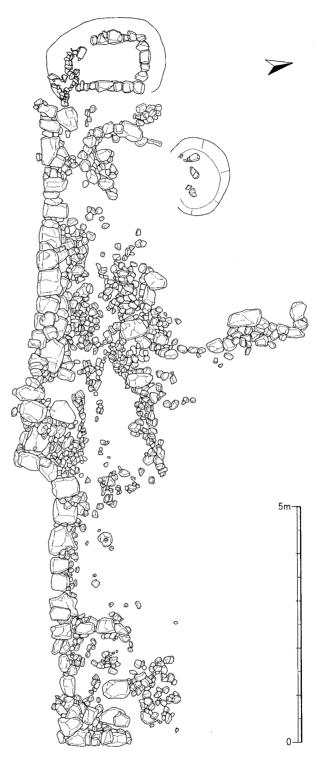
19. 91・130号建物跡全景(北より)

1 3 0 号建物跡(2 0)

130号建物跡は、B区西部のD-W~E -V区にある南北棟の大型建物跡の基礎石 列で、91号建物跡よりも新しい。基礎石列 は、西側桁行が13.4mで約7間半、梁行は北 側桁行基石列の隅角から東へ4.3m ほど円 礫群がのびており、少なくとも2間半から3 間はあるものと考えられる。基礎石列の石 組みは、基本的には40~70cm大の大きな割 石を外側に面を揃え横位に密着して並べて 基石とし、その上に平石や角礫を丁寧に積 み重ねて上面のレヴェルを揃えている。基 礎石列の内側には平瓦片や拳大の円礫が層 状に厚く積み重ねられており、暗渠的な機 能を想起させる。また、東側梁行から2.5m のところには北へのびる基石列がある。一 方、西側梁行の南隅角部には90号石積土壙 が建物跡内に取り込まれる様にしてあり、 89号石積土壙が外壁に沿うようにして位置 している。建物跡内からは、17世紀前半~ 中葉の肥前碗や皿、擂鉢等が出土してい る。

出土遺物(21)

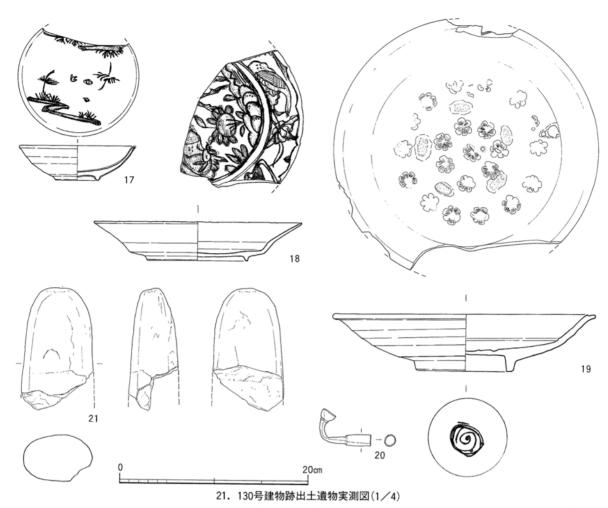
17は、1630~40年代の草流水文の肥前染 付磁器碗で、高台畳付には目砂が付着している。18は、景徳鎮窯系の染付磁器皿で、 口径は22cm。見込には花文と鳥文を描き、 口唇部には波状の浅い切り込みが入る。19 は17世紀前半の印花文装飾の高台付鉢。印 花文は、見込の中心部に1個、内周に7個、 外周に14個が印刻されているが、外周の印 刻は押圧が弱く不明瞭なものが多い。釉薬 は、茶褐色釉。見込と高台に重ね焼きの目 跡が5個あり、高台内にはヘラ記号状の渦 巻き文様がある。20は、煙管の雁首。21は 玄武岩質の磨製石斧基部片である。



20. 130号建物跡実測図(1/80)

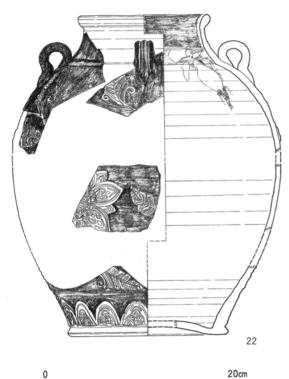
133号建物跡(22~24)

133号建物跡は、E-IVにある基礎石列で、130号建物跡の東側に接して位置する。新旧の順は明らかでないが、状況からして130号建物跡が新しいようである。基礎石列は、南北に約4mの距離を隔てて東西方向に並ぶ。基礎石列の長さは、南側が約4m、北側が1.6mで棟筋は南北方向にとろう。

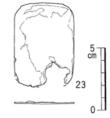




22. 91・130・133・145号建物跡全景(西より)



23. 133号建物跡出土遺物実測図1(1/4)



24. 133号建物跡 出土遺物実測図 2(1/3)

基礎石列は、20~30cm大の角~円礫を数段密に敷き重ねているが、北側列の外縁には40~70cmの大きな割石があり円礫群が基石の根石あるいは裏込めの可能性もなくはない。

出土遺物(23・24)

22は、三彩の四耳壷である。口径 14cm、底径17cm、器高は34cmになろ

う。体部は緑色釉をベースに黄色釉と茶色釉で草花文を描く。また、口頸部内面には緑色釉、胴部内面には光沢のない茶色釉が施釉されている。23は、銅製の板状金具で、隅丸長方形をなす。幅は4.6cmで長さは6.7cmになろう。厚さは約1mmである。

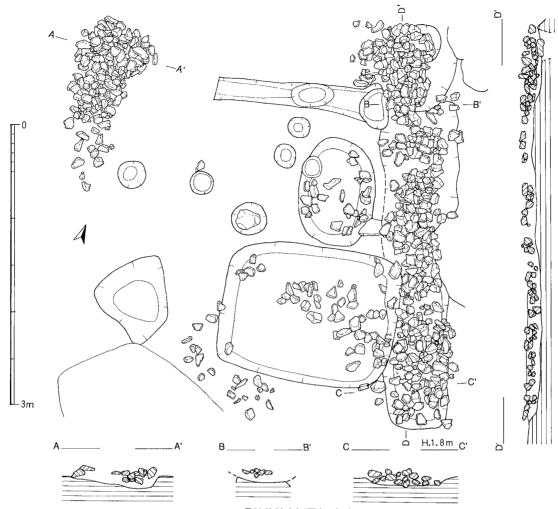
145号建物跡(22・25・240)

145号建物跡は、C-V区にある基礎石列をもつ東西棟の建物跡である。基石列は3.8mほどが北側に面を揃えて遺存している。構造的には22号建物跡等と同じく40~60cm大の割石を横位に密着して据え並べ、その内側や下

面に拳~人頭大の角礫を詰めて根石や裏込めとしている。基礎石列は、溝状の堀方の中に据えられている。この基石列の東側延長線上には139号溝が直線的に延びており、堀方の続きかとも考えられる。この場合、基礎石列の長さは12m余で桁行全長は22号建物跡とまったく同規模となる。また、北方の



25. 145号建物跡全景(北より)



26. 183号建物跡実測図(1/40)

91号建物跡とは約12mの距離を隔てて向かい合う。22号建物跡や91号建物跡と同時期に街筋を構成していたものであろうか。「六右衛門」印の丸瓦(996)が出土している。

183号建物跡(26・27)

183号建物跡は、C区北部のE-II区にある南北棟の建物跡で、大型の基礎石列をもつ22号建物跡や130号建物跡等とはやや離れて位置している。基礎石列は、浅いU字の溝状の堀方のなかに拳~掌大の円礫を折り敷くように密に充填して積み重ね、上面はややフラットに整えている。また、円礫群の下面には茶褐色砂を敷き詰めている。構造的には、大きな割石材を敷き並べて堅固に築いている22号建物跡や91号建物跡、130号建物跡等とは根本的に異なる。これは単にその規模とともに機能の違いによる上部構造の相違に起因するものと考えられよう。東側桁行の長さは4.2m、梁行長は3.8mを測る。円礫群の中からは、土師皿や瓦質の壷片のほかに石鍋等が出土しているが量的には全体として少ない。22号建物跡等の大型の建物跡群よりやや古い傾向があり、17世紀以前の第2面の遺構である可能性もなくはない。

出土遺物(28・294・295)

24は、口径9.6cmを測る皿類の石鍋である。体部はストレートに窄まり、鍔は小さく水平に削り出している。25は、滑石製の有孔円盤状の石製品で、復原径は3cm、厚さは9mmを測り、真ん中には7mmの方形孔を穿っている。1464~1473は開元通寳から政和通寳までの中国銭である。1513は土錘。

2 1 5 号建物跡(2 9)

2 1 5 号建物跡は、C区北部のE-Ⅱ区にある東西棟の掘立柱建物跡で、216号建物跡と重複してい



27. 183号建物跡全景(北より) る。1間×2間の建物で、柱筋を $N-62^\circ-E$ にとる。梁行全長は2m、桁行全長は $3.9\sim4$ m で柱間は2.3 $m\cdot1.6$ m である。

2 1 6 号建物跡 (2 9)

216 号建物跡は、C区北部のE-II区にある1間×1間の東西棟の掘立柱建物跡で、215号建物跡と柱筋をほぼ同じくして重複している。梁行全長は $1.9\,\mathrm{m}$ 、桁行全長は $2.7\,\mathrm{m}$ で中柱がつく可能性もある。

2 1 7 号建物跡 (2 9)

E-II区にある2間×1間の掘立柱建物跡で、柱筋をN-65°-Eにとる。 $梁行全長は<math>1.7\sim1.8m$ 、桁行全長は2.7mで、柱間は $1.3m\cdot1.5m$ である。

2 1 8 号建物跡 (2 9)

2 1 8 号建物跡は、E-II 区にある南北棟の掘立柱建物跡で、柱筋を 2° 出土遺物実測図(1/3) ほど西に振れている。梁行は2m、桁行は3mで、中柱の付く可能性もある。柱穴内には扁平な角礫を敷いて礎石としている。

28. 183号建物跡

2 1 9 号建物跡 (2 9)

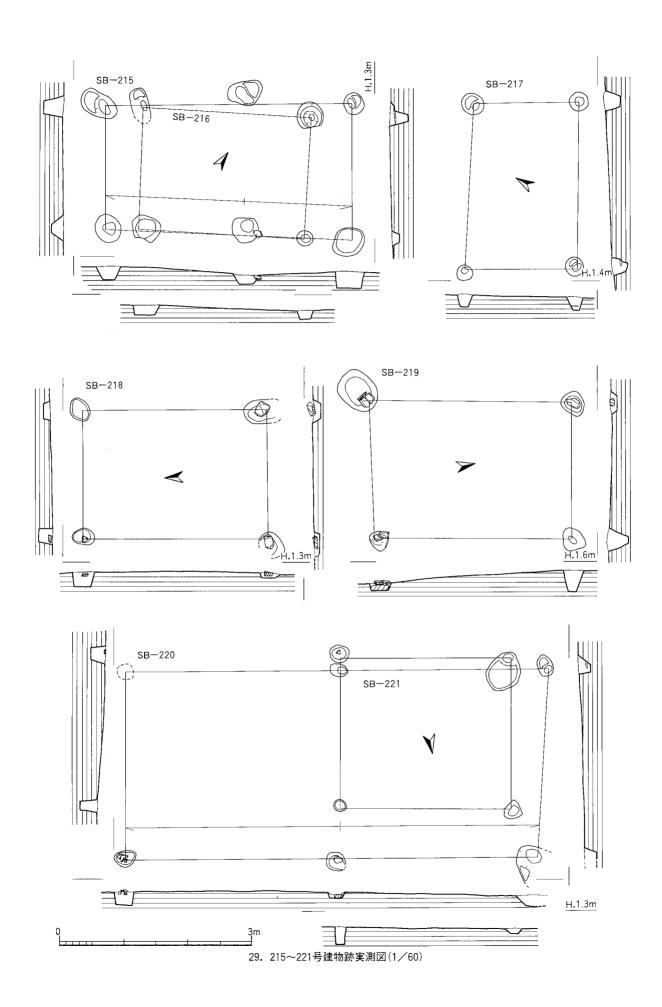
2 1 9 号建物跡は、E-III区にある南北棟の掘立柱建物跡で、柱筋を $N-8^{\circ}-E$ にとる。梁行は2.2 m、桁行は3.2 m で、棟側には中柱の付く可能性もある。柱穴内には礎石に平石を敷いている。

220号建物跡(29)

E-Ⅲ区にある1間×2間の東西棟の掘立柱建物跡で、221号建物跡に柱筋を揃えて重複している。 梁行全長は3m、桁行全長は6.5mで妻側、棟側ともに中柱がつく可能性もある。

2 2 1 号建物跡(2 9)

E-Ⅲ区にある1間×1間の建物跡で、梁行全長は2.4m、桁行全長は2.7mである。



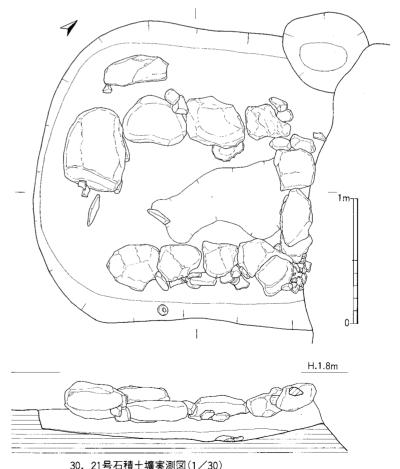
2). 石積土壙 (SQ)

石積土壙は、円形~方形、長方形プランのものをすべてで18基を検出した。規模的にも小型のもの から大型のものまで大小様々のものがある。構造的には石材を重層的に積み上げて石室状に築いたも ので、中世から近世期の博多では通有にみられるものである。用材としては、大きな割石や川原石を 用いて築いたものと拳大の小さな割石や角礫で築いたやや小型のものとがある。このうち前者は概ね 護岸跡より西側の埋立地上に散在的に分布している。これに対して後者は護岸跡より東側の風成砂丘 上に隣接して分布している。この立地的な相違は、多くは時間的な事由に起因するものと推察される。 第1期のものは前者の一群である。時期的には、概ね17世紀前~中葉のものと17世紀後葉~18世紀前 半のものとがあり、建物跡群と同一期の中で捉えられ何らかの有機的な関わりが想起される。また、 その機能については建物跡群との関わりの中で捉えられ、建物跡に付設した半地下蔵的な用途や便所、 溜め枡としての用途など色々と想起されるが、その幾基かを除いては何を目的として築かれたのか明 言しがたい。

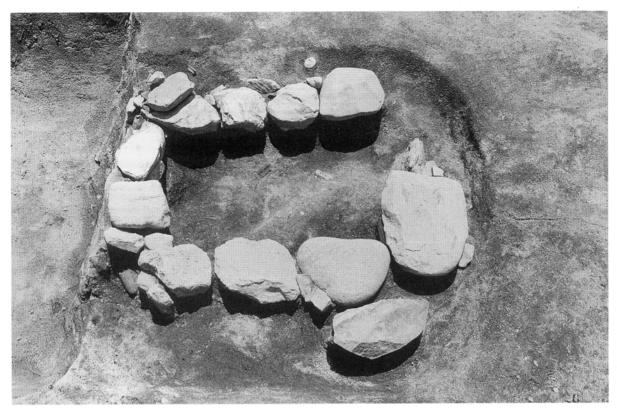
21号石積土壙(30・31)

B区の西隅のE-WI区で検出した石積土壙で、N-43°-Eに主軸方位をとる。石積みは、30~40cm のものと50~70cmのやや扁平な川原石を横方向に接するように並べている。東小口壁側ではその上に 同質の円礫を積み上げている。裏込めには拳大の礫石のほかに平瓦片を充填している。石積みの内法 は、長さ120cm、幅80cmの長方形をなし、高さは30cmである。土壙堀方の平面形は、東小口壁側が撹乱 を受けて消失しているが、幅が238cmで長さは270cmほどになる隅丸方形プランをなそう。壙底は中央

にむかって緩やかに 傾斜する。壁石はこ の壙底の15cmほど上 層に面を造って据え 並べている。北側の 壁面下からは、石材下 面のレヴェルに合わ せて幅10cmほどの板 材が側壁に沿うよう にして水平な状態で 出土した。即断は出 来ないが、全体的に床 板が敷かれていた可 能性も考えられる。 壙底にはやや粘質を おびた灰黒褐色土が 堆積していた。覆土 中からは肥前陶器皿 や擂鉢等が出土して おり、17世紀中葉代の ものであろう。



30. 21号石積土壙実測図(1/30)



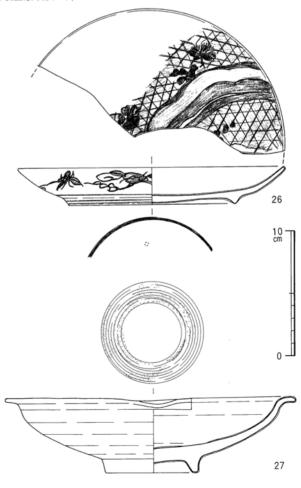
出土遺物 (32·238)

31. 21号石積土壙全景(北より)

26は、肥前磁器の染付皿で、口径は21cm、器高は2.9cm、高台径は13cmで、高台の高さは5mmである。見込には花と格子文を、側面には花唐草文を呉須で描いている。畳付は山形に細くなり、高台外面には2本の圏線が入り、内面には重ね焼きのハリ痕跡が残っている。露胎はやや灰色をおびた白色で、黒色の微粒子が混入している。全体に丁寧に施釉しているが、焼成時の気泡の弾けや異物の付着がみられる。1660~1670年代の所産であろう。

27は、口径が22.8cm、器高は6cm、高台径は7.2cmで高台の高さが9mmを測る中型の青磁の皿である。見込には蛇の目の釉はぎがあり、口縁部には小さく摘み下ろして片口状をなしている。露胎は薄い黄白色で、焼成時の貫入がはいっている。内面にはうぐいす色の釉薬が口縁部外側までかけられているが、口縁部付近は水色っぽく変色している。外面は高台まで全面に透明の釉薬がかけられている。

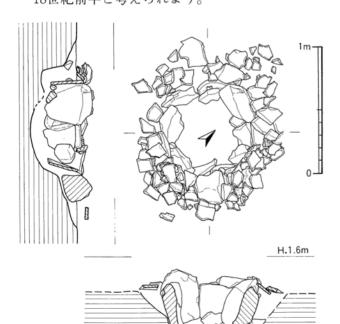
972は、三つ巴文の軒丸瓦である。珠文は9個であろう。



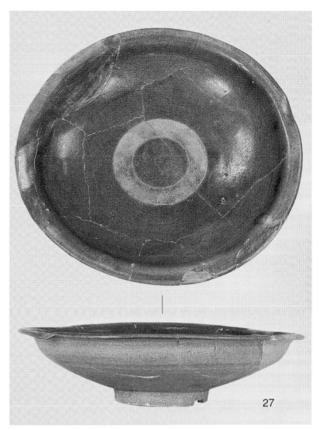
32. 21号石積土壙出土遺物実測図(1/3)

23号石積土壙(34~36)

23号石積土壙は、B区南部のD-W~WI区に 位置する小型の石組土壙で、すぐ西には大量の近 世陶磁器を廃棄した33号土壙がある。石積みは、 素掘りの土壙内に大きめの割石と川原石を円形に 並べた石組の構造をなしている。土壙は、まず初 めに120~150cmのやや楕円形の浅い竪穴を掘り、 次にその中央部に径90cm、深さ30cmほどの竪穴を 掘るいわゆる2段掘りの構造をなしている。石組 はこの2段目の竪穴の壁面に沿って割石や川原石 を縦に据えて円形に並べている。北壁と南壁側で は、底面まで達しない石材と石材との間を繋ぐよ うにその内側に平瓦を立てて用材の不足を補完し ている。立石や平瓦の壁面は、10~15°の傾斜を もたせて上開きに据えられている。凹レンズ状を なす底面は素掘りのままで砂の面まで達してい る。この石組の上面には2~4mの楕円形状の広い 範囲にわたって平瓦の破砕片がびっしりと敷き並 べられており、一体的に機能していたと推察され るが、その機能は判然としない。排水の溜め舛と してはそれに繋がる水路がなく、便所的な性格が 考えやすい。出土遺物がないが、瓦片の一部が33 号土壙を覆っていた状況からすると17世紀後葉~ 18世紀前半と考えられよう。



34. 23号石積土壙実測図(1/30)



33. 21号石積土壙出土遺物(1/3)



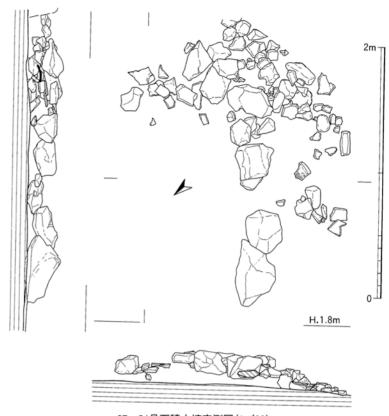
35. 23号石積土壙全景(南より)



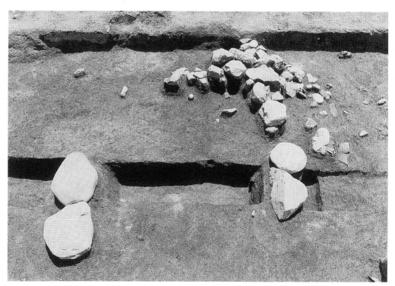
36. 23号石積土壙断面(東より)

2 4 号石積土壙 (37・38)

2 4 号石積土壙は、B区南端のD-Ⅵ~Ⅶ区に位置する石組の土壙で、 すぐ西には23号石積土壙が、また、 北には25号石積土壙がある。石組は 西側側壁と南側小口壁の一部を除い ては、削平による損壊が著しく遺存 状況は良くない。側壁は175cm、小口 壁は60cmほどが残っており、主軸方 位をN-50°-Wにとる。西側壁の 約2mほど対面には40~50cm大の扁 平な2個の川原石が接して並んでい る。移動した形跡がみられないとこ ろからするとこの幅が小口壁の長さ として差し支えはあるまい。これか ら推察すると側壁の長さは240~ 250cmほどの長方形プランに復原で きようか。壁石には、30~50cm大の 割石材を接するようにして水平に並 べ、上面のレヴェルをある程度揃え るようにして据え付けている。構造 的には21号石積土壙と基本的に似通 った特徴をもっている。水平な石材 上に根太材を渡して小屋掛け的な簡 便な建物を構築したと推量すれば、 石材上面のレヴェルを揃える必然的 な要因についてもある程度は説明が つこうか。いずれにしても十分な検 討が必要である。この石組の外側に は角礫や瓦片が裏込めとして充填さ れており、その中に擂鉢片や陶器碗 片がわずかに混入していた。壙底下 の土層堆積には水性の沈殿土層や版



37. 24号石積土壙実測図(1/30)



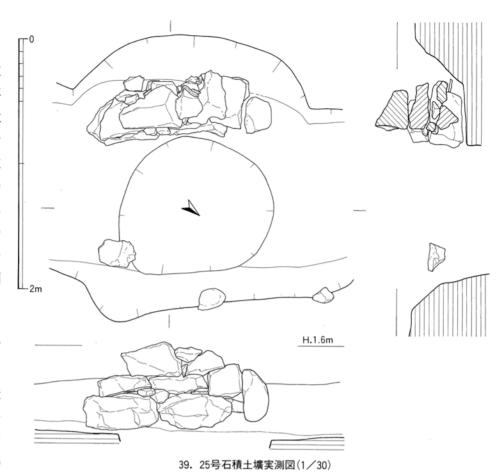
38. 24号石積土壙全景(北より)

築様に突き締めたような状況は確認されなかった。構築の時期は判然としないが、23号石積土壙と大きく変わらない時期に求めることができようか。

25号石積土壙(39・40)

25号石積土壙は、B区南東隅のD-VI区に位置する小型の石積土壙で、すぐ南には24号石積土壙が 隣接しており、その北には22号建物跡が並んでいる。土壙の中央部には現代の井戸跡があり、西側側 壁と北側小口壁の隅石を除いてはそのすべてが消失している。西側壁の長さは120cmで、その堀方の形 状からすると小口壁約80cmほどの方形プランに復原され、主軸方位はN-36°-Wにとろう。

側壁面は、40~60 cm大のやや粗割り の割石2個を横位 に接して据えて腰 石としている。次 に、その上にやや 薄手の割石を横位 に置き、更にその 上面に割石を積み 重ねている。この 積み重ねた割石の 隙間には拳大の割 石を充填している が、平瓦も混じっ ている。裏込め石 も同じであるが、 きわめて簡便な造 り方である。一 方、小口壁は、側 壁の北端に面を接 して築いている。



壁材には30~40cm大の玄武岩質の円礫を用い、縦位に据えて壁体としている。用材の選定や積み方には側壁と小口壁との間に些かの違いがみられる。壁面はほぼ真っすぐに積み上げている。土壙は、長さ210cm、幅190cmほどの隅丸の方形プランになろう。壁面は、緩やかに傾斜して立ち上がり、深さは約45cmである。壙底は、フラットであるが、石材下やその前面は渇~暗茶褐色の土砂が5~10cmほどの厚さで敷き固められていた。この土砂は壁体下はやや厚く、壁前面は中央

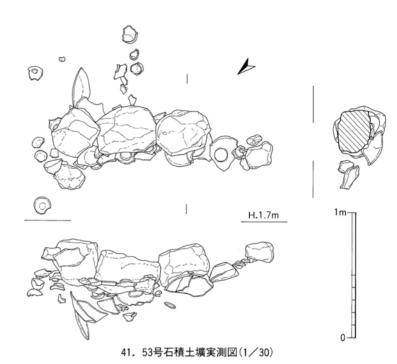


40. 25号石積土壙全景(南より)

部にむかって薄くなっている。撹乱壙による消失で遺物が少なく、時期は明らかにしがたいが裏込め石の中から平瓦片に混じって肥前窯系の陶磁器小片がわずかに出土しており、17世紀後半~18世紀前半頃になろうか。

53号石積土壙(41・42)

53号石積土壙は、B区の北西隅 のF-VII区で検出した石積土壙で、 すぐ南には27号土壙がある。石壁 は、120cmほど連なった3石を残して すべてが消失しており、その全容は 明らかにはできない。仮にこれが側 壁なるとすればN-42°-Wに主軸 方位をとることになり、平面形は一 辺が150~200cmほどの方形プランに 復原できようか。石壁材には、40~ 60cmの大きな割石を横位にして内側 に面を揃えて接するように据えてい る。しかし、壁石下の覆土が、暗灰 ~黒灰褐色の粘質をおびたゆるい土 砂のせいか凭れ合うように傾いてお り、やや安定性にかける。この壁石 の下層の暗灰~黒灰褐色土中からは 肥前窯系の陶磁器や擂鉢、土師皿等 の遺物が重層的にまとまって出土し た。また、これらの遺物は、壙底の 暗褐色砂土層の下にまでおよんでい る。土壙の堀方が明らかでないため に直ちに明言はできかねるが、土壙 の床面を造る際に根占材や裏込め材 として投棄したとも考えられなくは ない。いずれにしてもB区の石積土 **壙の中では遺物的に特筆すべきもの** である。時期的には、ほかの石積土 壙と同じく17世紀の中頃に構築され たものであろう。

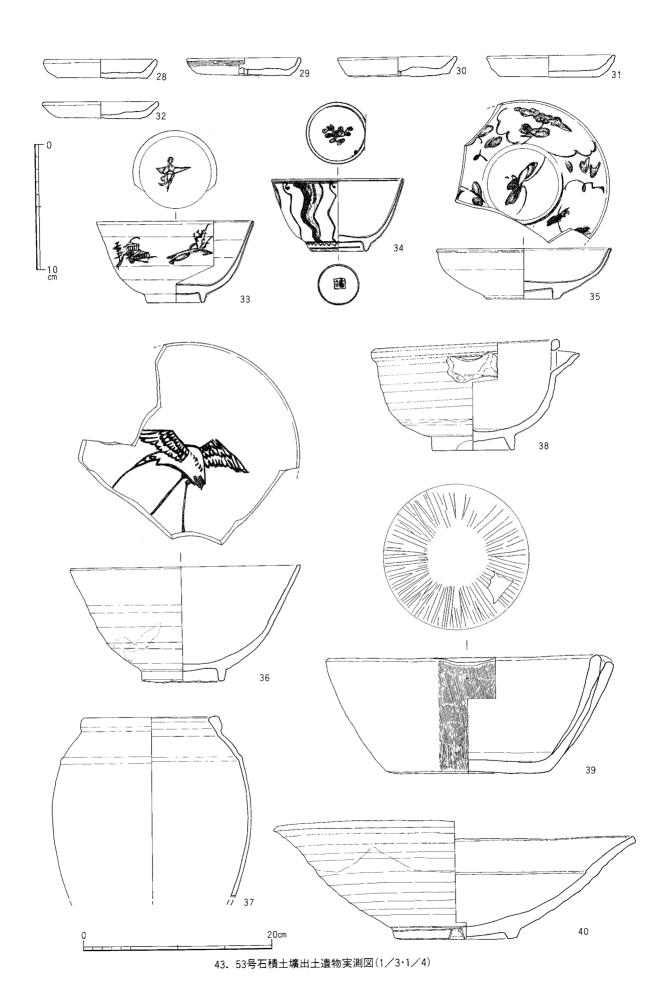




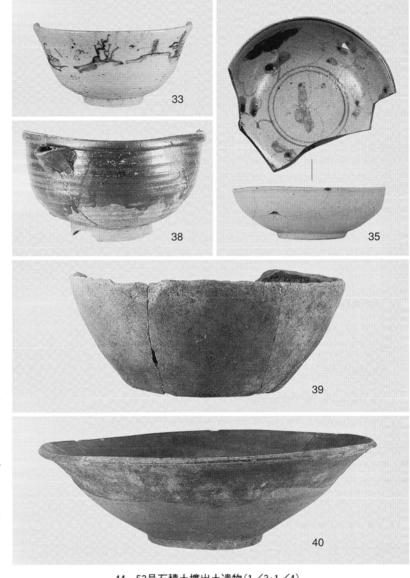
42. 53号石積土壙全景(西より)

出土遺物(43.44)

28~32は、糸切り底の土師器小皿である。いづれも口径は9~10cm、器高は1.2~1.4cmで、29には底部に細い円孔が穿たれている。33・34は肥前磁器の染付碗である。33は、見込に蝶々?を、外面には東屋に山と木を呉須で描いている。釉薬の表面には多くのピンホールがあり、畳付には目砂が付いている。1610~30年代の作。口径は12.4cm、高台径は4.6cm、器高は6.4cmを測る。34は、口径10.4cm、高台径4cm、器高は5.7cm。見込には柿を、外面にはねじ花の文様を描いている。また、高台の内面には「福」の銘がある。1630~40年代。35は、口径13.8cm、高台径5.8cm、器高4cmの肥前磁器染付皿で、1630~40年代の作。見込と内面には蝶々を呉須で描いている。畳付は釉はぎで、砂目が付いている。36は、口径14.2cm、高台径8.8cm、器高13.2cmの国内産の青磁鉢である。見込には1羽の羽撃く



鷺を描いている。釉薬はやや淡 い茶緑色で、鷺は藍色、鷺の中は 淡灰色である。釉薬は透明で光 沢があり、全体に細かい貫入があ る。胎土は淡灰色で、砂粒を含 み、高台の畳付には目砂が付着し ている。製作年代は1630~40年 である。38は、口径20cm、高台径 8.8cm、器高11.8cmを測る鉄釉の 肥前陶器の片口鉢である。見込 には、4個の胎土目痕が残ってい る。高台は、割り高台で兜巾にな っている。17世紀前半頃に製作さ れたものであろう。37は、李朝の 陶器壷で、口径は14.4cmを測る。 肩部には小さな段がある。外面 には斜文、内面には同心円文があ り、叩き後にナデ消している。39 は、瓦質の片口の擂鉢である。口 径は29.1cm、底径は12.5cm、器高 は16.9cmである。調整は、外面が ハケ目、外底面はナデで仕上げて いるが、内面は器表面は剝落が著 しい。淡灰色の胎土に砂粒を多 く含み、濃灰色の色調を呈する。 40は、口径38.3cm、高台径13. 4cm、器高は10.6~12.7cmを測る



44. 53号石積土壙出土遺物(1/3·1/4)

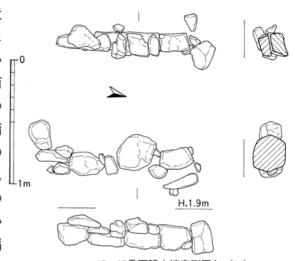
大型の陶器鉢である。釉薬はやや光沢のない小豆色で、内底面は赤褐色をなしている。調整は口頸部 が横ナデ、内面がナデ、外面はヘラケズリで、高台は切高台である。また、頸部内面の屈曲部にはヘ ラ工具でシャープな段を造り出している。胎土には小量の砂粒を含み、焼成は良好である。製作年代 は1600~1620年代である。

65号石積土壙(45・46)

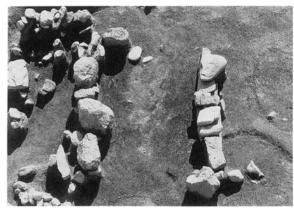
65号石積土壙は、A区東端のD-I区に位置 する小型の石積土壙で、64号石積土壙のすぐ西に 隣接してあり、214号土壙の埋没後に築かれてい m⁰ る。小口壁は消失しているが、東側壁の南端と西 側壁の北端にはそれぞれに矩形に接する小口壁の 石材が残っているが、全体に損失が著しい。平面 形は、石積内法の長さは110cm、幅80cmの長方形の プランを呈し、N -9° - W に主軸方位をとる。 \bigsqcup_{1m} 石壁は、長さ30cm、幅20cm、高さ15~25cmほどの 割石を横位にして水平に据えて安定を保ってい る。西側壁では、その上面に拳~人頭大のやや扁 平な割石を2~3段積み重ねている。壁面は、内側 に面を揃えて据え、真っすぐに積んでいる。これ に対して東側壁は、壁の中程に大きめの礫材が壁 面より内側に突き出している。壁石の隙間にも拳 大の小礫を詰めて補充しており、西側壁に比べて やや粗い石の積み方をしている。土壙は検出でき なかった。床面は、平坦で褐色土砂層で少なから ず敷き固められたような状態にあった。石積みの 覆土中からは、土師皿や瓦質の鉢片、輸入青磁器 片に混じって微量の国産陶磁器小片が出土してい るが、遺物の全体量としてはきわめて少ない。そ のために石積みの構築時期は明言しかねるが、B 区やC区西部の一群と同期と考えて差し支えはな いであろう。しかし、いずれにしても65号石積土 壙だけが単独で立地しており、同期の一群と離れ て砂丘上に占地している所以にはおもしろいもの がある。

73号石積土壙(47・49・50)

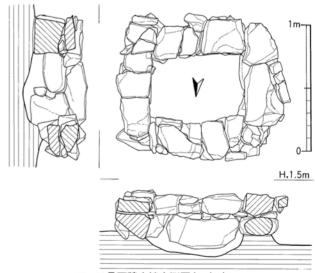
73号石積土壙は、C区の中央部北端のE-IV区に位置し、すぐ西には94号石積土壙がある。石積土壙は、初めに整地層のなかに150~180cmほどの方形の竪穴を掘り、その中に方~長方形の割石を方形に並べて積み上げている。石積みは、縦が20~25cm、横が40~60cmの割石を基本的には横方



45. 65号石積土壙実測図(1/30)



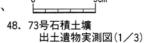
46.65号石積土壙全景(北より)



47. 73号石積土壙実測図(1/30)

向に並べて据えているが、西側小口壁には縦に深く据えた石材もある。次にその基石の上にやや扁平な割石を更に1段積み重ねて上面を水平に整えている。この積み重ねた割石の間には、小振りの円礫を詰め込んでいる。壁面は、内側に面を揃えて目路が通るように丁寧に積み上げている。石積壁の内法は、長さが75cm、





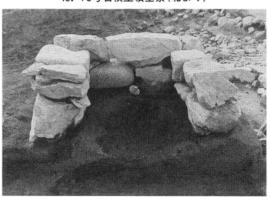
幅が65cm、高さが25~35cmを測るが、上面は削平されており、本来はこの上に数段の割石が更に積み上げられていたものと推測される。主軸方位は、N-83°-Eにとる。壙底は、この腰石の下端から更に10~20cmの深さに掘り込んでいる。床面には不揃いな凹凸があり、断面形は浅い舟底状をなしている。覆土は灰茶褐色~灰黒色土で、縁辺部には粘質をおびた土が堆積していた。石積み内からは、17世紀中頃~18世紀初頭の肥前陶磁器碗や17世紀末~18世紀前半の小石原焼の陶器碗などが出土している。石積土壙の構築時期は、18世紀の前半代に求めることができよう。

出土遺物(48)

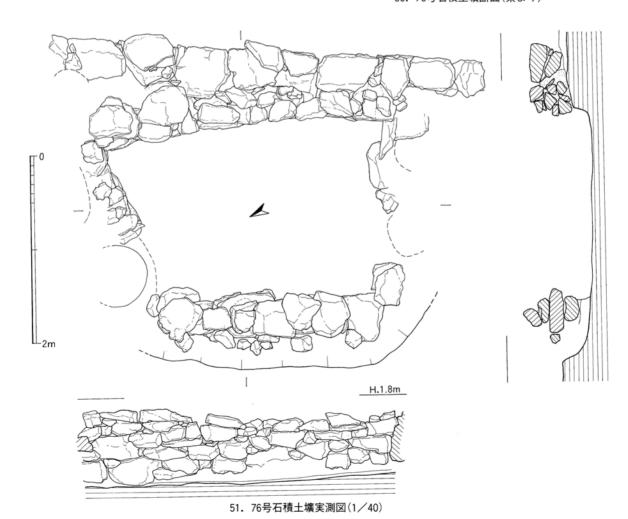
41は、口径7.6cm、高台径3.8cm、高台高4mm、器高4cm を測る。肥前の色絵磁器で、蓋物の碗であろう。体部 はストレートに立ち上がり、外面には花に蝶々の文様 を描いている。高台の畳付は釉はぎで、幅が広い。18 世紀前半の製作であろう。



49.73号石積土壙全景(北より)



50.73号石積土壙断面(東より)



76号石積土壙(51~53)

76号石積土壙は、C区南西部のE-V区にあ り、91号建物跡の基礎石列内に接して占地してい る。また、すぐ西側には96号石積土壙が同じよう に占地して接している。石積みは、小口壁側がビ ル建築物の基礎杭で内側に突き出している。内法 は、側壁長が2.9m、小口壁長が1.9mの長方形プ ランを呈し、N-27°-Eに主軸方位をとる。壁 面は、30~50cmのやや扁平な割石を基底面に横位 に揃えて水平に据え、その上面に同程度の割石を 布積み状に4~5段積み上げている。西側壁は、隣 接する91号建物跡の基礎石列と上面のレヴェルを 揃えるようにしている。小口壁と接する隅石は、 やや大きめの石材を用いている。側壁と小口壁は 重複することなく、隅角を接するようにして連接 している。壁面は、内側に面を揃えて丁寧に積み 上げている。西側壁は基石の外側に礫石を裏込め として厚く充填しており、断面が台形状をなす。 これに対して91号建物跡の基礎石列は、この側壁 面に凭れるようにして築かれている。床面は、中 央部が浅く凹むが全体に平坦で、比較的堅く敷き 固められ、水性の堆積層は認められなかった。こ

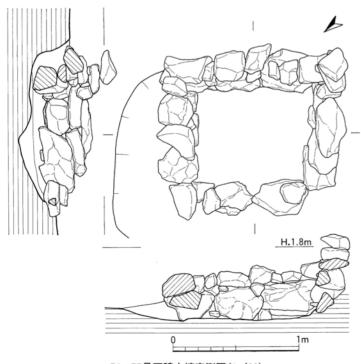


52.76号石積土壙全景(北より)



53.76号石積土壙南側壁(北より)

れらのことから76号石積土壙と91号建物跡は一体のものであり、基礎石列をもつ大型の建物の地下蔵的な機能を有していたものと推測される。18世紀前半の時期のものであろう。



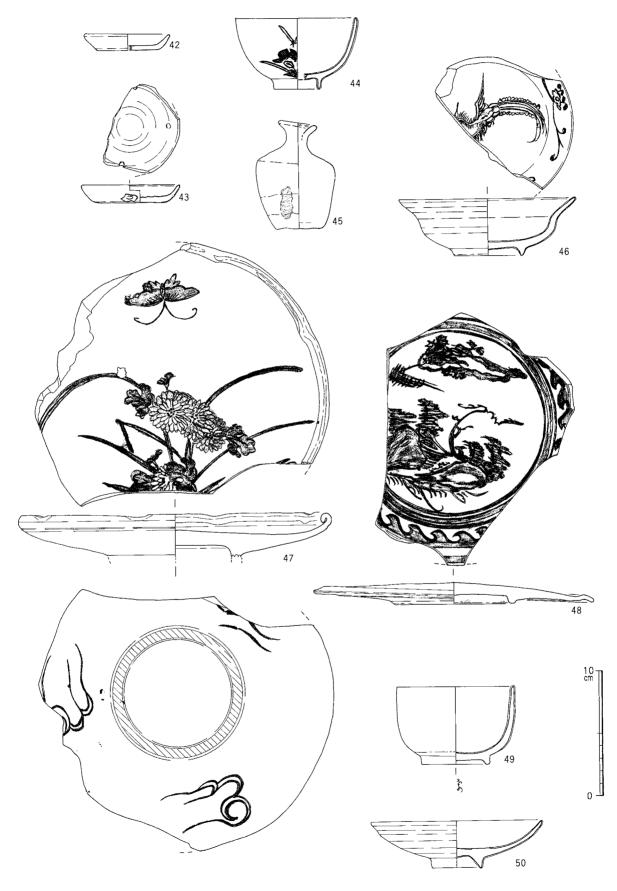
54. 77号石積土壙実測図(1/30)



55. 77号石積土壙全景(東より)



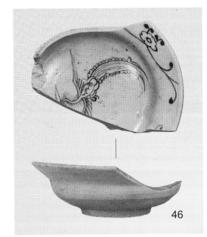
56.77号石積土壙断面(東より)



57. 76·77号石積土壙出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(57・58・294)

42・43は、土師器小皿である。42は口径7cm、器高は1.3cm。43は口径8cm、器高は1.4cmで、体部と底部の境には二対の小孔を穿っている。44は、口径9.6cm、高台径3.8cm、器高は5.6cm。肥前の色絵磁器碗で、外面には蝶々文を描いている。17世紀末~18世紀初。45は、備前系の陶器小壷で、口径3cm、底径3.8cm、器高は8.6cm。胎土は赤茶色。46は、肥前の染付磁器皿で、畳付は釉はぎ。見込には鳳凰文、内面には花文を描いている。口径14cm、器高は4.4cm。1610~30年の作。47は、肥前染付の口銹の大皿で、口径は24.5cmを測る。見込には菊花に舞う蝶々を描き、裏文様も施している。釉薬は淡灰色の透明釉で、大きめの貫入がみられる。1630~40年代。48は、1610~30年の肥前の染付皿で、口径21.9cm、底径9.5cm、器

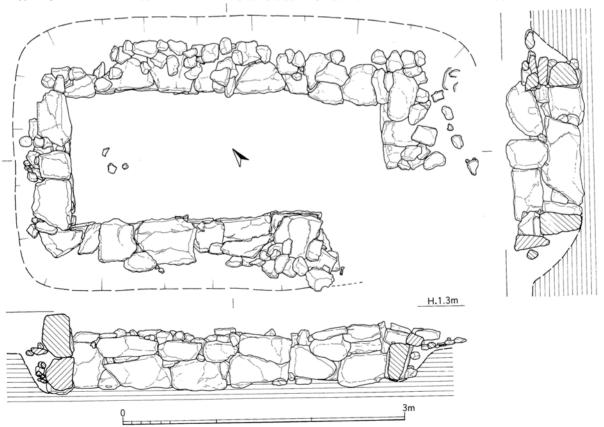


58. 76号石積土壙出土遺物(1/3)

高は1.7cm。見込には山水文を、内面には波文と呉須で濃淡をつけた圏線を描いている。高台の内面には目砂がついている。1475は、1368年初鋳の「洪武通寳」である。

77号石積土壙(54~56)

77号石積土壙は、C区南西隅のD-VI区にあり、78号土壙のすぐ西に位置している。石積みの長さは90cm、幅は70cmの方形に近い長方形プランを呈し、主軸方位をN-37°-Eにとる。壁面は、30~50cmの粗い割石を2~3個横位に並べて据え、その上面に小振りの割石を4段以上積み上げている。腰石の下面のレヴェルは不揃いであるが、上面はレヴェルを揃えて上石の積み上げを容易にしている。壁面はやや上開きぎみに積み上げ、壁石の隙間には小さな礫石を詰め込んでいる。床面は北側が凹むが、全体に平坦でやや堅く締まっており、水性堆積層の沈殿は認められなかった。土壙内からは小量なが



59. 88号石積土壙実測図(1/40)

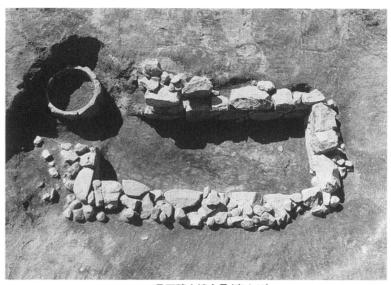
ら17世紀後半~18世紀初頭の肥前陶器の碗や皿が出土しており、18世紀の初め頃に築造されたものと考えられる。

出土遺物(57)

49は、京焼風の肥前陶器碗で、口径9.2cm、高台径5.4cm、高台高4mm、器高は6.1cmを測る。高台は三日月高台で、内面に印字がある。高台内と高台ぎわは無釉で、焼成は悪い。1670~90年代。50は、17世紀中葉~18世紀初頭の肥前陶器皿で、口径13.4cm、高台径4cm、器高は3.7cmを測る。見込には蛇ノ目釉はぎがある。高さ9mmの高台は畳付が釉はぎである。

88号石積土壙(59~62)

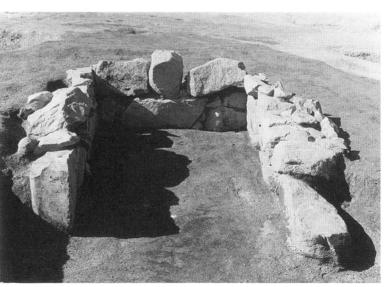
C区の中央部南端のC-IV区で検 出した大型の石積土壙である。すぐ 西側には、137号土壙や139号溝があ る。石積みの平面形は、長さ340cm、 幅140cmの長方形プランを呈し、主 軸方位はN-51°-Wにとる。本調 **査区で検出した最大級の石積土壙で** ある。壁面は、腰石に30cm×50~ 70cmの長方形~四辺形の割石を側壁 側で6~7個、小口壁側で2個を密接 して横位に据え並べている。次に、 その上面に一回り小さい扁平な割石 を第2段目として布積みに積み上げ ている。腰石と2段目の石積みは、 それぞれに上面のレヴェルを揃えて 丁寧に積み重ねている。壁面は、面 を内側にきれいに揃えて垂直に積み 上げ、その隙間には小さな礫石を詰 め込んで塞いでいる。また、腰石の 下面には暗茶褐色土を敷き込んで水 平に安定性を保ち、裏込めには拳大 の小礫石を詰め込むように充填して いる。床面は全体に平坦で、粗砂粒



60.88号石積土壙全景(東より)



61.88号石積土壙東側壁(西より)

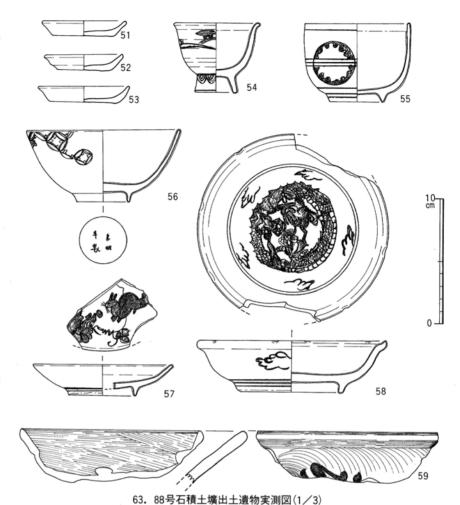


62. 88号石積土壙側壁断面(南より)

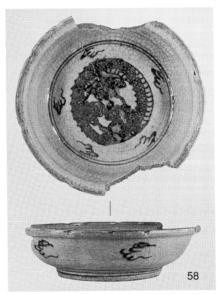
の混入した暗黒灰褐色~暗 茶褐色土を固めたように敷 き詰めていた。更に、その 直上面には側壁面に沿うよ うな状態で腐食した数片の 板材を検出した。88号石積 土壙は、その規模や構造に おいて76号石積土塘ととも に特筆すべきものがあり、 半地下蔵的な機能が推察さ れる。壙底の腐食した板材 片は、底に敷かれた床板を 想定させる。また、西側の 小口壁は、東側壁に比べて 30cmほど高く、東小口壁側 からの出入りが想起される。 土壙内からは、肥前陶磁器 の碗や皿のほかに墨書の瓦 質の鉢が出土している。築 造時期は18世紀の前半頃と 考えられる。

出土遺物(63・64)

51~53は、糸切り底の土



師器小皿で口径は6.4~7.4cm、器高は6~7mmを測る。胎土は精良で、焼成は良好。色調は黄橙色。54は、肥前の染付小坏で口径は6.8cm、高台径は3.4cm、器高は6.5cmである。高台は1.2cmとやや高く、畳付は釉はぎ。外面には呉須で山水文を描いている。17世紀代の作。55は、蓋物の肥前染付碗である。口径8.4cm、高台径4.4cm、器高は6.2cmを測り、焼成は不良。56は、肥前の染付磁器碗で、1670~90年の製作。口径は12cm、高台径4.2cm、高台高8mm、器高は5.7cmを測る。口縁部下には呉須で七宝文を描いている。また、高台内には「大明年製」銘がはいっている。57は、1660~70年代の肥前の染付磁器皿である。見込には呉須で葡萄とリスを描いている。高台~高台際に2条、内面に1条の圏線をいれ、畳付は釉はぎを施している。口径は11cm、高台径は5.4cm、高台高は7mmで器高は2.5cmを測る。58は、口径15cm、高台径8.2cm、高台の高さ8mm、器高4.2cmの陶器皿である。見込には龍に鳳凰文を描き、口



64. 88号石積土壙出土遺物(1/3)

縁部は輪花形をなす。畳付は釉はぎで、高台~高台脇にかけて3条の圏線を巡らしている。59は、瓦質の鉢で、外面には横方向の墨書があるが文字は読めない。内外面ともに粗いハケ目調整。胎土には石 英砂を含み、焼成は良好。色調は暗橙褐色。

89号石積土壙

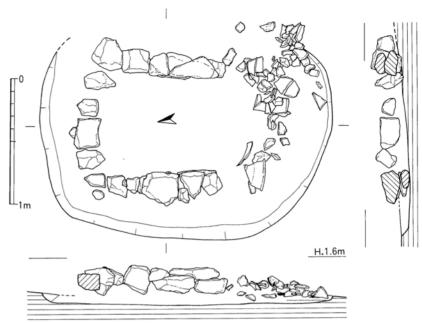
 $(65 \cdot 66)$

89号石積土壙は、C区南 西部のE-V区に位置してい る。東壁側には、130号建物跡 の妻側の基礎石列が、柱筋を 揃えて並んでいる。また、そ の基礎石列を挟んだ東側に は、円形の90号石積土壙が対 峙するように位置している。 石積みの内法は、長さが 120cm、幅が80cmの長方形プラ ンをなし、 $N-12^{\circ}-E$ に主 軸方位をとる。側壁は、20cm 大の角礫と15~35cm大のやや

扁平な割石を小口面を密着させて横 にして据え、その上に割石を積み重ね ている。この2段目の上面でレヴェル を揃えて壁面の水平を保っている。 腰石は、上面の安定を図ることを優先 しているためか下面のレヴェルは不 揃いで、暗黒灰色土を詰めて安定を保 っている。一方、小口壁は、北壁のみ が遺存している。壁面は、中央に15~ 25cmの割石を横に据え、その両側に人 頭大の角礫を1~2個並べているが、側 壁とは接することはなく疎らな感じ

を与えている。これに対して南側小口壁は、東側壁の端 から10cmほどの隙間をおいて、小礫と瓦片で疎らながら 裏込め状に面を造っている。西側壁との間には、20cmほ どの隙間がある。これが壁石材の抜き跡で、小礫と瓦片 が裏込めとも考えられるが、北側小口壁の遺存状況から すると必ずしも壁石があったとは断言しかねる。また、 側壁面は内側に面を揃えて比較的丁寧に石材を積み上げ

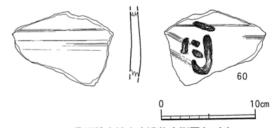
ているが、小口壁は小さく外方に膨らみ、造りも粗い。床面はほぼ 平坦で、水性堆積等の異質な土層はみられなかった。土壙内からは 17世紀前葉~中葉頃の肥前の鉄釉陶器や擂鉢等が出土している。89 号石積土壙は、その東側の130号建物跡と軸筋を並べて間近かにあ り、この建物跡に併設する何らかの施設とも考えられるが、積極的 な根拠はない。



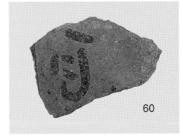
65. 89号石積土壙実測図(1/30)



66.89号石積土壙全景(北より)



67. 89号石積土壙出土遺物実測図(1/4)



68. 89号石積土壙出土遺物(1/3)

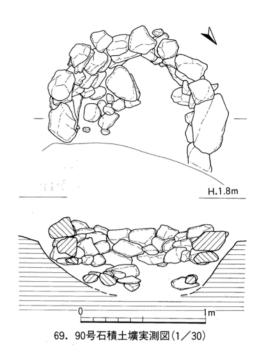
出土遺物(67・68)

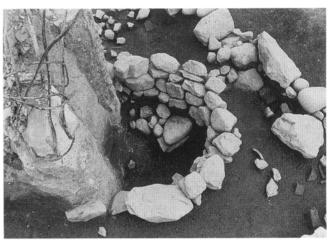
60は、瓦質鉢の体部片である。調整は内外面ともにハケ 目後にナデて仕上げている。外面には、横にして書いた墨 痕がある。「四」と云う漢数字の下にもう一文字書かれて いるが、「一」の下は読めない。瓦質鉢の体部には鉢を横に して漢数字(値段か数量か)を書いたものが多く、「四百」 云々と書かれていたものかとも思われる。胎土は、粗く石 英砂や雲母粒を含む。焼成は良好で、色調は淡褐色。

90号石積土壙(69・70)

90号石積土壙は、C区南西部のE-V区に位置する小型の石積土壙で、東側半分はビル建物のコンクリート基礎 杭で破壊されている。ちょうど130号建物跡の南西隅角部 に占地しており、すぐ南には建物跡の棟側基礎石列が、西には西妻側の基礎石列が並んでいる。また、この妻側の基礎石列を挟んで西には89号石積土壙が位置している。平面 形は、内法の直径が180cmの円形プランを呈する。円形プ

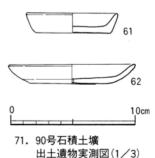
ランの石積土壙は、23号石積土壙と109号石 積土壙の3基しかなく、平面的には本調査区 の石積土壙の中では特記すべき遺構である。 石積みは、まず初めに直径が160cmの円形の 竪穴を掘り、その壙底から30cmほどの高さの ところに10cm×20cmの小振りの扁平な礫石 を横位にして円形に並べて基石としている。 次に、その基石の上面に20~30cm大の基石よ りやや大きめの礫石4~5段ほどを布積み状 に積み上げている。壁石は、内側に面を揃え て上方にむかってわずかに開き加減に丁寧 に積み上げ、3段目の壁石列の上面で凡その





70.90号石積土壙全景(北より)

レヴェルを揃えて安定を図っている。土壙は、真ん中が凹レンズ状に凹む 舟底状の断面形をなし、床面は素掘りのままで暗灰褐色砂土の整地層の面 まで達している。その機能としては、壙底に水性の堆積層がないこととそ れに繋がるような水路がないことから排水の溜め枡としてよりも便所的な 機能の方が考えやすい。130号建物跡の南西隅に位置すると云う占地的な 条件からも一体的に機能するものとして理解してよかろうか。ただし、土 壙内からは、土師皿と瓦質の鉢片のほかには陶磁器小片がわずかに出土し たのみで、時期は決しがたく、建物跡と合致するかは疑問である。

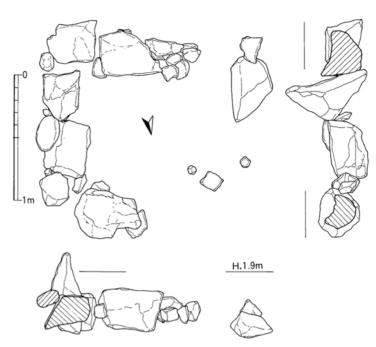


出土遺物(71)

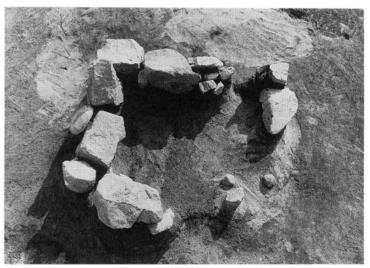
61・62は、糸切り底の土師器小皿である。61は口径7.2cm、底径6cm、器高1.5cmを測り、口縁部は短く立ち上がる。62は、口径10.2cm、底径6.8cm、器高は1.6cmを測る。体部はのびやかに外反し、扁平なプロポーションである。

9 4 号石積土壙 (72・73)

94号石積土壙は、C区北西部のE-Ⅳ区に位置する小型の石積土壙である。 南へ3mの距離には89号石積土壙と90号 石積土壙の2基が並んで立地している。 また、北東へ3mの距離には73号石積土 壙がある。石壁は遺存状況が悪く、北側 壁と西小口壁は、その大半が消失してい る。平面形は、石積内法の長さが110~ 120cm、幅が90cmの長方形プランを呈し、 N-80°-Wに主軸方位をとる。石積 みの南側壁は、35~50cmの大きめの割石 を横位に据えて、その小口面に拳大の角 礫を数個並べている。この小角礫群の 後背には、少し大きめの角礫を立ててそ の小ささを繕うように補充している。 北側壁も状況的には同じような傾向を 示すようである。一方、小口壁は、側壁 の用材と同じ大きさの割石を並べ連ね ているが、面は不揃いで凹凸や隙間があ る。その隙間には小さな角礫を詰めて 塞いでいる。西小口壁は腰石が1個しか 残っていないが、これも側壁同様に東小 口壁と同じ状況と考えて差し支えはあ るまい。側壁と小口壁は腰石の上面で 一定にレヴェルを揃えているが、東小口 壁の南側石は35×70cmの二等辺三角形 の割石を立てて壁石としている。その ために腰石列のレヴェルより30cmほど 突き出した状態になっている。これか



72. 94号石積土壙実測図(1/30)



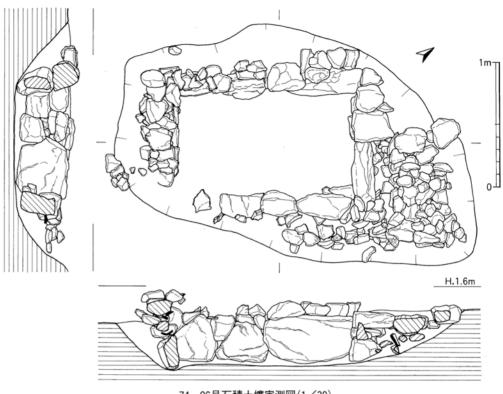
73.94号石積土壙全景(北より)

らすると、壁面は更にこのレヴェルまで積み重ねられていたものと思われる。壁石の裏込めはみられない。床面は、基石の下面のレヴェルで平坦に造られているが、やや軟弱である。整地層中にある土 壙の掘り方は検出できなかった。覆土中からは、遺物がほとんど出土していない。そのために築造の 時期は明らかでないが、周辺域の石積土壙群とそう違わぬ時期のものと考えて差し支えはないだろう。

96号石積土壙(74・75・238・240)

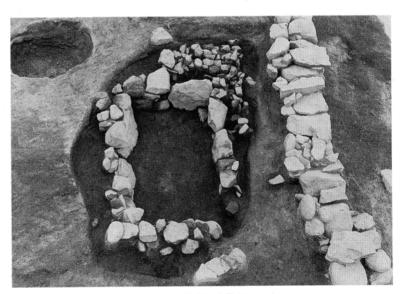
96号石積土壙は、C区西端のE-V区に位置する。南側壁の外側には91号建物跡の基礎石列が棟筋を揃えて並行してあり、その基礎石列を挟んだ南側には円形の109号石積土壙がある。また、すぐ東には、91号建物跡と一体的な機能を有していたと思われる76号石積土壙が主軸筋を揃えて位置している。石積みは、内法の長さが140cm、幅が80cmを測る長方形の平面プランを呈し、主軸方位はN-34°-Eにとる。側壁は、40×70cmの大きな割石を横位に据え、その片側の小口面に40×40cm大の一回り小

さな台形状の 割石を並べ、 その隙間には 人頭大の割石 を詰めて上面 を水平に仕上 げている。こ の腰石の上に 15×30cm位の 扁平な割石を1 ~3段積み重ね て壁面を造っ ている。一方、 小口壁は東西 で壁石の積み 方が多少異な っている。東 小口壁は、側



74. 96号石積土壙実測図(1/30)

壁と同じ積み方をしている。これに 対して西小口壁は、30×40cm大の割 石4(+1)個を並べて腰石とし、その 上段に小振りの扁平な割石を3~4段 積み上げている。壁面は、内側に面 を揃えてほぼ垂直に野面積みに積み 上げている。壁面の裏込めには、小 礫~拳大の礫石を詰め込んでいる。 殊に東小口壁の南半から南側壁の東 半にかけては面的にまとまって礫石 が拡がっていた。この礫石群は、腰 石の基底面にむかって投げ込むよう に斜めに敷き込まれている。土壙の 掘り方も、この礫石群の散布範囲に



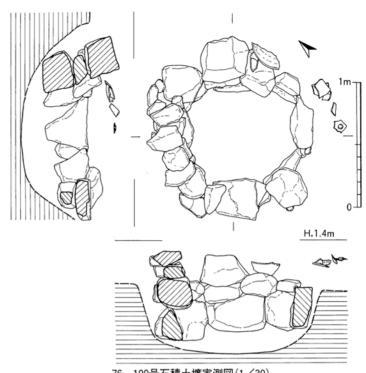
75.96号石積土壙全景(西より)

合わせるように掘っており、石積みの掘り方よりも突き出したような不整形をしている。ただし、礫 石群の北端には、小口壁の中央部から続く扁平な大きめの割石が段状に並んでおり、入り口的な構造 を有していた可能性も考えられる。ちょうど91号建物跡の南側棟の基礎石列に棟筋を揃えており、東 に並んでいる76号石積土壙とともに密接な繋がりが想起されるが、時期的に多少の差異があり、明言 はしかねる。また、小口壁は側壁の両端部を挟み込むように築いている。床面は平坦で、やや堅く突 き固められたような状態で、石積みの腰石はこの壙底に下面を水平に揃えて据えている。

遺物は、17世紀前葉~中葉頃の肥前の山水文磁器碗や二彩の大鉢、甕、擂鉢のほかに軒丸瓦(967・ 968) や甚左衛門銘の丸瓦(991)が出土しており、築造は17世紀後半頃と推定される。

109号石積土壙(76・77)

109号石積土壙は、C区の西端の D-V区に位置する円形の石積土壙で ある。北側壁面には、91号建物跡の南 側棟の基礎石列があり、その基礎石列 を挟んだ北側には96号石積土壙があ る。石積みは、整地層の中に円形の竪 穴を掘り、その壙底の10~20cmほど上 面に腰石を据えている。腰石は、30× 50cm大の8個の割石を横位にして円形 に並べ連ねている。上面に積み上げる 壁石の安定を優先したためか、腰石の 下面のレヴェルはやや不揃いである。 台形の割石は長辺を上にしているため に不安定で、安定を保つために暗灰褐 色~黄白色の粗砂土を厚めに敷いてい る。一方、上面は壁石を積み上げるた めに平均的にレヴェルを揃え、その上 に3~4段の礫石を積み上げている。壁 石は、内側に面を揃えて丁寧に積み上 げ、隙間には拳大の礫石を詰め込んで いる。また、壁石は5~15°ほどの緩 やかな傾斜をもって開き加減に積み上 げられており、現状で70cmの高さまで 残っている。石積みの掘り方は、直径 が150~160cmの円形プランを呈し、断 面形は逆台形をなす。壙底は浅い凹レ ンズ状をなし、腰石はそれよりも10~ 20cmほど上に据えられている。これは 23号石積土壙や90号石積土壙など円形



76. 109号石積土壙実測図(1/30)



77. 109号石積土壙全景(南より)

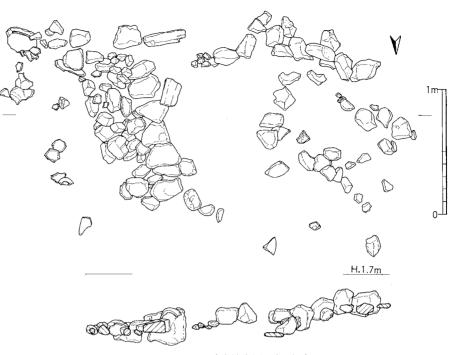
プランのものに共通する特徴である。方形~長方形プランの石積土壙のほとんどが、床面上に腰石を据えているのとはきわめて対照的である。円形の石積土壙は内部に異物が堆積し、それを掻き出すことによって壙底が腰石よりも深くなる。対して方形~長方形プランの石積土壙は、安定した床面の確保が求められるとする機能的な相違に起因するものとは推測されまいか。出土遺物がほとんどないために時期は明らかではないが、周辺域の石積土壙群の状況からすると17世紀中頃~18世紀前半頃の間におさまるものであろう。

197号石積土壙(78・79)

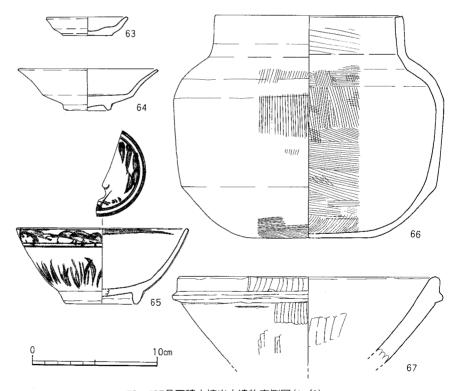
197号石積土壙は、A区北端のC-Ⅲ区にある小型の石組である。立地的には、調査区の東側を 弧状に巡る石積の護岸跡上縁の緩斜面上に占地している。また、北へ約3mの距離には大量の土師皿を 廃棄した104~107号土壙が位置している。石組は、北壁と西壁のほとんどが損壊しており、全体像は 明らかではないが、遺存 している東壁と南壁から 復原すると南北長が 110cmであるが、東西長 は北壁側が110cm、南壁 [€] 側は150cmでやや歪んだ 四辺形状をなしている。 石積みは、15~30cm大の 角礫を並べて腰石上に据 えている。壁石は、内側 にむけて面を揃え、隅角 は少し丸みをもたせて繋 いでいる。裏込めには、 拳大の礫石を詰めてお り、東壁側によく残って いる。床面には、扁平な 礫石が散在しており、石 敷き状になっていたとも 考えられる。構造的には63 号石積土壙や64号石積土壙 に似た傾向がある。遺物 は、石鍋や土師質の釜のほ かに肥前の染付磁器碗が出 土している。ただし、染付 碗は裏込め石の上面からの 出土で混入とも考えられ、 時期的には遡って第2期の 遺構の可能性もある。

出土遺物(79)

63は、口径6.7cm、器高が 1.5cmの土師器小皿。64は、 口径11cm、高台径3.7cm、器 高3.3cmの白磁皿である。 砂粒を含むアイボリーの胎 土に灰緑色の透明釉を施釉

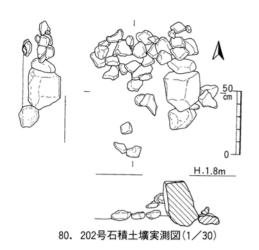


78. 197号石積土壙実測図(1/30)



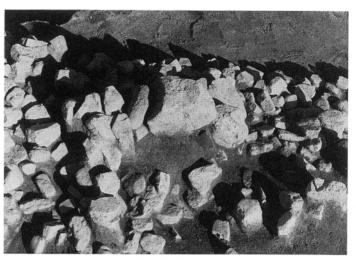
79. 197号石積土壙出土遺物実測図(1/3)

している。65は、肥前の染付磁器碗で、口径13.6cm、底径5.6cm、器高は6cmを測る。半透明の淡青灰色の釉薬をかけ、粗い貫入がある。畳付は釉はぎ。66は、口径28.8cm、胴部最大径21.3cm、器高17.6cmの釜である。直口する口頸部は小さく内傾し、胴部は肩の張った偏球形をなす。頸部外面が横ナデのほかは粗いハケ目調整で、胴部外面には全体に煤が付着している。67は、口径20.8cmの滑石製石鍋。口縁部下には断面が台形の鍔がつくもので、Ⅲ−d類。

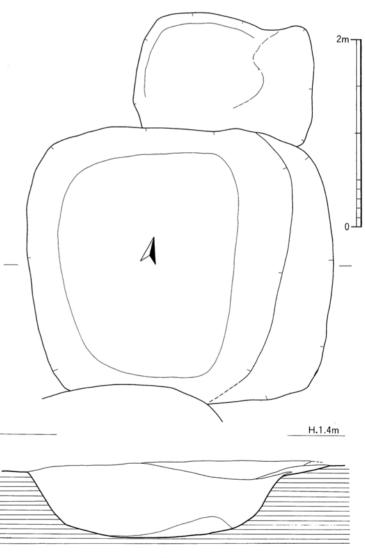


202号石積土壙(80·81)

202号石積土壙は、C区の中央部 のE-IV区に位置する小型の石積土壙 で、133号建物跡の東側基礎石列の上 面に立地している。7mほど西方には、 94石積土壙が位置している。石組は、 東壁の一部を残してほとんどが消失し ている。そのために全容は明らかでは ないが、遺存する腰石材から復原する と、ほぼ東西方向に主軸方位をとり、 壁面は一辺が1mほどの方形~長方形 のプランになるものであろう。壁面 は、25×40cmの花崗岩質の割石を水平 に据えて腰石とし、その小口面には扁 平な割石を詰めて隙間を塞ぐようにし ている。腰石の外側の基底面には平石 を敷いて裏込めとしている。小口壁で あろうか。一方、北壁側には側壁面の 裏込め石であろう拳大の礫石が帯状に 拡がっている。また、床面上には扁平 な礫石が散在しており、石敷きの可能 性もあるが礫石材が133号建物跡の基 礎石のものとよく似ており、判断のし にくいところがある。また、出土遺物 がないために築造の時期は明らかでは ない。



81. 202号石積土壙全景(西より)

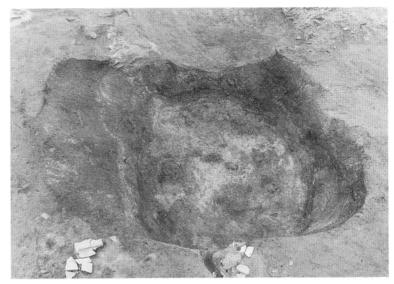


82. 2・18号土壙実測図(1/40)

3). 土 壙 (SK)

土壙は、すべてで122基を検出した。平面的には、円形~楕円形プランのものと方形~長方形プランのものとに大別されるが、なかにはない。構造的に大別されるがある。構造的でものを形をしたりである。構造のでは、そのでは、そのでは、であるがある。は、一様である。は、一様である。は、一様ではない。しから、とを本的には、「塵芥穴」である。

一方、分布的には、調査区(A~C 区)の全域にわたって広く分布して いるが、全体的な傾向としては、石 積みの護岸跡より西~南側の埋立地 上に、換言すれば博多の西の「新開 地 | とでも云うべき地域にまとまっ て分布している。時期的には、大勢 としては建物跡や石積土壙などと同 じように、17世紀中頃~18世紀前半 頃に比定されるものが多いようであ る。しかし、これは概ね17世紀中葉 ~後葉のものと17世紀後葉~18世紀 前葉のもの、18世紀中葉のものとに 区分される。更に、詳細な検討を加 えるならば、もっと細かく区分する ことも可能になりそうである。この 土壙の時期区分とともに建物跡や石 積土壙、井戸跡などの時期も加味し て検討すれば、町並みの有り様も移 り変りも把握することが可能になろ う。なお、すべての土壙を網羅して 報告するには限界がある。そのため にここでは主なものについてのみ報 告する。



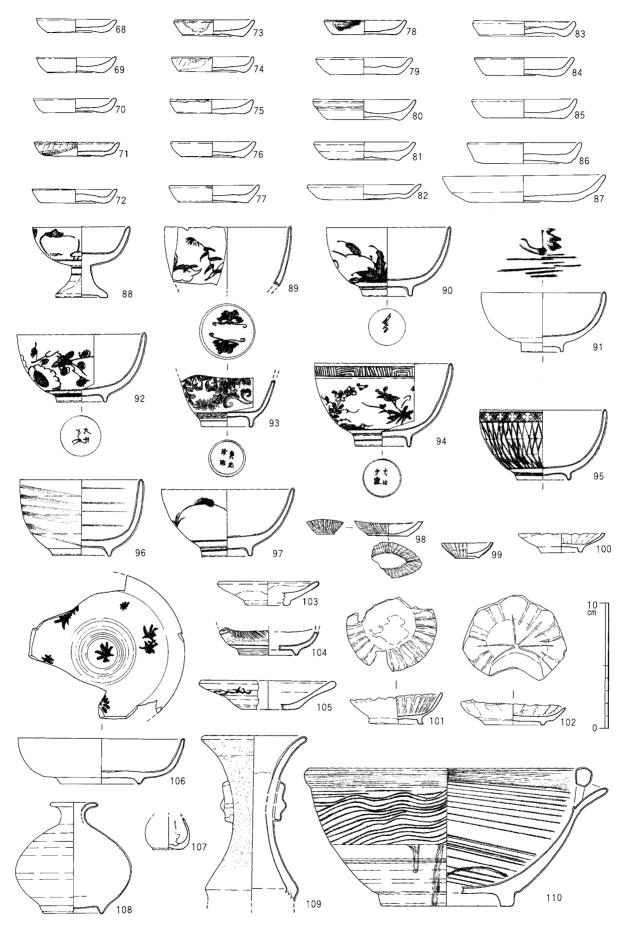
83. 2号土壙全景(南より)



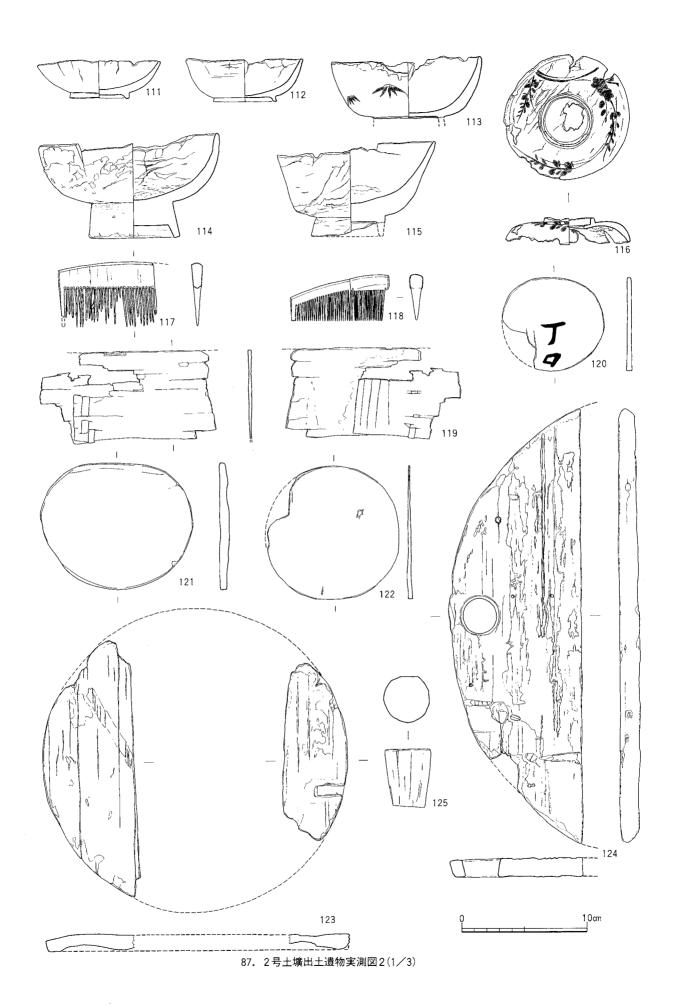
84. 2号土壙遺物出土状況(南より)

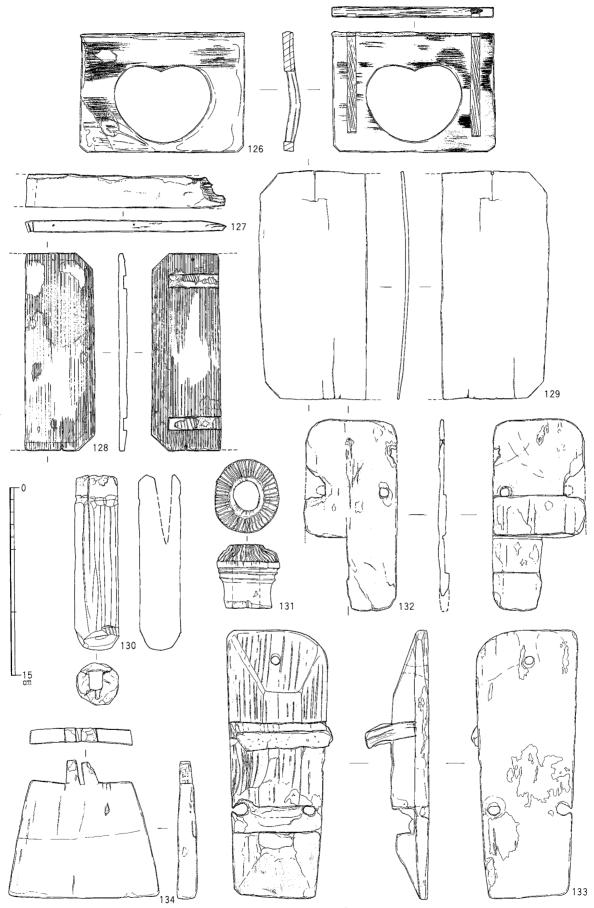


85. 2号土壙漆器椀出土状況(南より)

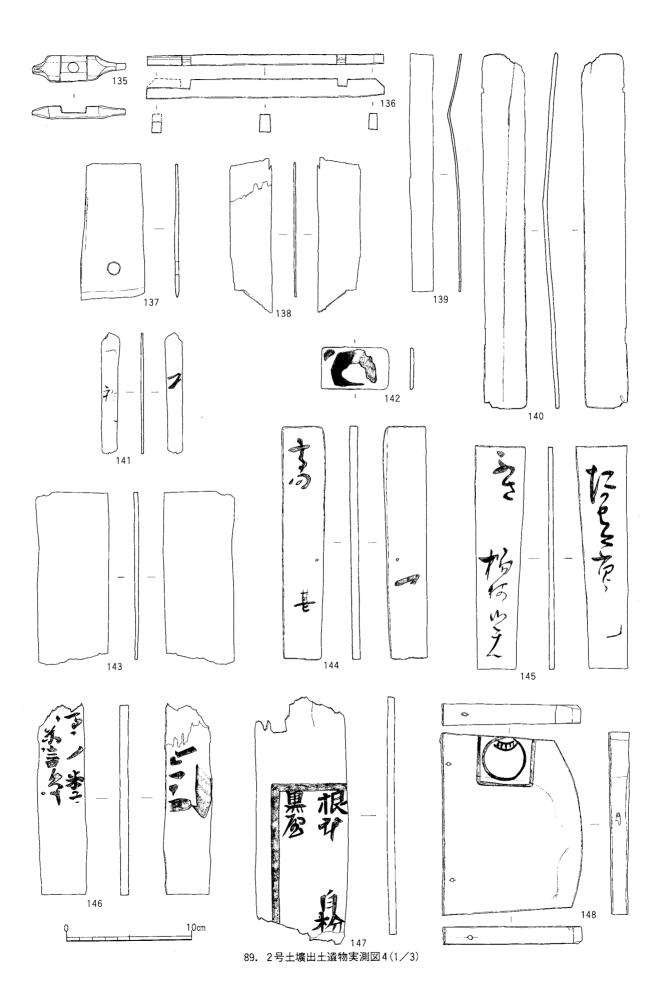


86. 2号土壙出土遺物実測図1(1/3)





88. 2号土壙出土遺物実測図3(1/3)

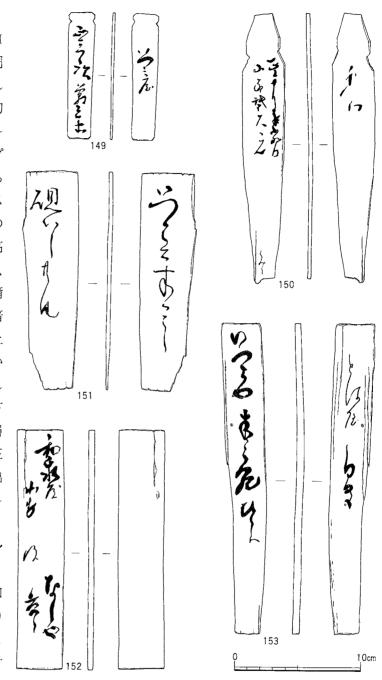


2号土壙(82~85)

2号土壙は、A区南西端のB-Ⅲ 区に位置する大型の土壙である。周 囲には14~19号土壙が巡るようにし てあり、北壁は18号土壙の南壁を切 っている。平面形は、東西軸が150~ 160cm、南北軸が150cmほどの方形プ ランを呈する。壁面は緩やかに立ち 上がり、東壁側は上縁に浅いテラス 状の段がつく。いわゆる2段掘りの 構造をなすものと思われる。壁高 は、最深部で40cmを測る。壙底は、 浅い凹レンズ状をなし、断面形は蒲 鉾状の逆台形を呈する。覆土は、暗 灰~灰黒褐色の粘性土で、土壙の上 縁より15cm位の所には、東壁の浅い 段から西壁の中位にむかって腐食し た数枚の板材の痕跡があり、その下 には灰層が堆積していた。この灰層 から壙底には、木札、漆器椀、櫛、三 方、下駄等の木製品や陶磁器類が出 土している。時期は、18世紀前葉~ 前半頃のものである。

出土遺物(86~95·238~ 240·294·295)

 $68\sim86$ は、土師器小皿である。口径が $6.4\sim7$ cmの小型のもの $(68\sim78)$ と $8\sim9.4$ cmの大型のもの $(79\sim86)$ とがある。 $71\cdot73\sim75\cdot78$ には油煙が付着しており、灯明皿として使われたものであろう。 $87\cdot105$ は土師器坏。



90. 2号土壙出土遺物実測図5(1/3)

87は口径13.2cm、器高2.1cm。105には平仮名様の墨書がある。88は、肥前染付の仏飯器で、17世紀末~18世紀初めの作。89~90・92~95・97・104は、肥前の磁器碗、91・96は陶器碗である。89・104は、有田窯の色絵で、17世紀後半。90は、染付で外面には花鳥文を描き、高台内には銘がある。91は、京焼風で見込には山水文を描く。93は、有田窯の色絵碗で、「真友珍玩」の銘がある。92・94・95には高台内に「大明年製」銘がある。



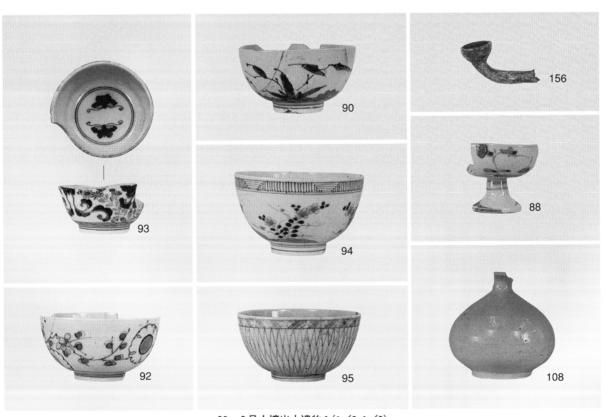
91. 2 号土壙出土遺物 実測図 6 (1/3)

96は、淡黄灰色の釉薬をかけ、刷毛目の文様がある。97は、波佐見窯系の碗で、見込に蛇の目釉はぎがある。いずれも17世紀後半~18世紀前半の作。98は笹皿。99~102は磁器小皿。103は、白磁の小皿。106は、17世紀末~18世紀初頭の小石原窯の陶器皿。107は小壷。108は、肥前白磁の油壷で器高8.6cm。17世

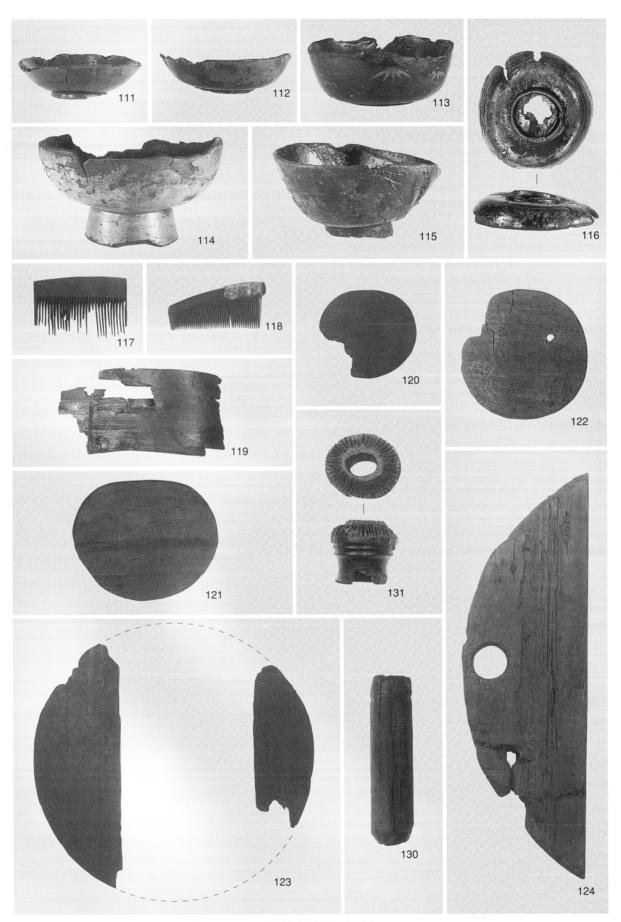
紀後半。109は、双耳の肥前青磁花瓶。口径は8.2cmで17世紀後半の作。110は、肥前陶器の片口で口径は22.4cm。口縁部は鉄銹で、二彩の刷毛目文様を施している。17世紀後半。

111・112は漆器の皿。111は内外面ともに朱漆塗。113~115は漆器椀。113は、外面に金泥で「雪輪に 笹」紋を7ケ所に描く。内面は朱漆塗。114は内外面とも朱漆塗。いずれも柾目取り。116は漆器椀の蓋 で、外面には金泥で「桔梗に萩」を描いている。板目取り。117・118は柘植櫛。118は、背に銅製の留具が ある。119は曲げ物の側板で、桜皮の留紐がある。120~122は曲げ物の底板で、120には「丁口」と読める 墨書がある。123は復原径が24cmになる桶の底板であろう。124は樽の蓋板で、栓用の円孔がある。125 は樽の栓である。126~128は三方である。126は茶色をした朱漆塗の脚で、ハート形の透かしがある。 127は上板の縁板で、下面には目釘孔がある。外面は黒漆、内面は朱漆塗。128は漆塗の上板。外縁には 下方から目釘孔を穿ち、脚部を嵌め込む幅1cm、深さ2~3mmの溝が2ケ所にある。129は、折敷である。 130は刃物の柄であろう。側縁は刃物で粗く削り取り、基部には深さ5.5cmの茎の差し込み孔がある。 131は番傘の骨材である。竹製で、黒漆を塗布している。132~133は下駄である。135は木製の紡錘車で ある。136~143は用途不明品。136の側縁には鋸引きの切り込みがある。141は表面に「新」と読める墨書 がある。裏面は判読不能。142は長さ5.3cm、幅は3.3cmのもので表面墨痕がある。146は表面に墨書、裏 面に焼印がある。147は柾目取りの木製品で、枠の中に「根本〇〇白粉」と「黒屋〇〇〇〇」と並列した焼 印を捺している。148は外縁に木釘痕があり、記号のような焼印が捺されている。 $144 \cdot 145 \cdot 149 \sim 153$ は 木簡である。144は表面には「高田○○甚○」と書かれているが、裏面は判読不能。145は表面が「ふさ○ 楊子弐兵へ」、裏面は「たつ巳屋市郎〇」と読める。149は表面が「正三郎様萬兵衛」、裏面が「いづみ屋」。 150は表面が「正・・」、裏面は「和泉」。151は表面が「硯いし・」、裏面は「いつ巳屋半三郎」。152は表面に 「和泉屋・・なしや」と「小衛・殿・重郎」が二行に書かれている。153は表面に「いつミや半三宛ひら・」、 裏面は「とば屋○○」と墨書されている。

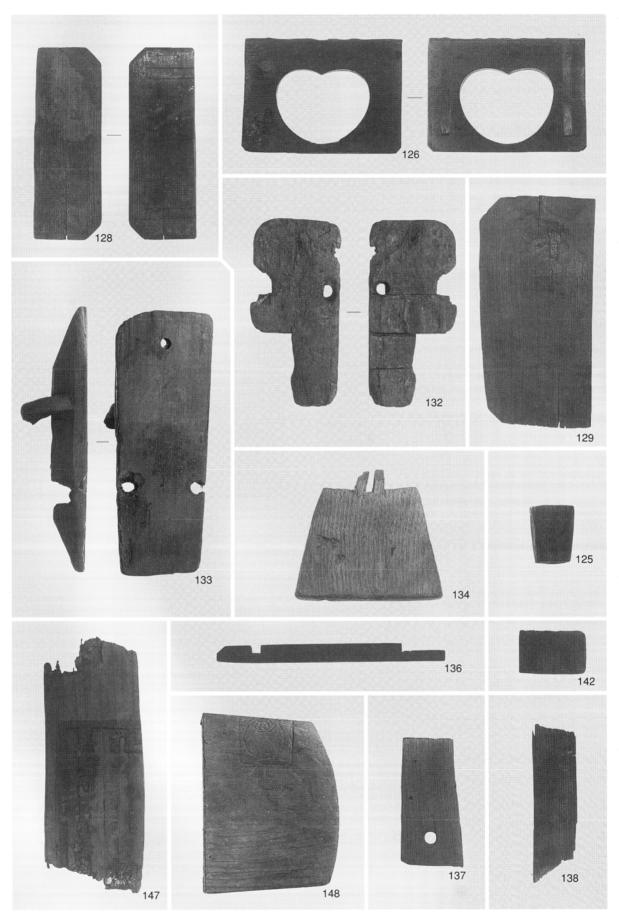
155は分銅か。156は、金メッキの煙管の雁首である。火皿は外径は1.7cm、深さは1cmを測る。



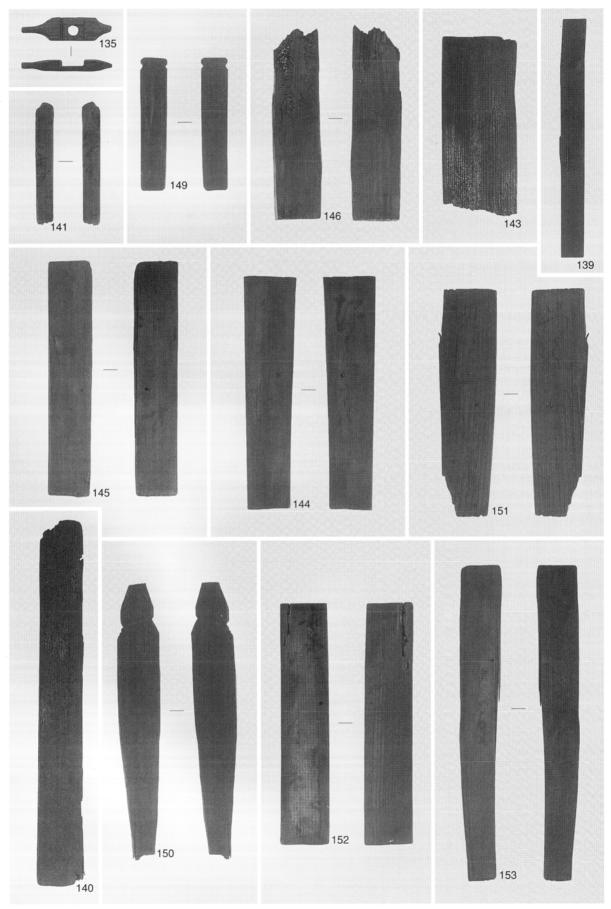
92. 2号土壙出土遺物1(1/2·1/3)



93. 2号土壙出土遺物 2(1/3)



94. 2号土壙出土遺物 3(1/3)



95. 2号土壙出土遺物4(1/3)

975~977は、三つ巴文の軒丸瓦である。 989·998は印刻のある丸瓦で、998には「甚 左衛門」と読める印刻がある。

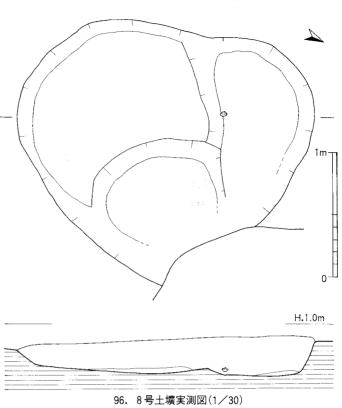
1476は江戸時代の寛永通寳である。 1515は土錘で、長さ36.5mm、幅11.5mm、 孔径は1.8mmで重さは4gである。

8号土壙(96・98)

8号土壙は、A区東端のB-Ⅱ区にある不整形の土壙で、北壁は9号土壙に切られている。土壙の長軸は235cm、短軸は200cmで、南北方に主軸をとる。深さは32cmで、壁面は緩やかに立ち上がる。壙底は、中央部が浅く窪む凹レンズ状をなし、北壁側は楕円形状に更に低くなり、2段掘り状になっている。覆土は暗茶褐色砂土で、遺物はほとんど出土しなかった。

9号土壙(97・98)

9号土壙は、A区東端のB-Ⅱ区の埋立 地上に立地する素掘りの土壙で、南西壁側



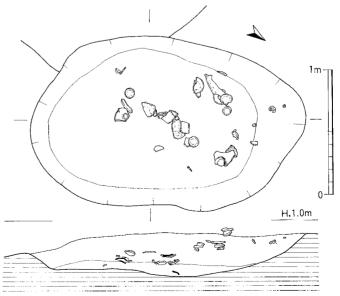
は8号土壙と重複し、それよりも新しい。平面形は、長軸が218cm、短軸が134cmを測る楕円形のプランを呈し、 $N-32^{\circ}-W$ に主軸方位をとる。壁面はなだらかに立ち上がり、深さは35cmを測る。壙底は、南壁側は平坦であるが、北壁側は凹レンズ状に浅く窪む。土壙内からは、肥前窯の陶磁器類と土師器小皿が出土している。17世紀後半の時期に比定できよう。

出土遺物(100・101)

 $166\sim169$ は、糸切り底の土師器小皿である。口径が7.2cmの小さめのもの(166)と $8.8\sim9.6$ cmの大きめのもの $(167\sim169)$ とがある。170は、17世紀後半の波佐見窯の染付磁器皿である。口径は13.2cm、高

台径4.5cm、高台高7mm、 器高は3cmを測る。見込 には蛇の目釉はぎがあり、呉須で折枝文を描い ている。高台内内着している。164は1680~1700 年代の染付皿で見込にはコンニャク印がある。 171は、肥前陶器の大皿で で川径24cm、器高は7cmを測る。内面には蛇の目 と高く、内面には蛇の目





97. 9号土壙実測図(1/30)

釉はぎの後にチャツをあてている。17世紀後半の作。172は嬉野内野山窯の陶器大皿で、高台径7.6cm、高台の高さは1.5cmを測る。内面には印刻の後に黒土をうめて草文を描いている。畳付は釉はぎ。17世紀後半の作。172は、口径が2.8cmを測る肥前の染付花瓶である。なだらかな肩部には呉須で蔓草文を描いている。

 $194 \sim 197$ は銅製品である。194は把手金具か。 $195 \cdot 196$ は飾り金具である。195は直径が約6.5cmの円形の飾り金具で、49cmの円形透かしが数ケ所にある。

10号土壙(89)

10号土壙は、A区東端のB-I区にあり、護岸跡上縁の砂丘上に立地している。南へ約5mの距離には9号土壙があり、北壁側は11号土壙と重複している。平面形は、東小口側が調査区外にのびているため明らかでないが、幅が110cmの長方形プランをなそう。主軸方位は $N-17^\circ$ -Eにとる。壙底は浅く平坦であるが、東壁側は急激に深くなる2段掘り状の構造をなすが、遺構の切り合いの可能性もある。遺物は、土師器小皿や坏のほかに小量の肥前の陶磁器や銅銭が出土しているが、それらは2段目の土壙内から出土したものが多い。

出土遺物(100・294)

174~181は糸切り底の土師器小皿で、口径が6.4~7.2cmと小さいもの(174·175)と7.8~8.6cmとやや

大きいもの(176~181)とがある。182~187は、土師器坏である。口径は12.2~12.4cm、器高は2.3~3.2cmを測る。188は黒釉の陶器椀で、口径10cm、高台径2.6cm、器高は4.7cmを測る。胴部下半と高台には施釉していない。189は、1630~50年代の肥前青磁の三脚香炉である。胴部は竹形をなし、口径は13cm、器高は8.7cmを測る。

1477は1008年初鋳の「祥符元寳」。

11号土壙(99)

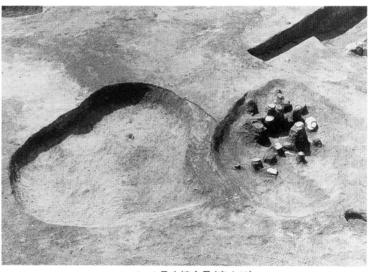
11号土壙は、A区東端のB-I区にあり、護岸跡上縁の砂丘上に立地している。南へ約6mの距離には9号土壙があり、南壁側は10号土壙と重複している。東壁が調査区外にあり全容は明らかでないが、一辺が170~200cmほどの方形をなそうか。

出土遺物(100・101)

190は、回転糸切り底の土師器小皿で歪みが著しい。口径は10.4cm、器高は3cmを測る。

198は凝灰岩質の硯である。

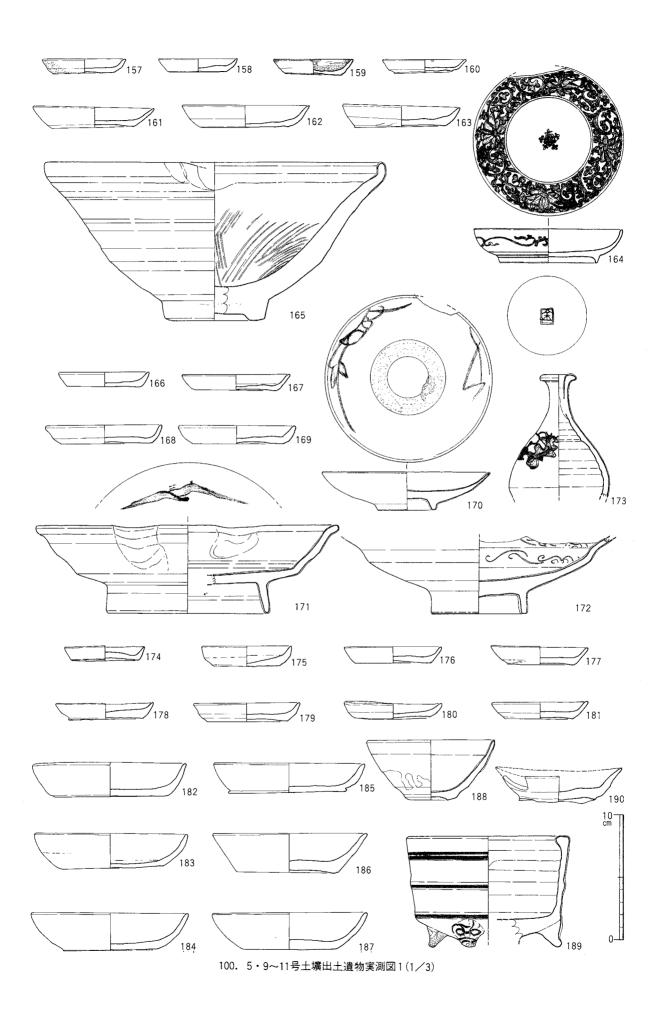
1478は977年初鋳の「太平通寳」、1479 は、1111年初鋳の「政和通寳」。



98. 8・9号土壙全景(南より)



99. 10・11号土壙全景(西より)

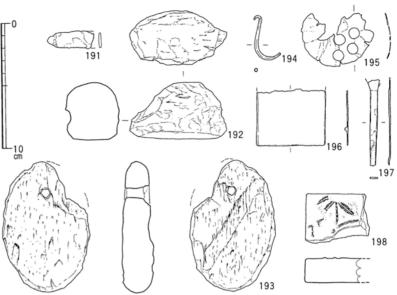


1 4 号土壙(1 0 2)

14号土壙は、A区南端のB-Ⅲ区に位置し、北壁は16号土壙を切っている。平面形は、長軸270cm、短軸175cmの楕円形プランを呈し、主軸方位はN-14°-Wにとる。南壁側にフラット面を造る2段掘りの構造で、深さは46cm。

出土遺物(105・294)

199~202は、土師器小皿。203は 17世紀後半~18世紀初頭の肥前磁器小坏。口縁部下に雨降り文を描く。204は竹節形の肥前磁器碗。 銹釉を施釉するが、口縁部は瑠璃



101. 5・9~11号土壙出土遺物実測図2(1/3)

釉。17世紀後半代。205は肥前磁器の蕎猪口で、松竹梅文を描く。206は松竹梅文の染付碗。207は鉄釉を掛分け、見込には菊文を描く。208は波佐見窯の染付皿。見込は蛇の目の釉はぎに折枝文を描く。三日月高台で17世紀後半の作。209は蝶々文を描いた染付磁器皿。210は17世紀前半の在地系陶器の片口。叩き成形で鉄釉をかけている。

15号土壙(102)

15号土壙は、C区西端のC-Ⅲ区に位置する。平面形は、長軸が245cm、短軸が192cmの楕円形プランを呈し、深さは75cmを測る。N-45°-Eに時釉軸方位をとる。

出土遺物(105・106・241)

211~218は糸切り底の土師器小皿である。214には油煙があり、灯明皿に使っている。218は底面に墨書がある。219は陶器碗で、高台は無釉。220は17世紀前半の肥前染付磁器碗で、高台内には「大明甲板」の銘がある。221は山水文を描いた京焼風の肥前陶器碗。17世紀末~18世紀初頭。222は17世紀後半の染付磁器仏飯器である。畳付は釉はぎ。224は、肥前の鉄釉皿。口縁部は輪花形で、底部は刳り底である。

246は、銅製の杓子である。柄の長さは28.6cm、厚さは 1.5mmで端部には円孔を穿つ。1013は軒平瓦である。

16号土壙(102)

16号土壙は、A区西端のB-Ⅲ区にある不整形の土壙で、南壁は14号土壙に削平されている。長さは215cm、幅は205cmで、隅丸方形に似たプランを呈している。主軸方位は $N-33^\circ$ -Eにとる。磁器は18世紀前半頃。



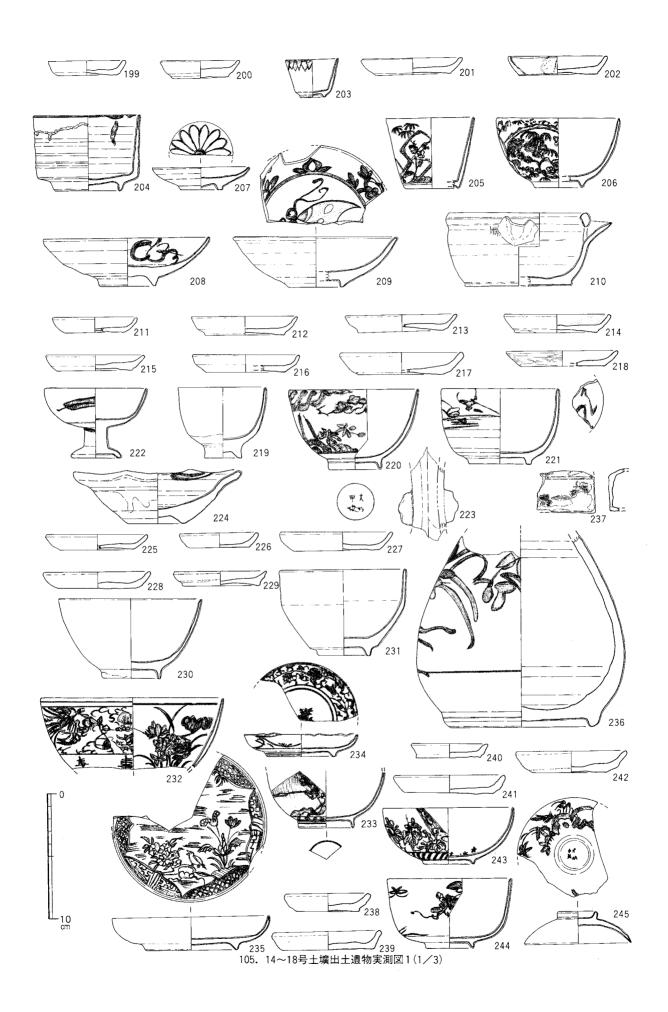
102. 1・2・14~19号土壙全景(南より)



103. 17号土壙全景(北より)

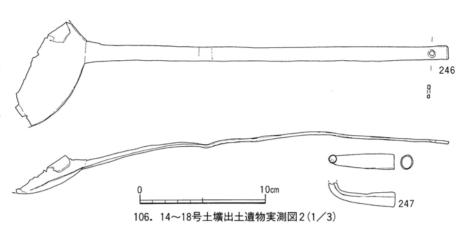


104. 19号土壙全景(北より)



出土遺物(105·106 ·238~341·295)

225~229は、糸切り底の土師器の小皿である。 230は口銹の肥前磁器碗で、見込には型紙刷りの 五弁花文を施文している。畳付は釉はぎ。18世 紀前半の作。231は天目 形の肥前陶器碗。ベージ

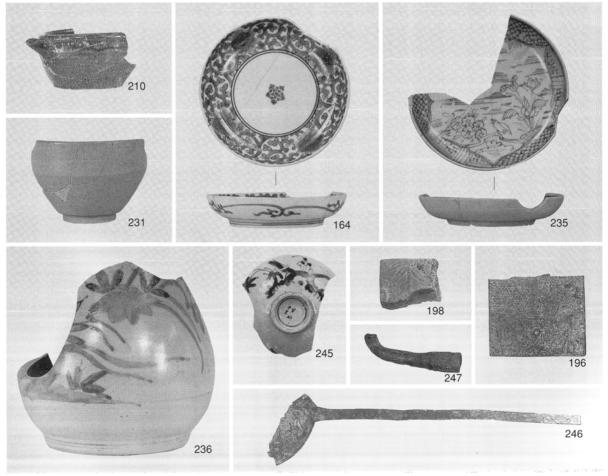


ュ色の釉薬をかけ、畳付には目砂が付いている。17世紀後半。232は口径が14.4cmの磁器碗。外面上半には龍と鳳凰と七宝を、その圏線下には寿の文字を書いている。また、内面には花文を描いている。233は万暦赤絵を模した色絵の磁器碗で、18世紀前半~中葉の作。234·235は染付の磁器皿。234は見込に花鳥を描いている。235は口縁部が口銹で、輪花形をなす。見込にはコンニャク印判文と唐草文を描く。18世紀前半の作。236は草花文の染付瓶。畳付は釉はぎで、内面は無釉。

978~980は三つ巴文の軒丸瓦。999~1004は丸瓦。「藤兵衛」、「為左衛門」、「甚・・」、「二郎左衛門」の印刻がある。1014は軒平瓦である。1517は長さ38mm、厚さ13mm、重さ6gの土錘である。

17号土壙(103)

17号土壙は、A区西端のB-Ⅲ区にある不整形の土壙で、2·14~19号土壙と群をなしている。長さ



107. 5.9.11.14~16号土壙出土遺物(1/2.1/3.1/4)

240cm、幅は215cm、深さは25cmを測り、 $N-13^{\circ}-E$ に主軸方位をとる。肥前の磁器碗や皿、小坏が小量 出土している。時期は18世紀前半であろう。

出土遺物(105)

238・239は糸切り底の土師器小皿。口径7~8.8cm。

18号土壙(82・102)

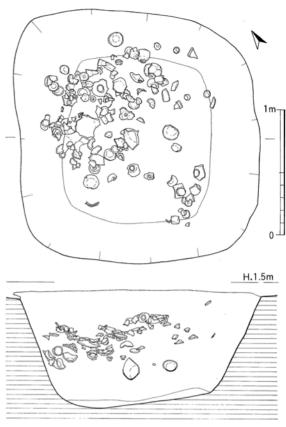
18号土壙は、A区西部のB-Ⅲ区にあり、南壁は 2号土壙に切られている。平面形は、長さが190cmの 方形をなそう。深さは17cmで、壙底上には灰層が薄 く堆積していた。肥前の陶磁器が出土している。

出土遺物(105)

240は糸切り底の土師器小皿。241・242は土師器の 坏。243・244は肥前色絵の磁器碗。18世紀前半~後半 頃の作。245は染付磁器碗の蓋で、撮みの内面には 「大明年製」の銘がある。1690~1730年代。

19号土壙(104)

19号土壙は、A区南端のB-Ⅲ区にある浅い不整形の土壙である。土壙内からはウマの頭骨や四肢骨が出土しており、獣骨の廃棄土壙であろう。



108. 27号土壙実測図(1/30)



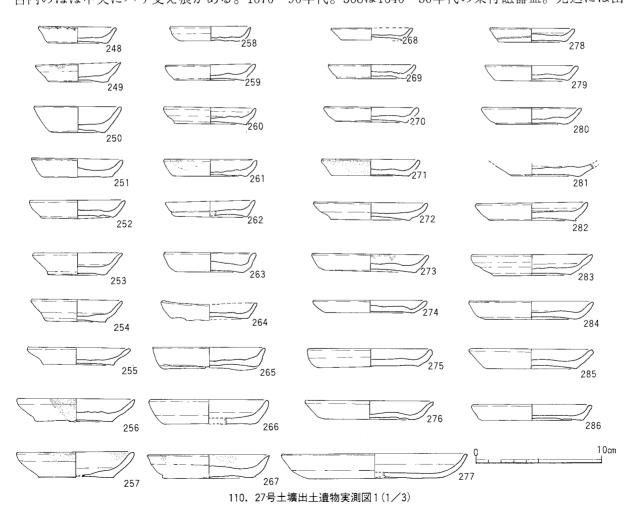
109. 27号土壙全景(南より)

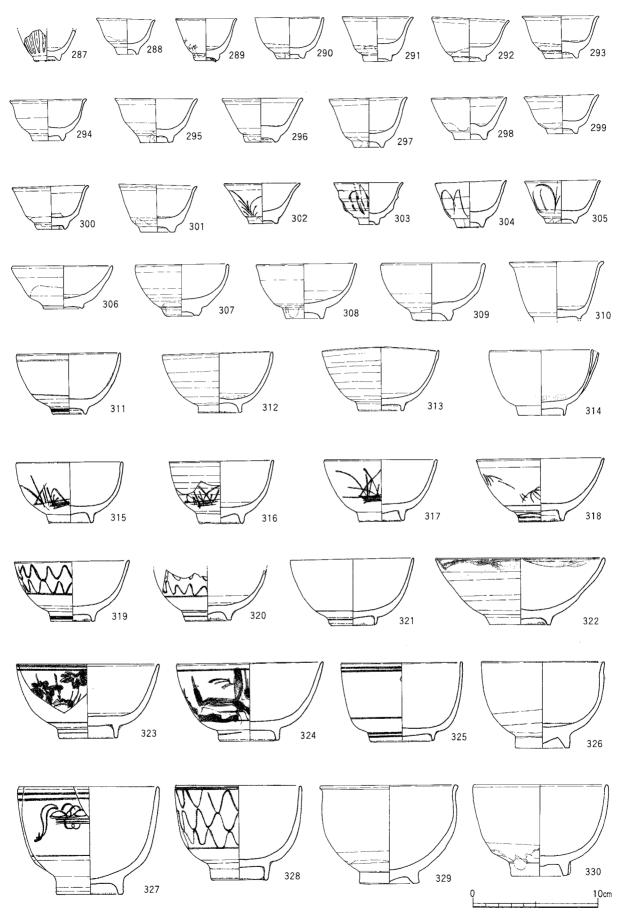
27号土壙(108・109)

27号土壙は、C区西端のE-W区にある土壙で、53号石積土壙のすぐ南に隣接している。平面形は、長軸が200cm、短軸が191cmの方形プランを呈し、N-12° -Eに主軸方位をとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、壙底までの深さは93cmを測る。床面は西壁側に緩やかに傾斜するが、断面形は逆台形をなす。土壙の中層からは小坏や碗等の陶磁器類が層をなして出土した。時期は17世紀後半。

出土遺物(110~115)

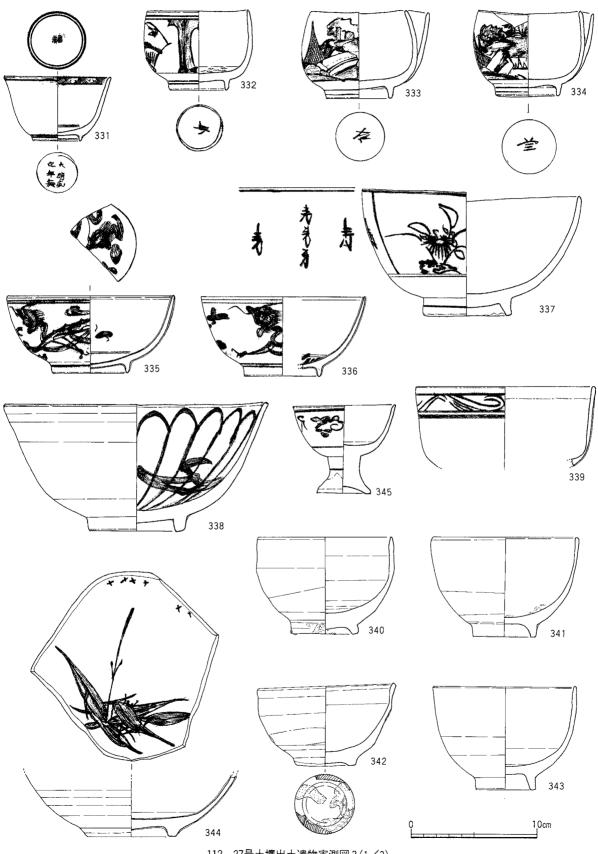
248~267は、糸切り底の土師器小皿である。口径が6.2~7cmの小さいものと7.8~10.4cmの大きめのものがある。249・257・267・273には油煙が付いている。277は口径14.4cm、器高2cmの扁平な土師器坏。287~305は半透明釉をかけた肥前磁器の小坏である。302~305は染付。306~344は磁器碗である。306~321は小型品、337・338・344は大型品である。このうち331は見込に「福」、高台内に「大明成化年製」の銘がある。332~334の高台内にも記号状の銘がある。337は外面に花文と十字形に配した5個の「寿」を対称位に呉須で書いている。342は天目形の陶器碗で、緑茶褐色の釉薬をかけている。345は染付の仏飯器。363・364は陶器製の灯明皿で、外縁には油煙が付着している。362・369~373は陶器皿である。362・370~373は唐津系の陶器皿で、見込と高台に胎土目積みの目砂が銹着している。369は見込に「大明成」の銘があり、畳付は釉はぎ。口縁部下には油煙が付いており、灯明皿に転用されている。346~348は半透明釉のかかった磁器小皿である。356は白磁の皿。淡クリーム色の透明釉をかけ、見込と高台には目砂が付いている。349~361・365~368は肥前の染付磁器皿。365は見込みに四つ葉のクローバーを描く。1610~30年代。367は有田泉山の染付皿で、見込には呉須で鮮明な雲龍文と宝文を描いている。高台内のほぼ中央にハリ支え痕がある。1670~90年代。368は1640~50年代の染付磁器皿。見込には山



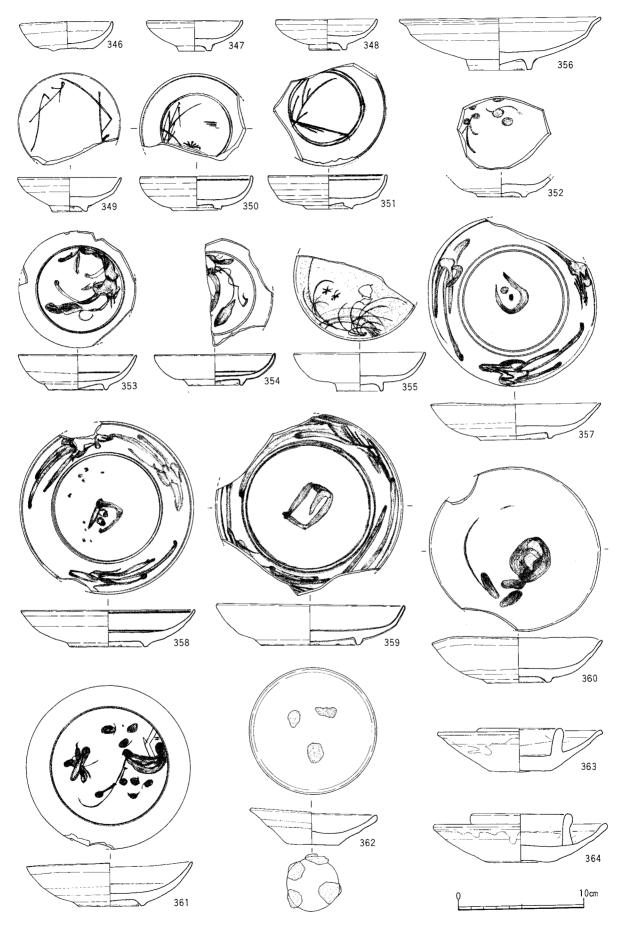


111. 27号土壙出土遺物実測図2(1/3)

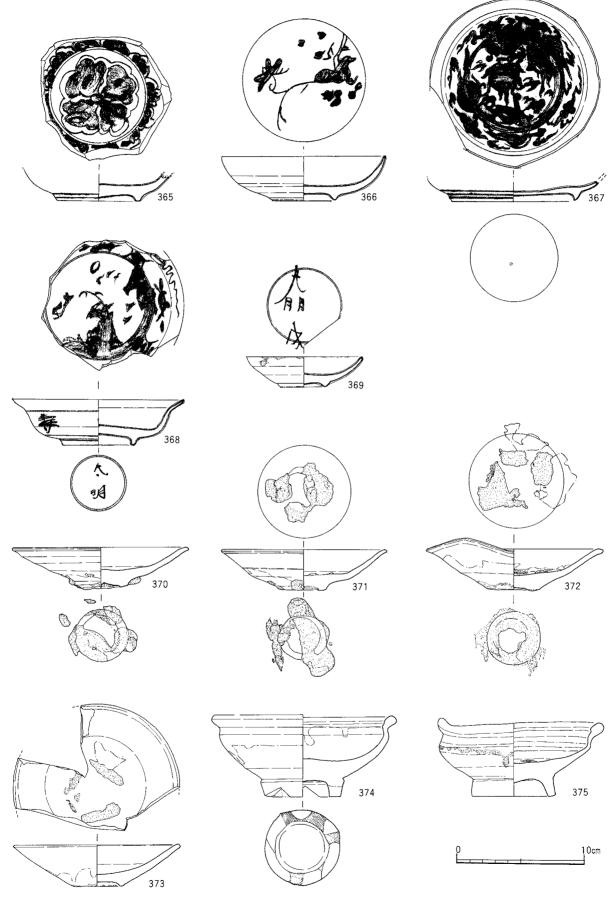
水文を、裏模様には松葉文と「寿」の字文を呉須で描く。高台内には「太明」銘がある。374·375は陶器の 鉢。374は切り高台で、体部は無釉。375は体部中位に茶褐色釉の釉ダレがある。見込には胎土目積みの 目砂が付着している。



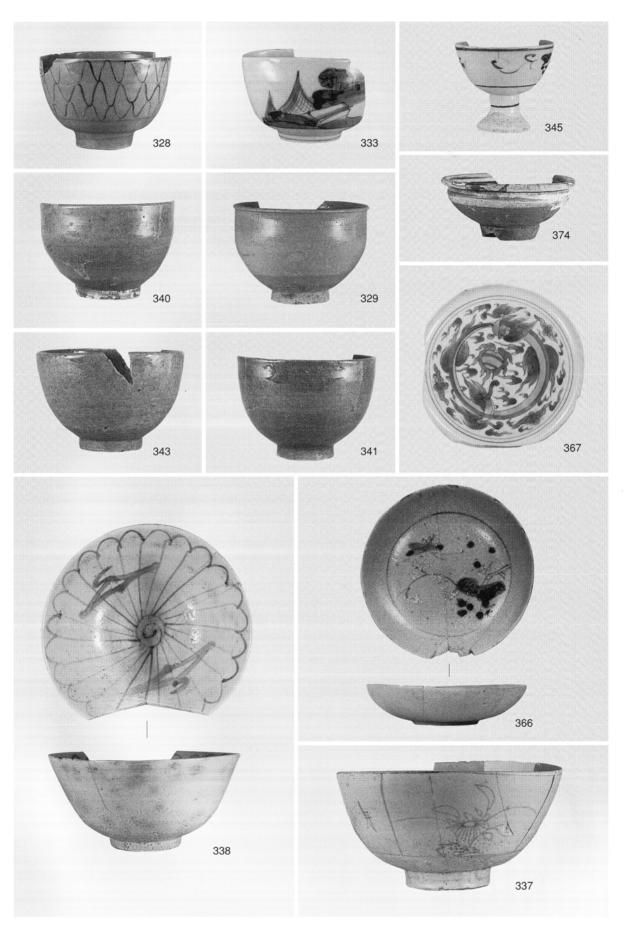
112. 27号土壙出土遺物実測図3(1/3)



113. 27号土壙出土遺物実測図4(1/3)



114. 27号土壙出土遺物実測図5(1/3)



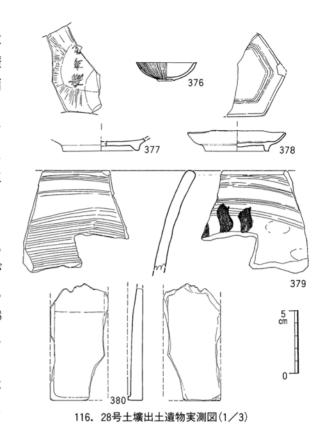
115. 27号土壙出土遺物(1/3·1/4)

28号土壙(付図1)

28号土壙は、調査区北西部のE-WI区に位置する2段掘りの土壙で、北小口壁は21号石積土壙と、南小口壁は22号建物跡と重複している。平面形は、長さは270cm、幅が175cmの楕円形プランを呈する。底面は、北小口壁側から南へむかって30cmほど傾斜し、そこから更に40cmの比高差で1段低くなる。南口壁は緩やかな屈曲面を造って立ち上がる。

出土遺物(116・295)

376は口径4.8cm、器高1.5cmの肥前磁器小皿。外面には条線状の線刻文がある。377は高台径が6cmの皿で、見込には「化年製」と読める銘がある。二段書きにした「大明成化年製」銘であろう。378は六角形の磁器小皿。379は土師質の鉢で、体部には墨書がある。横書きにした漢数字の「三」であろう。380は砂岩質の硯。1518・1519は土錘。1518は長さ21.7mm、厚さは10.7mm。1519は長さが27.2mm、厚さは11mmで重さはそれぞれ2gである。

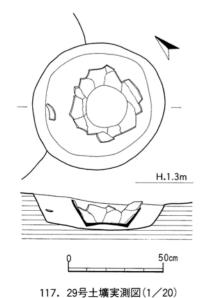


29号土壙(117・118)

29号土壙は、C区西端のE-WI区に位置する小型の土壙で、30号土壙の南壁を切っている。平面形は、直径が100~105cmの円形プランを呈する。壁面はやや急峻に立ち上がり、深さ25cmほどが遺存している。壙底は浅い凹レンズ状をなし、断面形は逆台形を呈する。土壙の中央部には、甕の底部が水平に埋置された状態で遺存していた。また、土壙内には削平によって損壊した甕の口縁部~胴部片が混入していた。

出土遺物(119·120)

381は、肥前陶器の甕で、口径32.8cm、底径21.6cm、器高は40.6cmを測る。口縁部は逆L字状に内唇が張り出す。淡緑色の半透明釉をかけているが、胴部下半には釉ダレがある。17世紀前半。





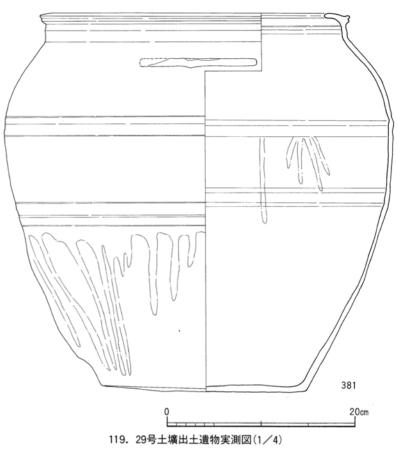
118. 29・30号土壙全景(東より)

30号土壙(118)

30号土壙は、調査区西端のE - Ⅷ区にある小型の土壙で、22号 建物跡のすぐ南に位置している。 南壁は29号土壙と重複し、これよ りも古い。平面形は、長軸が 140cm、短軸が130cmを測るやや鶏 卵状に歪んだ円形プランをなす。 主軸方位はほぼ南北にとる。壁面 は緩やかに立ち上がり、壙底まで の深さは30cmを測る。 壙底は東壁 側が浅く凹むが、断面形は逆台形 状を呈する。覆土は濃灰色~灰黒 褐色の土砂で、遺物はほとんど出 土しなかった。

3 1 号土壙(1 2 1)

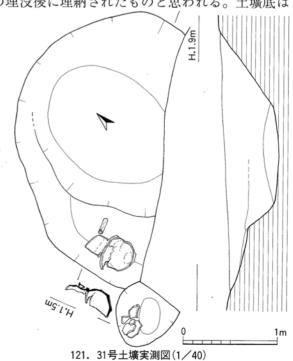
31号土壙は、C区北端のF-VI 区にあり、すぐ北には48号土壙が ある。西には21号石積土壙があ り、本来は重複していたものと推



察される。南壁側が撹乱壙で削平されているが、平面形は長さが295cmで、幅は250cmに復原される楕 円形プランをなそう。主軸方位は、 $N-41^{\circ}-E$ にとる。西壁は $20\sim25$ cmほど下がったところで緩や かなフラット面を造り、そこから更に擴底にむかって30cmほど低くなる。いわゆる2段掘りの構造を なしている。この西壁下のフラット面の壁ぎわには、2個の甕が口縁部を接してほぼ水平に埋置され ていた。この甕の傍には人の四肢骨片があり、土壙の埋没後に埋納されたものと思われる。土壙底は



120. 29号土壙出土遺物(1/6)



長軸75cm、短軸55cmの楕 円形を呈する。覆土中からは肥前磁器小坏や陶器 碗等が出土しており、時 期は18世紀前半頃と考え られる。

出土遺物

$(122 \cdot 123 \cdot 239 \cdot 295)$

382~384は、肥前磁器の小皿である。382は口径5.2cm、器高は1.7cm。釉薬は明オリーブ灰色。383は口径4.9cm、器高は1.3cm。384は口径が6.8cmで、内面には連弁状に施

文している。385は肥前陶器の二彩甕で口径29.2cm、高台径14.8cm、器高は24cm。胴部上位は波状文、中位は 横掻きの格子文を描いている。釉薬 は鉄釉に銅緑釉をかけている。

991は長さ25.5cm、幅14.3cmの丸瓦で、印刻がある。

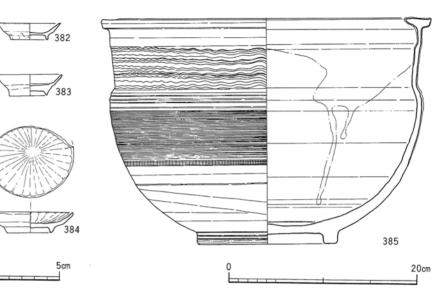
 $1520\sim1541$ は土錘である。 $1520\sim1529$ は小さめのもので長さは $23.6\sim30.2$ mm、重さは $2\sim4$ g。 $1530\sim1541$ は大きめのもので長さ32.5mm ~41.3 mm、重さ $4\sim8$ g。長さは30mm、重さは4gを境として区分されよう。

3 2 号土壙(付図1)

32号土壙は、B区西端のF-VII区にある小型の土壙で、東壁は21号石積土壙に、西壁は49号井戸跡に切られている。平面形は、長軸が190cm、短軸は170cmほどになる円形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がるが、西壁は中程に弱い屈曲面を造る。楕円形の壙底は浅い凹レンズ状をなし、断面形は逆台形をなす。覆土中からは肥前磁器や寛永通寳(1481)が出土している。

出土遺物(124・294・295)

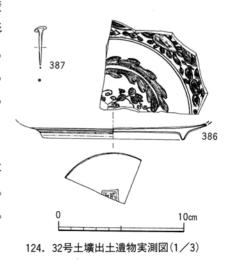
386は、高台径が11cm、高台高が5mmの染付皿。見込と内面には 呉須で草花文様を描く。高台内には角に「福」の字の銘がある。 17世紀後半代。387は、先端部の欠損した銅釘で、現長は3.1cm。 1542~1544は土錘。長さは22.2mm、34.8mm、45.8mm。



122. 31号土壙出土遺物実測図(1/3·1/4)



123. 31号土壙出土遺物(1/4)



33号土壙(125~131)

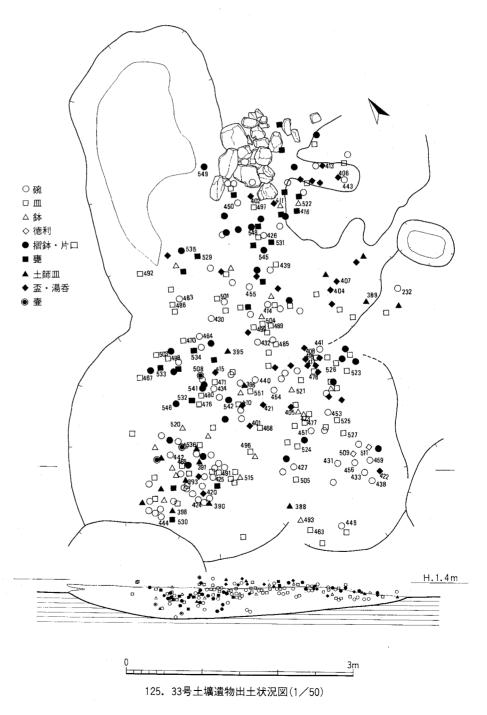
33号土壙は、C区南西端のD-WI区にある陶磁器類の廃棄土壙で、すぐ東には23号石積土壙がある。東壁面上には23号石積土壙の周りに敷き詰められていた瓦片が被さっている。長さ7m、幅4.35mと大きいが、平面的にはきわめて歪な不整形をなす。土壙は、東西南北の隅角が突出し、四壁の中央部がくびれる形状をなしていることから、四つの円形あるいは楕円形土壙の切り合いと考えられる。しかしながら、土壙の上層面には幾多の陶磁器類が乱雑に散乱しており、平面的にその切り合いを確認するには至らなかった。また、下層からも擂鉢や片口などが出土しており、断面的な切り合いも掴みえなかった。概観的に観ると遺物は、上層に小坏や碗、皿などの陶磁器類が多く、下層には擂鉢や片口などの大きなものが多く出土する傾向がある。壁面は緩やかに窄まり、底面は掴みがたいが、中

央部に2~3ケ所のやや 深い凹みがある。この 凹みの中から擂鉢など が出土している。これ らのことから33号土 壙は、三つの塵芥穴の 集合体であり、三つの 竪穴を順次掘って初め に擂鉢などの大きなも のを投棄している。そ の後に浅く凹んだ中央 部に小坏や碗、皿など をまとめて廃棄したも のと推測される。出土 した陶磁器類は17世紀 初め~前半のものと中 葉のものに大別され る。また、刀子などの 鉄器類と寛永通寳も出 土している。

出土遺物

(1 3 2~1 4 7 · 2 9 4)

388~398は、糸切り 底の土師器皿である。 口径が6.2~7.4cmの小 さいもの(388~392)と 8.2~9.4cmの大きめの もの(393~396)とがあ る。397・398は口径が 10.2~10.4cm、器高が



 $1.8 \sim 2.2 \text{cm}$ と大きく、坏的である。 $399 \cdot 400$ は口径 $7.6 \sim 7.9 \text{cm}$ 、器高4.1 cmの土師器小坏である。内面に油煙が付いており、灯明皿に転用されたものであろう。

402~421は、磁器小坏である。402~411·421は、口径は5.2~7cmの染付。呉須で蘭文を描いている。402·406·407·410は三日月高台である。412~415はヘラ彫りで鎬蓮状に施文し、415には、「寿」の銘があり、三日月高台が付く。413も三日月高台の小坏。416~418は白磁。417は口縁部下に呉須で圏線を描く。三日月高台の畳付から内面は無釉。401は、17世紀前半頃の福建省窯系の磁器小碗。呉須で圏線下に花文を描き、見込は無釉。419·420は陶器の小坏で、透明な淡い灰色釉をかけている。420は、腰部まで施釉し、高台は削り出している。422~450·461·462は磁器碗で、染付、白磁、鉄釉等がある。422は外面に「福寿」、高台内に「太明」の銘がある。423は高台内には「太明」の銘がある。425は三日月高台の小



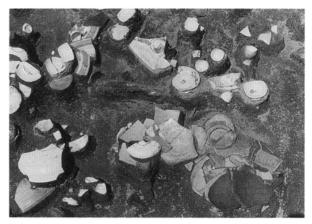
126. 33号土壙全景(南より)



127. 33号土壙上層遺物出土状況1(西より)



128. 33号土壙上層遺物出土状況2(北より)



129. 33号土壙上層遺物出土状況3(東より)



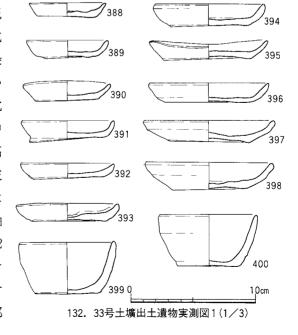
130. 33号土壙下層遺物出土状況1(西より)

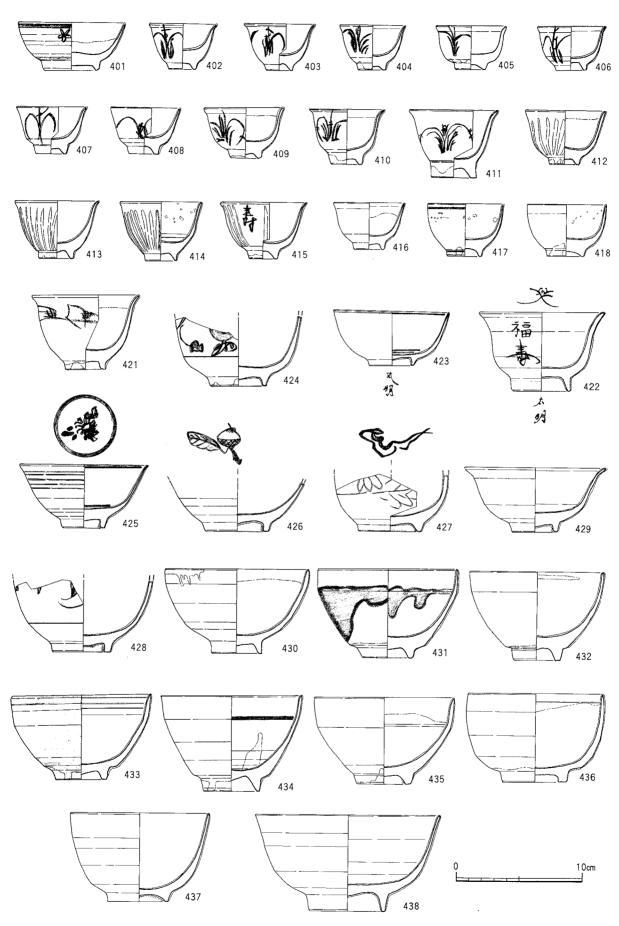


131. 33号土壙下層遺物出土状況2(南より)

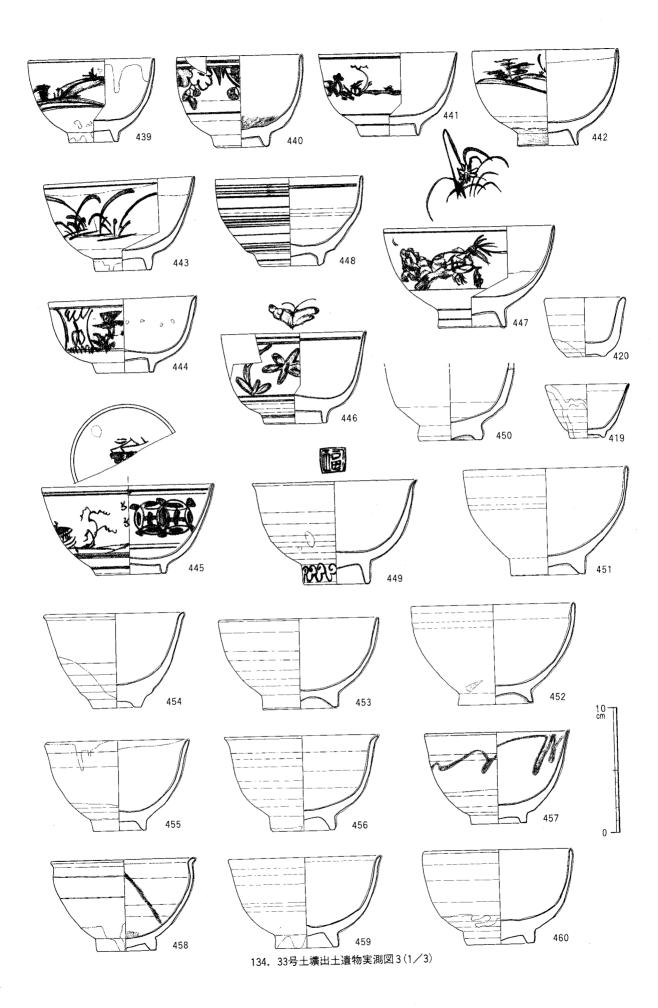
碗で、外面が鉄釉、見込には菊と葉文を描く。426は椎の実と折枝。427・428は有田猿川窯。429は外面が 鉄釉、内面が白磁のかけ分けで畳付には目砂が残る。430は鉄釉と灰釉のかけ分け。431~434は天目形 の鉄釉碗で、1630~40年代。435·436は青磁かけ分けで、畳付には目砂がついている。437·438は白磁 碗。438は口銹で高台が高い。1630~40年製。439~449・461・462は染付碗で、外面に山水文や草花文、唐 草文を描いている。442は三日月高台に褐色の鉄釉をかける。445は内面に七宝を、446は見込に蝶々を、 449は角に「福」の字文を描いている。447は外面に蝶と戯れる獅子を、見込には草花文を描いている。 448は天目形の磁器碗で圏線文を配する。1630~40年代。461は外面に「福寿」、見込に「寿」の銘がある。 451~460は陶器碗。451~453は嬉野内山窯のもので、高台の内側には目砂痕がある。1600~30年代。 454は端反口縁の碗で1600~30年代。455~459は鉄釉で、457·459は灰釉とのかけ分け。17世紀中葉。 463·464は1630~40年代の染付鉢。464は口径18.8cm、器高は10cm。見込には草花文を描く。465~479は 染付皿。見込には山水文や草花文、蝶々、鳥等を描いている。466は沢瀉文を描く。469は有田窯のもの で青磁とのかけ分け。470は菊唐草文の型打成形で、見込には菊流水文を描いている。478は1650~60年 代のもので、見込に「日」の字文と鳳凰文を描いている。479は大皿で見込には窓絵に格子柄を配する。 口縁部には輪花状にして成形時のキズを補正している。481・488・489・496・507は青磁皿。481は菊花文 の型打成形で口縁部には焼成時のヒビ割れがある。488は口銹で菊の陽刻文を型打している。1630~40 年代の作。496は口縁部を波状に作り、見込は蛇の目釉はぎ。釉薬は内面が青磁、外面は透明釉。480・ 491~494は白磁皿。491は口縁部下に油煙が付着している。480・494はねじ花の型打成形皿。494は窯キ ズがあり、高台には胎土目の砂目がついている。487は呉須で草花文を描いた染付の小皿。486は型打成 形の手塩皿。口縁部は小さな輪花状に整え、見込には蝶を描く。484・485は染付の仏飯器。485は1630~ 40年代のもので、蔓草文を描く。496~506は陶器皿。496.498は溝口縁の皿で1600~30年代。497は鉄釉 の皿で圏線を配し、内面~口縁部下には灰釉がかかる。501.503~505は鉄絵に圏線を描くもので、1610 ~30年代の作。506は嬉野内山窯の皿で、1600~30年代の作。いずれも見込や高台には砂目積みの目砂 が付いている。508は17世紀初頭の叩き成形の陶器小瓶。509~514はロクロ成形の染付瓶で、内面は無 釉。呉須で松竹文や草花文を描く。1630~40年代。514は刳り底で一重網目文を描く。512は1610~30年 代。515は17世紀前半~中葉の鉄釉の陶器小壷で、内面は無釉。516はロクロ成形の陶器小壷。鉄釉の上 に灰釉をかけている。517は糸切り底の陶器の蓋。519~522は陶器の香炉。519·520は1630~50年代のも

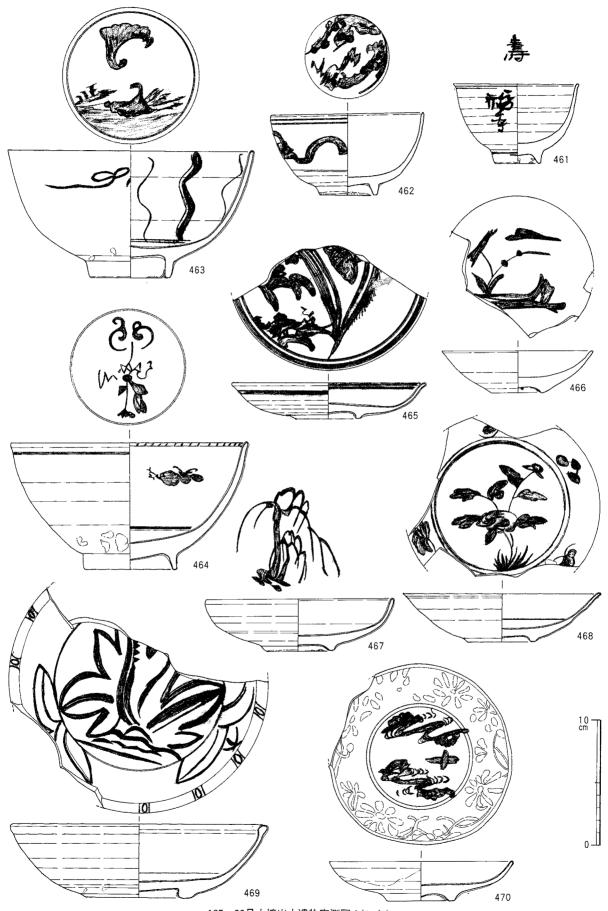
の。521は鉄釉のもので、三日月高台は無釉。17世紀 前半。522は鉄釉。523は陶器鉄絵の大鉢。内面に蛇 文?を描く。524は1630~40年代の有田山辺田窯の染 付大皿。口唇部には唐草文を略して点文にしてい る。525~527は唐津二彩の陶器大皿。茶色釉に白化 粧土の釉薬で刷毛目の模様を描く。17世紀前半~中 葉。528~533は陶器の甕。528は口径16.6cm、器高 37.2cm。口縁部下に釉ダレがあり、内面には青海波 の叩き痕がある。1600~30年代。529は無釉。530は 口縁部~胴部には灰釉がかかる。531は黒褐色の釉 がかかり、格子目文の叩き目をナデ消している。532 は焦茶色の釉薬をかけ、内面は青海波の叩き目をナ デ消している。1600~30年代。534~538は陶器の片 口である。534は叩き成形で、口縁部には鉄釉、胴部



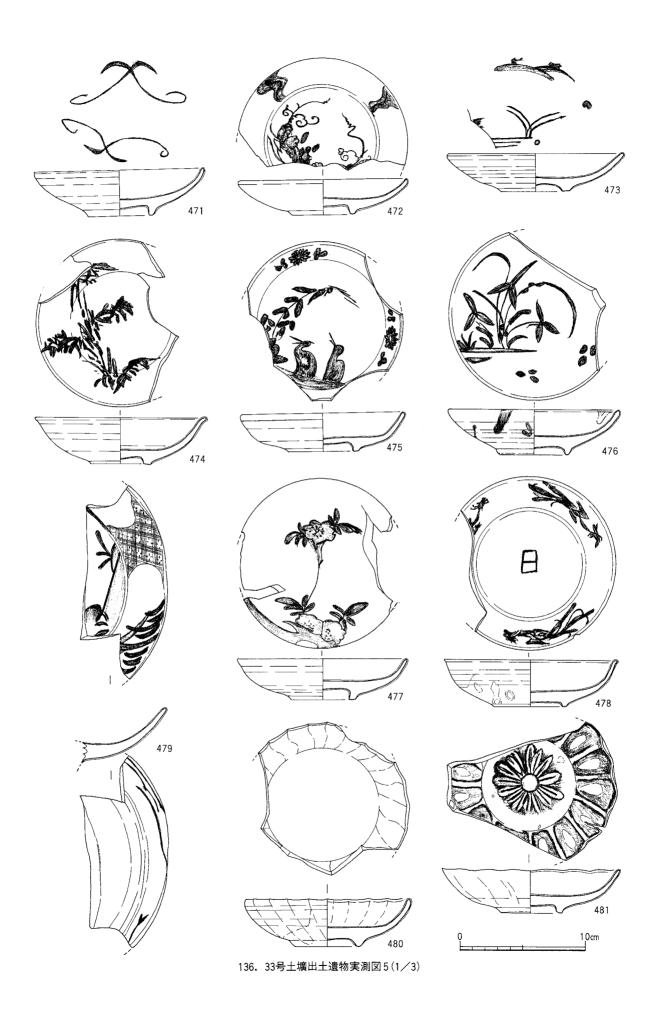


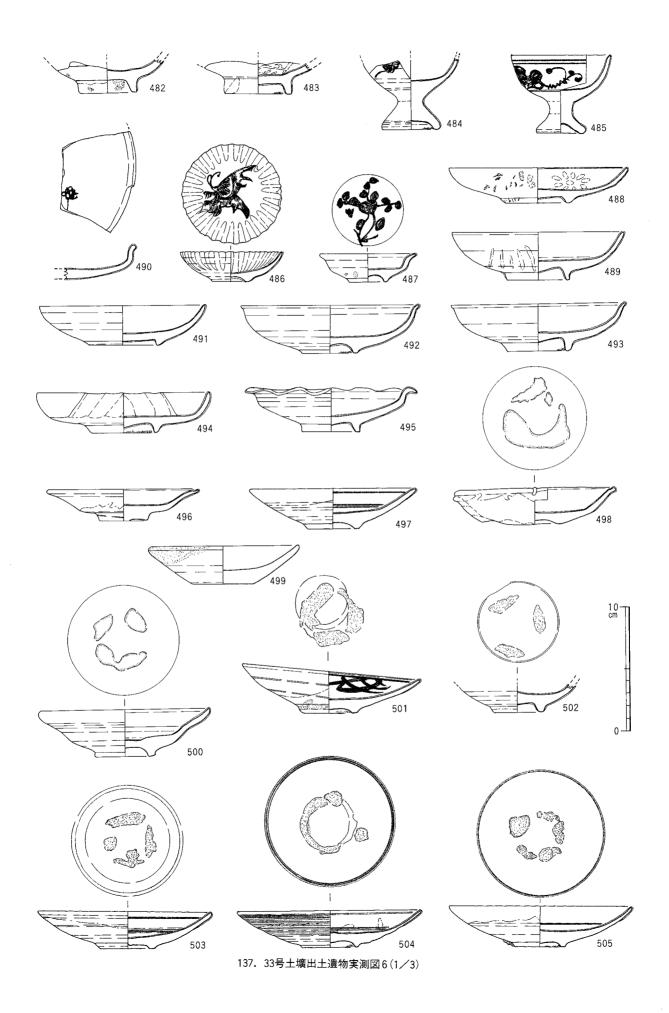
133. 33号土壙出土遺物実測図2(1/3)

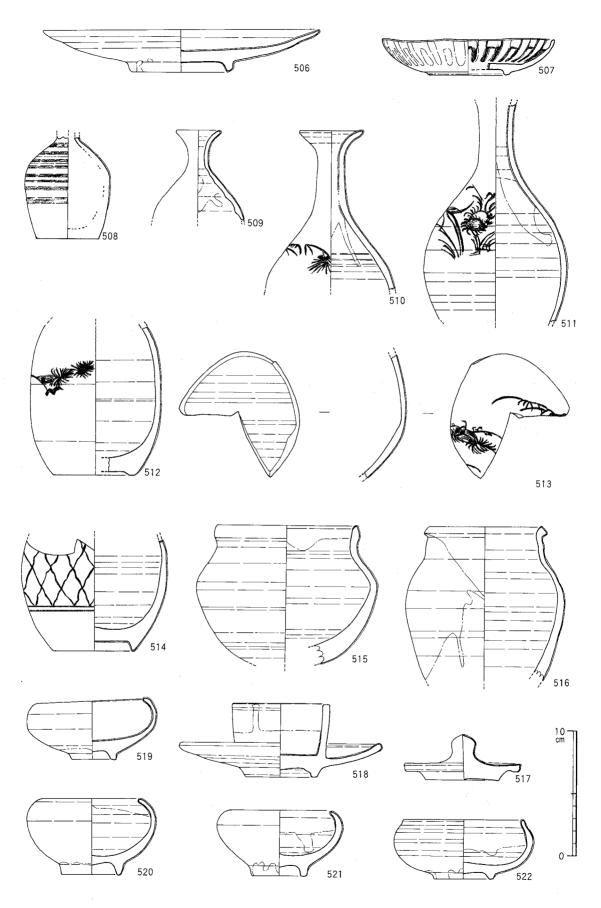




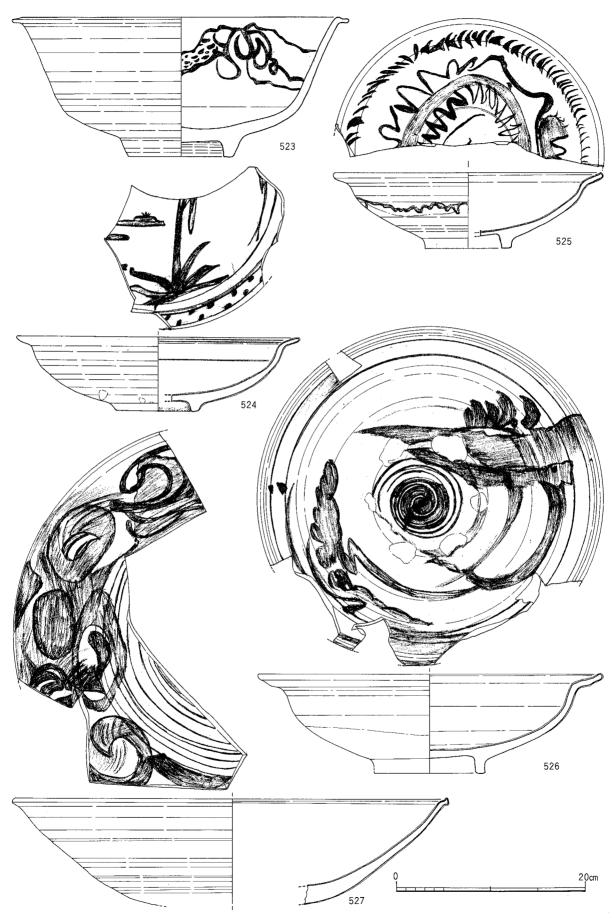
135. 33号土壙出土遺物実測図4(1/3)



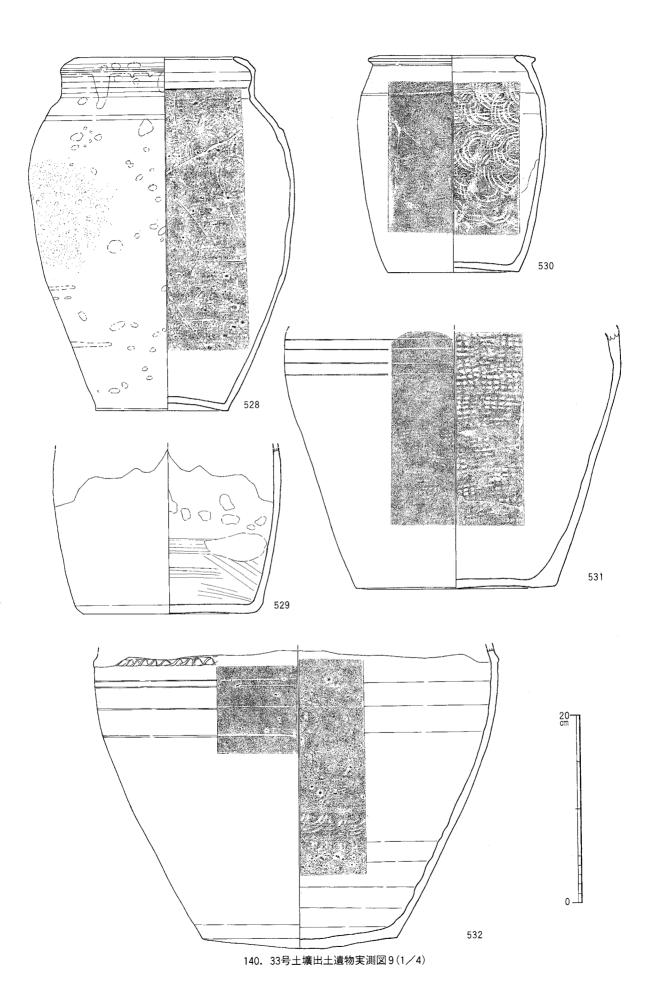


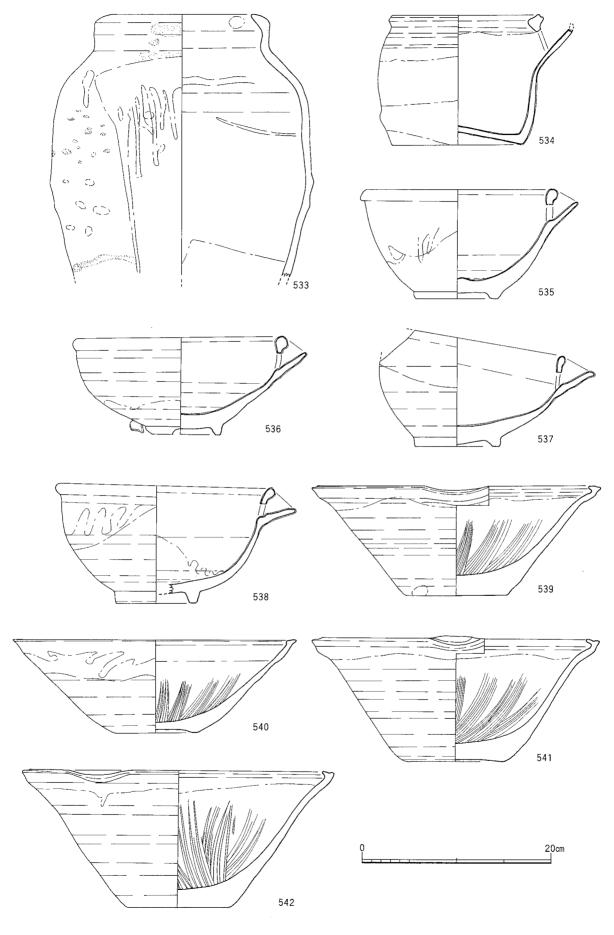


138. 33号土壙出土遺物実測図7(1/3)

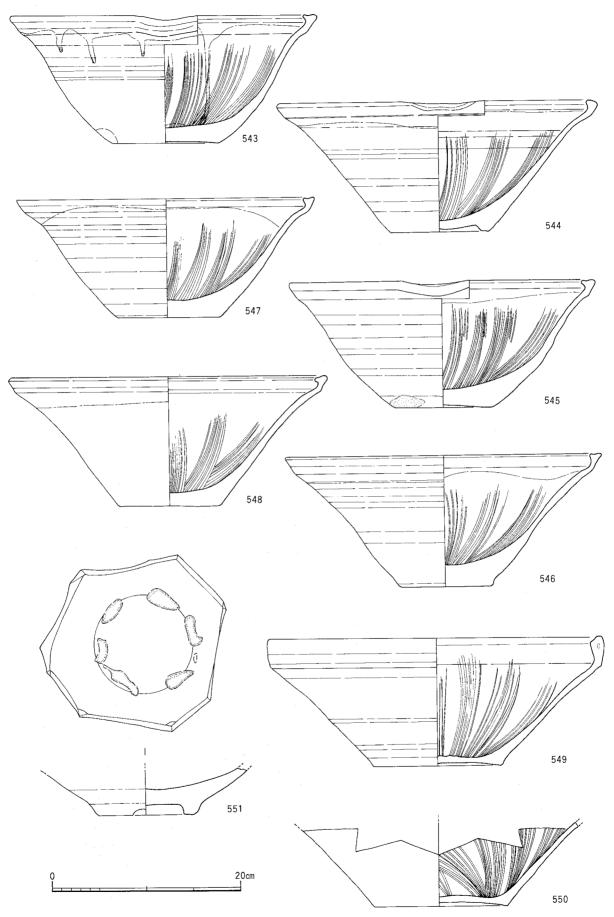


139. 33号土壙出土遺物実測図8(1/4)

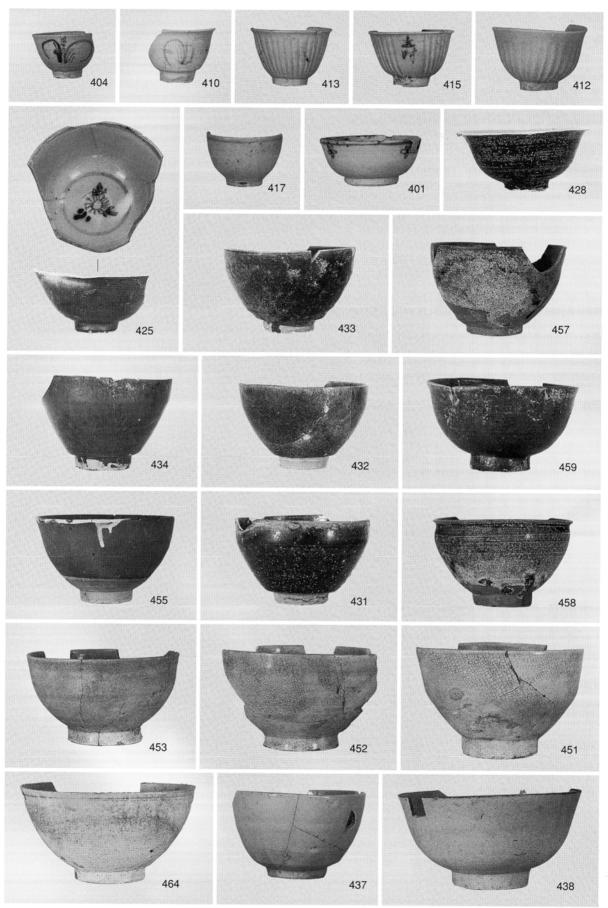




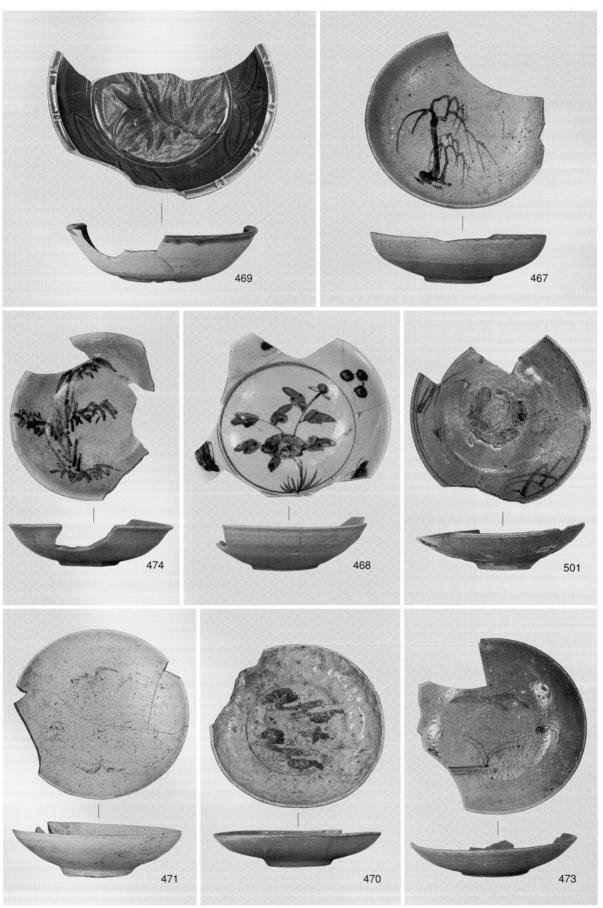
141. 33号土壙出土遺物実測図10(1/4)



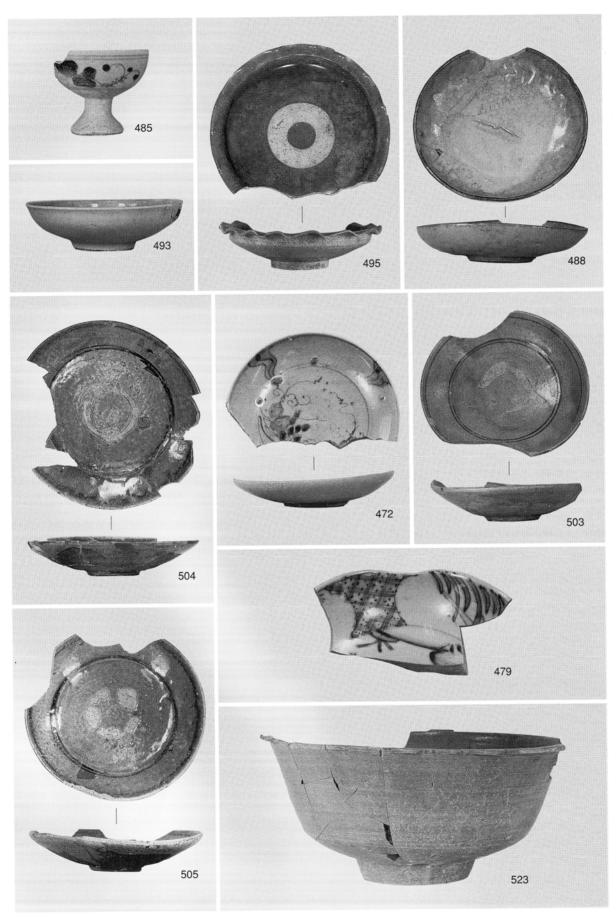
142. 33号土壙出土遺物実測図11(1/4)



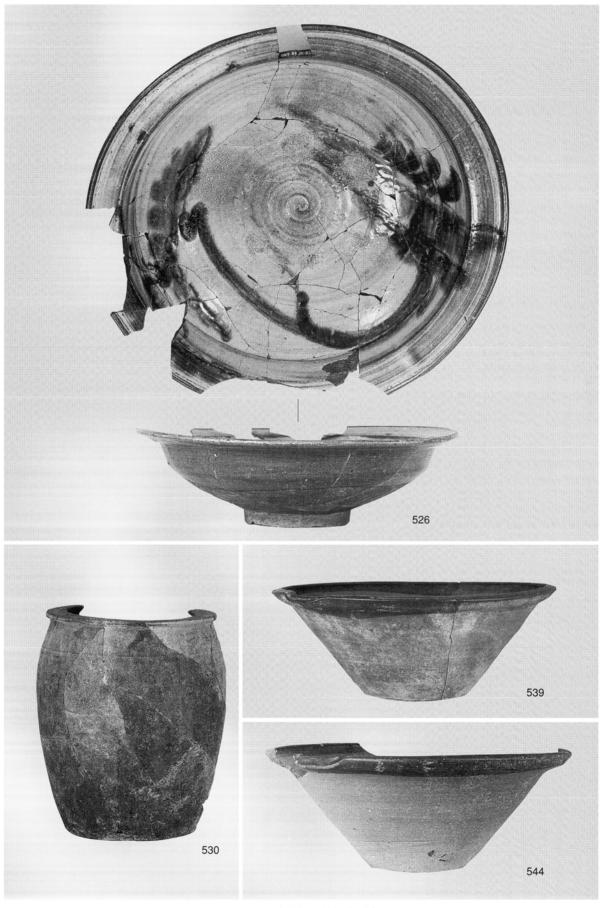
143. 33号土壙出土遺物1(1/3·1/4)



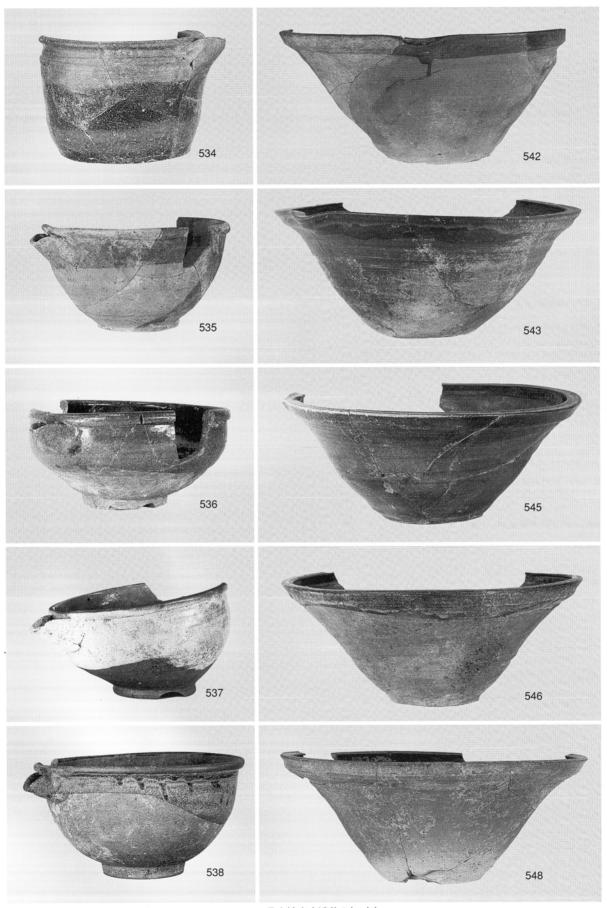
144. 33号土壙出土遺物 2 (1/3·1/4)



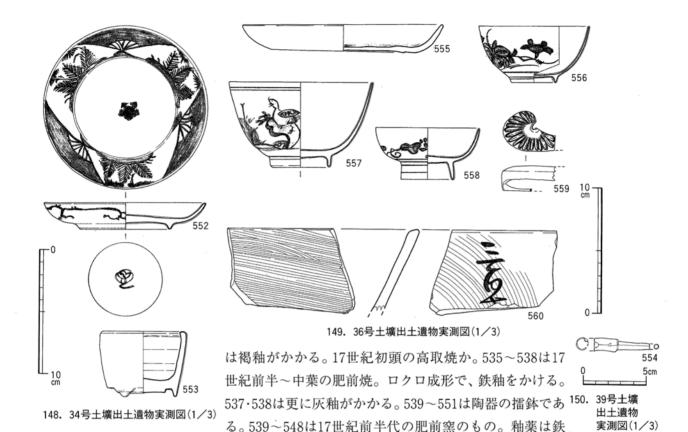
145. 33号土壙出土遺物 3 (1/3·1/4)



146. 33号土壙出土遺物 4(1/4)



147. 33号土壙出土遺物5(1/4)



釉で、540は鉄釉に灰釉がかかり、542・546は褐釉である。539~546は片口の擂鉢。544はロクロ成形で、底部は刳り底。539・542・546~548は糸切り底である。549・550は在地系のものか。降ろし目は6~18条を一単位としているが、7~8条が平均的である。

3 4 号土壙(付図1)

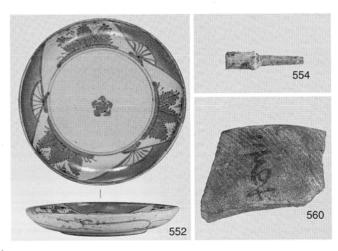
3 4 号土壙は、B区南端のD-WI区にある不整形の土壙で、東側は23号石積土壙と重複している。平面的には長さが350cm、幅は広いところで180cm、狭いところで80cmときわめていびつである。底面も凹凸が著しく、面的には掴みがたい。土壙の上面には、23号石積土壙の周辺に散乱する瓦片が重なるようにして拡がっており、その下部構造の可能性も考えられるが調査時には確認できなかった。

出土遺物(148・151)

552は口銹の磁器皿で、口径12.8cm、器高2.1 cm。見込の中央には五弁花文をコンニャク印判で捺し、内縁には扇に松文を描く。また、唐草文を裏文様に描いている。553は、肥前窯の青磁香炉で、口径6.8cm、器高は5.2cm。釉薬は淡いオリーブ色の半透明釉をかけ、3本の小さな脚がつく。

3 6 号土壙(付図1)

36号土壙は、B区東側のE-WI区の大型の 土壙で、南壁は38号井戸跡に切られている。 平面形は、長軸が305cm、短軸が255cmを測る楕 円形プランを呈し、N-18°-Wに主軸方位



151. 34·36·39号土壙出土遺物(1/2·1/3)

をとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、壙底は凹レンズ状をなす。壁高は60~65cm。 東壁上には22号建物跡の基礎石列がある。 覆土からは「寛永通寳」(1483)や瓦片が出土 している。

554は銅製の煙管の吸い口である。

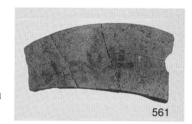
982・992は三つ巴文の軒丸瓦。993・1006・1007は丸瓦。993は長さ26cm、幅14.5cm、厚さは2cmである。1006は「九郎右衛門」、1007は「・・左衛門」の刻印がある。1015~1018は軒平瓦である。

1545は長さ38mm、厚さ11.2mm、重さ4gの土錘 である。

561 562 563 0 20cm 152. 48号土壙出土遺物実測図(1/4)

3 9 号土壙(付図1)

3 9号土壙は、B区西部のE-WI区に位置する小型の円形土壙で、南には22号建物跡が、北には21号石積土壙がある。土壙は直径が85~90cmで、北壁側には半月状の小さなフラット面がつく。壁高は38cmで、壙底は浅い凹レンズ状をなす。

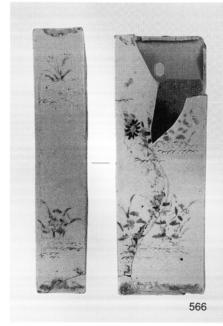


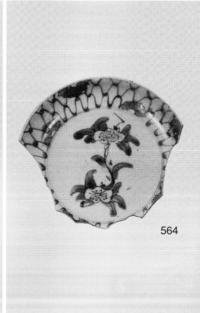
153. 48号土壙出土遺物(1/3)

出土遺物(150・151・241)

555は口径16.2cm、器高2.2cmの土師器坏。内底面には油煙が付いている。556·557は染付碗。556は口径9cm、器高4.5cmで、草花文を描く。高台脇~高台ぎわには圏線が巡る。557は口径11.4cm。口縁部下と高台ぎわに2条の圏線が巡り、その間に鳥に山を描いている。高台

る。557は口径11.4cm。口縁部下と高台ぎわに2条の圏線が巡り、その間に鳥に山を描いている。高台内には「大明」銘がある。1660~70年代。558は高台の高い染付小碗で、唐草文を描く。559は型押成形の水滴。560は土師質の鉢で体部には縦に「三百七・」の墨書がある。1019は軒平瓦。







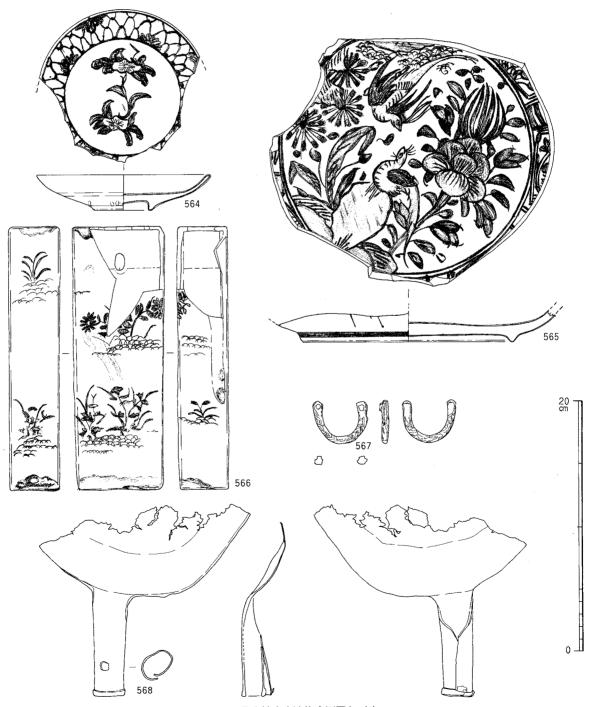
154. 78号土壙出土遺物(1/2·1/3·1/4)

4 8 号土壙(付図1)

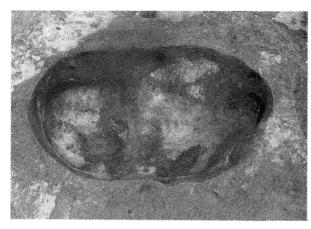
48号土壙は、B区北端のF-VI区に位置し、すぐ西に31号土壙が、東には95号土壙がある。東壁が B・C区の調査区境で未検出であるが、平面形は短軸が100cm、長軸が180cmほどに復原できる楕円形のプランをなそう。主軸方位は $N-44^\circ-E$ にとる。壁面は緩やかで、壁高は75cmを測る。 $50\sim60\text{cm}$ の円形の底面は、浅い凹レンズ状をなしている。

出土遺物(152·153)

 $561\sim563$ は土師質の鉢で、いずれも体部の外面には横書きの墨書がある。561は「弐百弐・」の漢数字が書かれている。562は「弐百」と読めようか。563は底径20cmで、墨書は判読できない。内外面ともに粗いハケ目調整である。胎土は粗く砂粒と雲母を含む。



155. 78号土壙出土遺物実測図(1/3)





156. 79号土壙全景(西より)

157. 82号土壙全景(西より)

7 8 号土壙(付図1)

78号土壙は、C区南西端のC-VI区に位置する土壙で、すぐ西には77号石積土壙がある。平面形 は、長さ280cm、幅220cmの隅丸長方形プランを呈し、N-35°-Eに主軸方位をとる。土壙は深さ60cm のところで平坦面をつくり、東へむかって緩やかに傾斜する。この壙底の北東壁側には、150×95cmの 小土壙が更に掘り込まれている。深さは25~35cm。覆土中からは寛永通寳や有田の色絵花瓶が出土し ている。時期は18世紀初め頃であろう。

出土遺物(154・155・294)

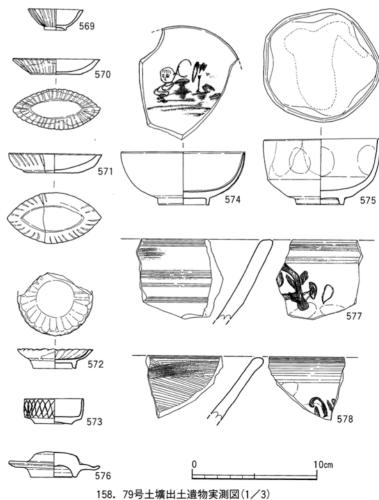
564は口径13.6cmの染付皿。見込には草花を、その周りには一重網目文に菊を描いている。畳付は釉

はぎ。1630~40年代。565は大皿 精品。釉薬は淡い青白色で、染付 は藍色の濃淡で芙蓉と鳥を描く。 1655~80年代。566は有田柿右衛 門様式の色絵花瓶。乳白色の白 磁胎を素地にして上絵付けをし ている。1670~1700年代。

567は幅4.2cmの銅製の把手金 具。基部には留釘装着の孔があ り、U字状の把手には刻み文があ る。568はスコップ状の銅製品。 柄の装着部には留釘用の角孔が ある。1484~1486は寛永通寳。

79号土壙(156)

79号土壙は、C区南西部のD -VI区にあり、83号土壙のすぐ西 に位置している。平面形は、長軸 が280cm、短軸が185cmの楕円形の プランを呈し、主軸方位をN-57 。 - W にとる。壁面は北小口壁 が急峻に立ち上がるほかは緩や かに立ち上がり、壁高は60~65cm



を測る。底面は中央部が凹み、断面形は浅い舟底状をなす。濃灰褐色~灰黒褐色の覆土中からは陶磁器の皿や碗、擂鉢等のほかに銅銭も出土している。時期は18世紀後半。

出土遺物(158・

294)

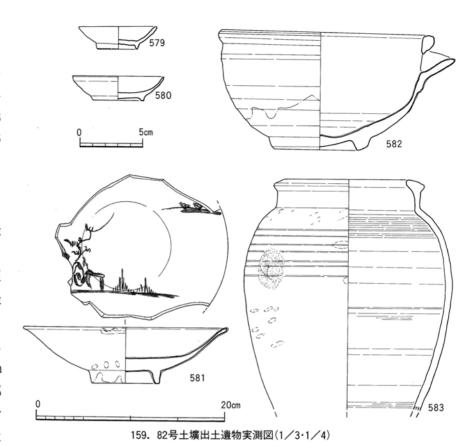
569は白磁の小皿で、口径 4.6cm、器高は1.6cm。570・ 571は型押成形の笹皿で、灰 白色の釉薬がかかる。長径 7~7.3cm、短径は3.2~4. 1cm、器高は1.2~1.5cm。 572は口径5.9cm、器高1.5cm の小皿。型押成形で口縁部 は輪花状をなす。573は染付 の小皿で口径4.6cm、器高は 2cm。呉須で網目文を描い

ている。576は青磁の壷の蓋。釉薬 は透明な淡灰緑色。574は京焼風の 肥前陶器碗。見込には山水に子供 を描き、高台は無釉。17世紀末~18 世紀初頭。575は梅形をした小石原 焼の陶器碗で、鉄釉とわら灰のか け分け。17世紀末~18世紀前半。 577·578は土師質の鉢で、外面には 墨書がある。577は判読不能。578は 横書きの漢数字のように読める。 「百」か。

1487は1368年初鋳の「洪武通寳」。

8 2 号土壙(157)

82号土壙は、C区南西端のD-WI区に位置し、南へ3mの距離には77号石積土壙がある。平面形は長軸175cm、短軸103cm、深さ85cmの楕円形プランを呈し、主軸方位はN-5°-Eにとる。断面形は舟底状をなす。18世紀後葉。



582 608

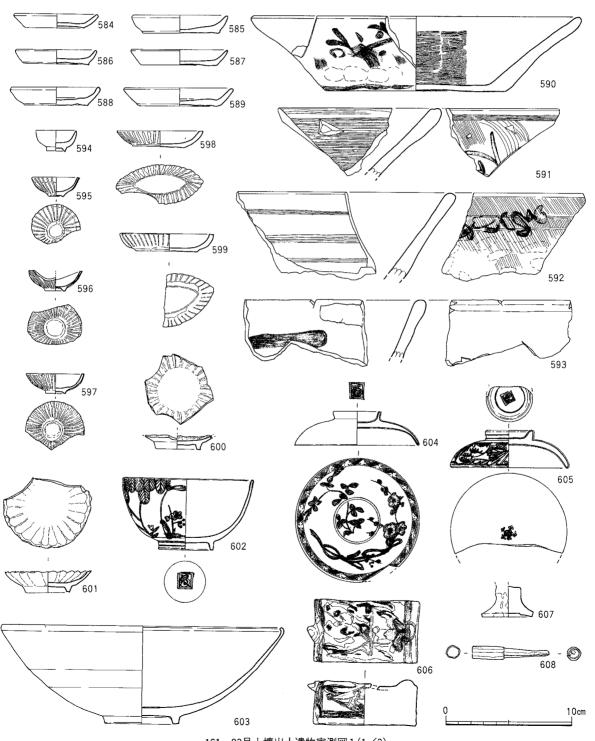
160. 82.83号土壙出土遺物(1/2.1/3.1/4)

出土遺物(159・160・241)

579·580は磁器小皿で、灰白色の釉薬がかかる。581は染付皿で、口径は21.6cm、器高は6cm。見込には呉須で山水文を描く。畳付は釉はぎで、砂目が付着している。1630~40年代。582は三日月高台の陶器片口で、注口部は貼り付けている。釉薬は鉄釉。見込には砂目積みの目砂が4ケ所にある。口径は22.8cm、器高は12.6cm。583は口径16cmの陶器壷。肩部には7条のヘラ書きの凹線が巡る。内外ともに格子目の叩き後にナデ。17世紀前~中葉。1020は軒平瓦。

83号土壙(付図1)

83号土壙は、C区南西部のD-V区に位置する大型の土壙で、すぐ北には84号土壙が、南へ3mの

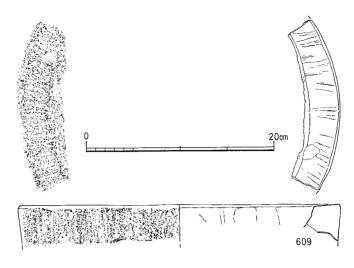


161. 83号土壙出土遺物実測図1(1/3)

距離には145号建物跡がある。平面形は、長さが230cm、幅が205cmの隅丸方形プランを呈し、N-35°-Eに主軸方位をとる。ほぼ平坦な底面は、西壁の南隅にある60×80cmの楕円形の凹みにむかって緩やかに傾斜する。深さ80cmの壁面はやや急峻に立ち上がり、断面形は逆台形をなす。覆土中からは18世紀中葉~後半の磁器碗や皿、鉢などが出土している。

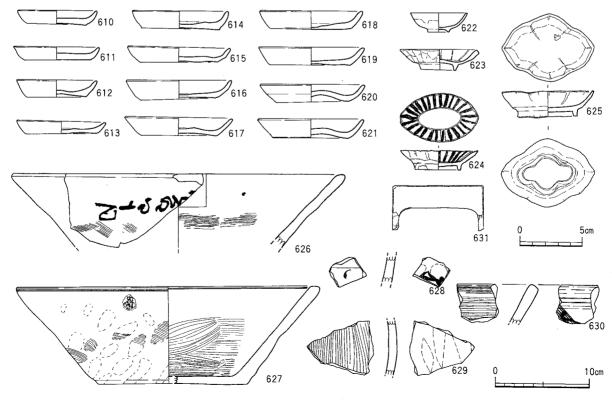
出土遺物(161・162・294)

584~589は土師器小皿。590~593は土師 質の鉢で体部に横書きの墨書がある。590 は口径25.7cm、器高は5.9cm。「弐百」と読



162. 83号土壙出土遺物実測図2(1/4)

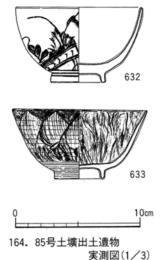
める文字がある。591は「百」が読め、その上は一~三の字であろうか。592は「三百」と書かれ、その下は読めない。593は横に太く「一」の字があるが、全体は判読できない。594は磁器小坏。595~597は口径3.8~4.6cm、器高が1.5~1.6cmの型打成形の小皿。598·599は笹皿。釉薬は明るい青灰色。600·601は輪花状口縁の小皿。601は口径6.9cm、器高は1.7cmで明青灰色の釉薬がかかる。602は肥前染付の磁器碗で口径10.3cm、高台径4.4cm、器高は5.7cm。草花文は呉須で藍色の濃淡をつけ、高台内には渦福銘がある。18世紀前半の作。603は小石原の陶器碗で口径は22.2cm、器高は7.8cm。不透明な茶色の釉薬をかけ、見込は輪状に釉を掻きとっている。17世紀末~18世紀前半。604·605は染付の蓋。604は18世紀前半の有田窯。口銹で青磁と染付をかけ分け、見込には梅文を描き摘みには渦福銘がある。605は呉須で松竹梅を描く。摘みには渦福銘が、見込には五弁花文のコンニャク印判を捺している。18世紀前半。606は枝に鳥を配した三彩の水滴。607は在地系の仏飯器の脚部。609は挽き臼。



163. 84号土壙出土遺物実測図(1/3·1/4)

8 4 号土壙 (付図1)

84号土壙は、C区南西部のD-V区にある小型の土壙で、すぐ南には83号土壙が並列して位置している。平面形は、長軸が128cm、短軸が92cmの楕円形プランをなし、主軸方位はN-41°-Eにとる。西小口壁寄りにある壙底は50×60cmの円形を呈し、浅い凹レンズ状をなす。また、東小口壁側には壙底より15cmほど上面に小さなフラット面を作り、いわゆる2段掘りの構造をなしている。





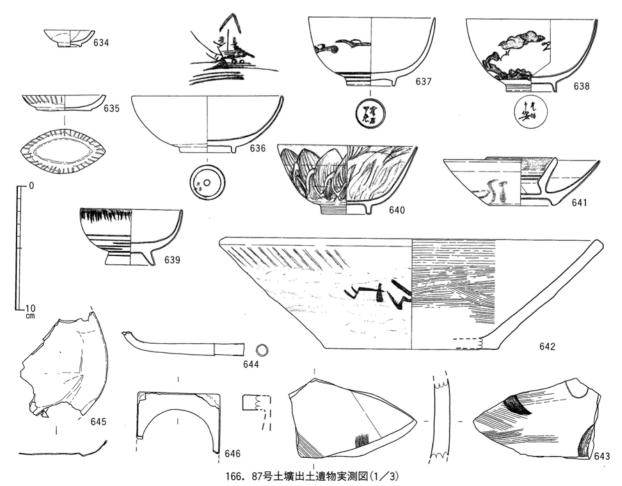


165. 84.85号土壙出土遺物(1/3)

出土遺物(163·165)

610~621は糸切り底の土師器小皿である。口径が6.4~6.8cmを

測る小さいもの(610~612)と7.2~8.8cmとやや大きめのもの(613~621)とがある。626~630は土師質の鉢で、627を除いては墨書がある。626は口径が35cmに復原され、体部には横書きで「・百四十円」と読める。百の上の文字は「伍」かも知れない。628~630は判読不能。627は口径32cm、器高は14.4cm。調整は粗く、外面には指頭押圧痕が残る。622・623は磁器小皿。623は型押成形で明灰色の釉薬をかける。624は型押しの笹皿で、口縁部は輪花状をなす。明青灰色の透明釉をかける。625は型押成形の磁器小皿で、口縁部と高台は花弁状をなす。明青灰釉。631は幅が7.1cmの石硯。



8 5 号土壙(付図1)

85号土壙は、C区南西部のD-V区に位置する小型の土壙で、すぐ西には83・84号土壙が南北に並んでいる。平面形は、長さが160cm、幅が120cmを測る菱形に似た楕円形のプランを呈し、N-27°-Eに主軸の方位をとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、断面形は底面の中央部が浅く凹んだ舟底状をなしている。覆土は粗砂粒を多く含んだ濃灰~暗灰褐色土で、陶磁器碗が出土している。時期は18世紀前半頃。



167. 87号土壙出土遺物(1/2·1/3·1/4)

出土遺物(164·165)

632は肥前の染付磁器碗で、口径は10.2cm、高台径は4.4cm、器高は6cmを測る。外面には八つ橋文を、高台ぎわには2条の圏線を呉須で描いている。17世紀末~18世紀初頭。633は長崎現川窯の陶器碗で、口径10.6cm、高台径4cm、器高は5.5cm。茶色の釉薬の上に白化粧土の打ち刷毛目装飾で蓮華文を描いている。18世紀前半代。

87号土壙(付図1)

87号土壙は、C区南部のD-V区に位置する小型の土壙で、西壁は86号土壙に切られている。土壙の3mほど北には139号建物跡の西棟側基礎石列の隅角がある。平面形は、長軸が168cm、短軸が113cm

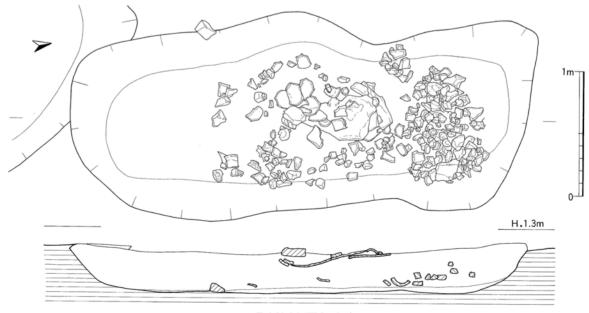
の楕円形プランを呈し、 $N-55^{\circ}-W$ に主軸方位をとる。壁面はやや急峻で、底面までの深さは63cmを測る。断面形は舟底状をなす。

出土遺物(166・167)

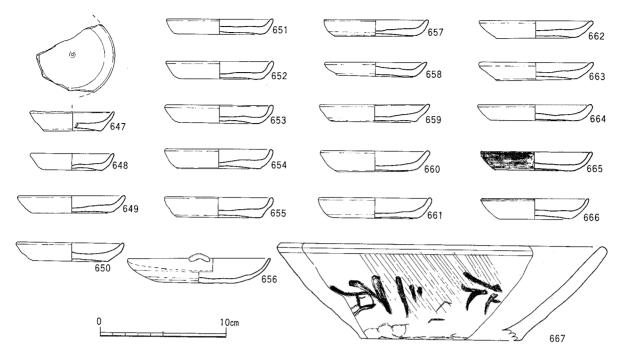
634は口径が4cmの磁器小皿。明青灰色の釉がかかる。635は型押成形の笹皿である。釉薬は灰白色。636・640は陶器碗。637~639は染付の磁器碗。636は京焼風の碗で、見込には山水文を描き、高台内には「森」の銘がある。高台部は無釉。1670~90年代。640は長崎現川窯の碗。茶色の釉薬の上に白



168. 92号土壙全景(東より)



169. 92号土壙実測図(1/30)

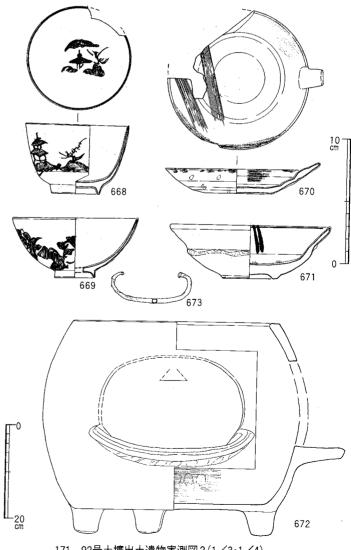


170. 92号土壙出土遺物実測図1(1/3)

化粧土で打ち刷毛目の蓮華文を描く。18世 紀前半代の作。637は口径10cmで山水文を 描き、高台内には「大明年成」と読める銘が ある。高台ぎわ~脇には圏線が巡る。焼 成は不良。638は口径が10.5cm、器高は5. 8cm。外面には山水文を、高台ぎわに圏線 を描いている。高台内には「大明年製」銘 がある。18世紀前半代。639は口径8cm、器 高が4.4cmの染付小碗。口縁部下には雨降 り文を、腰部~高台ぎわには圏線文を描い ている。高台は高く、畳付には砂目が付着 している。18世紀前半代。641は鉄釉陶器 の灯明皿。口径は5.8cm、器高は3.8cmを測 る。碁笥底で、口縁部は無釉。17世紀中葉 ~18世紀。642.643は土師質の鉢で、体部 には墨書があるが判読できない。642は口 径30.3cm、底径13.8cm、器高は8.7cm。外 面は押圧ナデ、内面はハケ目調整。胎土は 砂粒を多く含み、色調は渇灰~明褐色。

644は銅製の煙管の雁首。645は銅製の薄 い容器で、口縁部は4mmほどを外側に折り 返している。径は13cmほどになろうか。

646は緑色泥岩質の石製硯で、幅は6.4cm を測る。



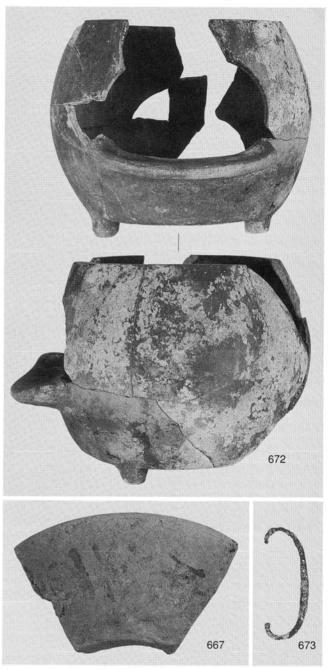
171. 92号土壙出土遺物実測図2(1/3·1/4)

92号土壙(168・169)

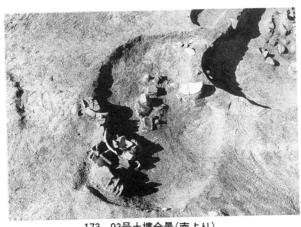
92号土壙は、С区南部のС-Ⅲ区に位置 する大型の土壙で、埋め立てられた石積護岸 跡の落ち際辺りに占地している。南小口壁は 93号土壙の東側壁を切っている。平面形は、 長さが363cm、幅が155cmの不整な長方形のプ ランを呈する。主軸方位はN-9°-Eにと る。壁高は40cmを測り、壁面は緩やかに立ち 上がる。壙底は平坦で、断面形は逆台形をな す。壙内には、北小口壁側から壙底にむかっ て瓦片や礫石が大量に投げ込まれていた。ま た、これら礫片に混じって土師器皿や肥前の 陶磁器類も出土している。時期は18世紀前半 頃と考えられる。

出土遺物(170~172・238・ 240)

647~655・657~666は、土師器小皿である。 口径の大きさから、7cm未満の小さめのもの (647·648)と8.6~9.4cmの大きめのもの(649 ~655・657~666)とがある。このうち、647は 底部の中央に1個の円孔が穿たれている。665 は外面に煤が付着しており、灯明皿に転用さ れたものか。調整は体部が回転ナデ、底部は 内面がナデ、外面は糸切り。656は口径11. 2cm、器高が2cmの陶器皿。口縁部には豆粒状 の粘土紐を貼り付けている。口縁部~内面に は赤色の化粧土が塗布されている。底部は糸 切り後に体部下半までヘラケズリを加えてい る。667は口径26.4cm、底径13cm、器高が7. 7cmの土師質の鉢。体部には横書きの墨書が



172. 92号土壙出土遺物(1/2·1/3·1/4)



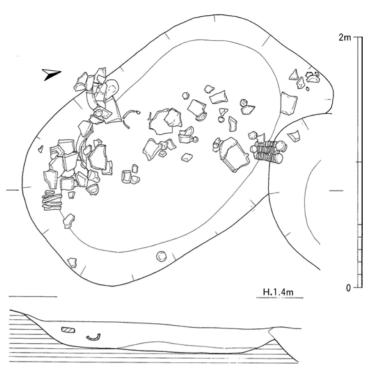
173. 93号土壙全景(南より)



174. 93号土壙遺物出土状況(西より)

ある。「・三石」と読めるが「・三百」かも しれない。また、初めの文字は「癸」のく ずし字とも読める。とすれば十干の可 能性がある。内面はナデ、外面はハケ目 後にナデ調整。

668は有田窯の青磁染付で、18世紀前半の作。口径は8.2cm、高台径は3.8cm、器高は5.5cmである。胴部と見込には呉須で山水文を描いている。畳付は釉はぎである。669は色絵の磁器碗である。口径は9.8cm、高台径は3.2cm、器高は4.7cmで、草花文を描いている。670は陶器の灯明皿か手燭であろう。口径は11.2cm、底径は5.2cm、器高は2.5cmで口縁部の一端に短冊状の摘みがつく。茶色の釉薬をかけ、口縁部の内外面には油煙痕がついている。関西系のものか。671は肥前陶器の鉄釉の小鉢で口径13cm、高



175. 93号土壙実測図(1/30)

台径4.4cm、器高は4.2cm。三日月高台~腰部までは無釉で、腰部の屈曲面には釉溜りがある。また、見込には3個の胎土目痕がある。672は瓦質の小竃である。口径は21.8cm、器高は22.6cm。体部の中央に15.5cm×10cmの楕円形の炊き口がつき、その対面には一辺が3cmの三角形の排煙口を付けている。底部には径2.7cm、高さ2.5cmの3本の脚がつく。外面はナデ、内面はハケ目調整で全体に煙痕がついている。673は幅が5.3cmの銅製の把手金具である。

983は三つ巴文の軒丸瓦である。巴は尾が短く、大きめの連珠文が9個つく。1008は丸瓦で、「・・左衛門」の印刻が捺されている。

93号土壙(173・174)

93号土壙は、C区南部のC-Ⅲ区に位置する大型の土 壙で、埋め立てられた石積護岸跡の落ち際辺りに占地して いる。東壁の北小口壁側は92号土壙に切られている。平面 形は、長さが246cm、幅が156cmの隅丸長方形のプランを呈 し、N-20°-Wに主軸方位をとる。壁面は緩やかに立ち 上がり、壁高は30cmを測る。底面は中央部が浅く凹むがほ ぼフラットで、断面形は逆台形をなす。覆土は濃灰褐色の 粘砂土で、炭片や灰層が混入していた。遺物は磁器碗や大 鉢、仏飯器等が南小口壁側から比較的まとまって出土し、 壙底の中央部はやや希薄になる。南小口壁側から投棄が推 測される。また、92号土壙の南小口壁に切られた壁際には 積み重ねられた10~15枚の土師器小皿が真ん中に2段、そ の両脇に1段が十文字状に横臥した状態で出土した。10数

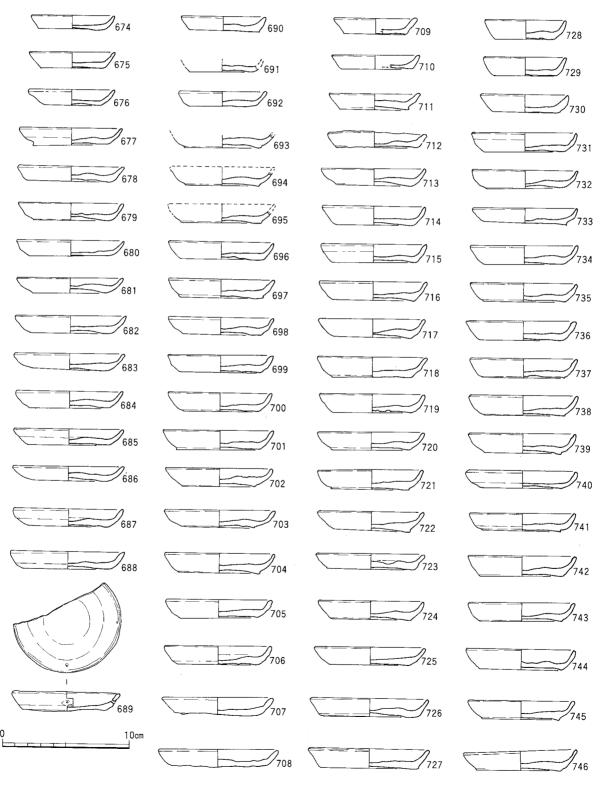


176. 93号土壙出土遺物(1/4)

枚 \sim 20数枚を一単位として結び束ねていた可能性もある。土師器小皿は比較的新しいもので、商品であったものかもしれない。時期は18世紀の前半頃。

出土遺物(176~178)

 $674 \sim 746$ は糸切り底の土師器小皿である。口径の法量から口径が $6.6 \sim 7.2$ cmと小さいもの $(674 \sim 676 \cdot 690 \sim 692 \cdot 709 \sim 711 \cdot 728 \sim 730)$ と口径が $8.2 \sim 9.8$ cmと大きめのもの $(677 \sim 689 \cdot 693 \sim 708 \cdot 712 \sim 727 \cdot 731 \sim 746)$ とに大別される。調整は体部が回転ナデ、内底面がナデで、外底面には糸切り後に板目



177. 93号土壙出土遺物実測図1(1/3)

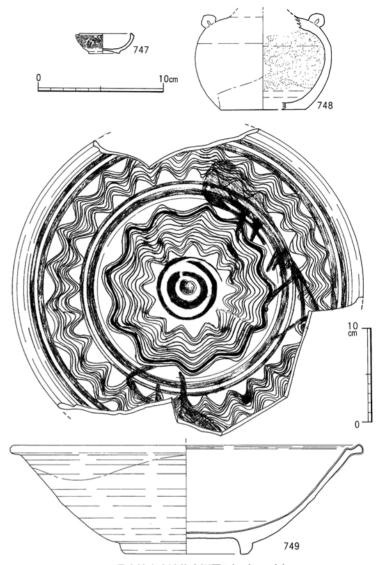
圧痕の付いたものもある。体部は 内弯ぎみに立ち上がるものが一般 的であるが、ストレートに立ち上が るもの(709・711・723・727)もある。 689は体部に直交して2個の円孔が 穿たれているが、2個一対の円孔が あった可能性が強い。天秤の受け 皿的な機能が想起される。

747は口径が4.6cm、器高が1.6cm の染付の合子である。748は陶器の 双耳小壷である。耳は粘土紐を平 たく丸めて中空にして付けている。 外面には灰黒色の釉薬がかかり、内面には鉄錆が付着している。749は 肥前陶器の二彩の大皿である。 口径は37cm、高台径は13cm、器高は11.5cmを測る。見込には渦巻き状の圏線を3段に描き、その中に刷毛目で波状の模様をいれている。見込と高台には砂胎土目の目砂がついている。また、口縁部下から高台は無釉。17世紀末~18世紀前半代。

95号土壙(179)

95号土壙は、C区西端のE-VI 区にある大型の土壙で、西には111 号土壙が、南東へ6mの距離には96

号石積土壙が位置している。平面形は、長軸が225cm、短軸が140cmを測る楕円形のプランを呈し、N-36°-Eに主軸方位をとる。東小口壁は、25cmほど下がったところで半月状の緩やかなフラット面を造り、そこから更に20cmほど下がって壙底へと続く。いわゆる2段掘りの構造をなす。壙底の標高は海抜0.93mである。壁面はやや急峻に立ち上がり、舟底状の断面形をなしている。覆土は粗砂粒を含んだ暗灰褐色~黒灰色土で、炭片も混入していた。遺物は陶磁器の碗や皿のほかに墨書の鉢が比較的多く出土している。また、西小口壁際からは皮膜のみになった漆器が出土した。時期は18世紀前葉であろう。



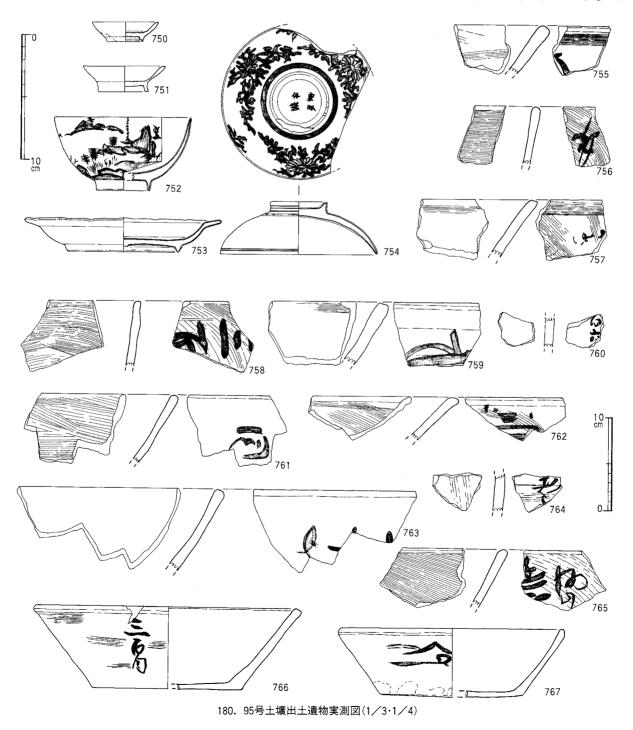
178. 93号土壙出土遺物実測図2(1/3・1/4)



179. 95号土壙全景(南より)

出土遺物(180・181・237・238・294)

750・751は磁器の小皿である。750は口径5.2cm、器高は1.5cmで明青灰色の釉薬がかかる。751は口径が6.4cm。釉薬は白っぽい明青灰色で型押成形。752は1660~80年代の有田窯の色絵磁器碗で、口径は8.8cm、高台径は4.2cm、器高は5.8cm。呉須で山水文を描いている。753は肥前青磁皿で、口径15.5cm、器高は2.7cm。口縁部は輪花状をなす。高台内にはハリ支え痕があり、目砂がついている。17世紀後半。754は有田窯の染付蓋で、1680~1700年代の作。呉須で描いた菊唐草文は鮮明なコバルトブルーに発色している。摘み内には「宣明年製」名がある。口径は12.4cm、器高は4.2cm。755~767は墨書のある土師質の鉢である。758は太く横書きし「三百」と読める。760は細い筆で縦に「百六」と書いている。761は太筆で横に「目」と書いている。766は口径が28.4cm、底径16cm、器高は8.7cmを測る。墨書は縦書きに「三百目」と読める。767は口径24.2cm、底径15.2cm、器高は7.3cm。墨書は山水文のように見える。多く



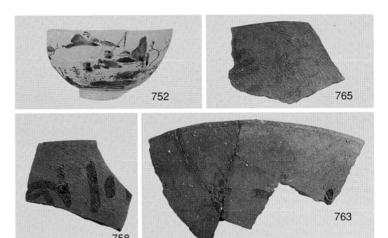
の鉢が量目を記した漢数字であるのに比べると特筆すべきものといえる。 手慰みに描いたものであろうか。いずれの鉢も胎土には砂粒を含み、明渇 〜暗黄橙色。調整は粗いハケ目で、外面には指頭押圧痕が残っている。755 〜757・759・762〜765は判読できない。

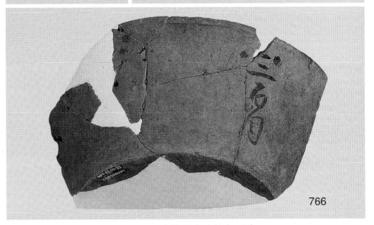
958は直径が4.6cmの円盤状土製品である。959は素焼きのお地蔵さん。962は磁器製の灯火芯建でである。胡人を模したものか。960・963は箱庭の素材か。961は動物の足か。

984は三つ巴文の軒丸瓦である。巴 文は細く尾が長い。連珠文は小さい。 1490~1492は寛永通寳。

97号土壙(182・184)

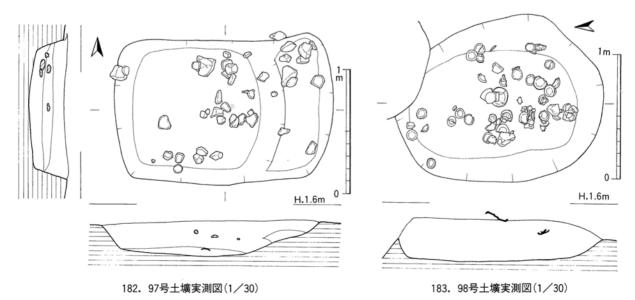
97号土壙は、A区東南部のC-Ⅱ区に位置する。西小口壁は99号井戸跡と接し、すぐ北1mの距離には64号石積土壙がある。平面形は、長さが173cm、幅が115cmの長方形プランを呈





181. 95号土壙出土遺物(1/3)

し、主軸方位を $N-88^\circ$ — Wにとる。土壙は東小口壁側に幅90cm、奥行き25cmの小さなフラット面を造った後に壙底へとつづく、いわゆる2段掘りの構造をなしている。床面は浅い凹レンズ状に中央部がわずかに凹み、断面形は逆台形をなす。壁高は30cmを測り、壁面はやや急峻に立ち上がる。覆土は暗茶褐色砂土の単一層である。遺物は土師器皿片、鉢、土錘のほかに1640~60年代の肥前磁器の仏飯器片や陶器小片がわずかに出土しており、17世紀前半代と考えられる。しかし、削平が著しく混入かとも考えられ、17世紀以前の可能性も否定できない。

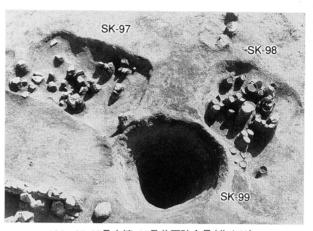


出土遺物(295)

1546は土錘である。長さは26.8mm、厚さは13.2mm で、円孔径は3mm。重さは4gである。

98号土壙(183・184)

98号土壙は、C区東端のE-Ⅱ区にある小型の土壙で、北小口壁は99号井戸跡に切られている。また、99号井戸跡を挟んだ東側には97号土壙が対峙して位置している。平面形は、長さが165cm、幅が133cmの隅丸長方形プランを呈するが、東側壁はやや張り出した形状をなしている。主軸方位はN-5°-Eにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、床面は

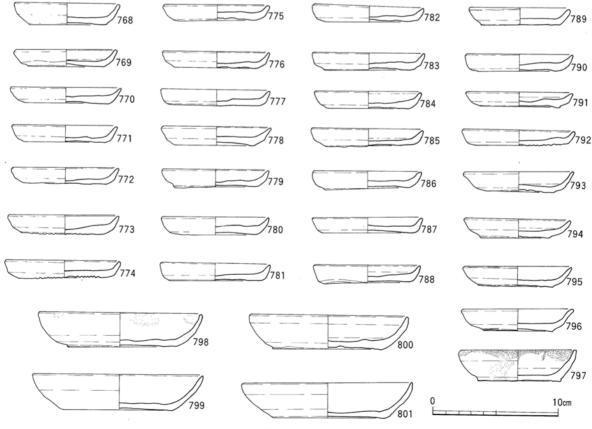


184. 97・98号土壙・99号井戸跡全景(北より)

ほぼ平坦で、断面形は浅い逆台形をなしている。壁高は35cmを測る。覆土は暗茶褐色~暗褐色の砂質 土の単純な堆積で小量の礫片が混入していた。遺物は、土師器の小皿や坏が比較的まとまって廃棄さ れていた。これらの土師器類に混じって数点の陶器小片が出土している。そのために時期的には17世 紀代以降に下るものとしたが、これらの遺物は床面より浮いた状態で、遺構の検出面のレヴェル近く から出土しており、検出時の混入も否定しがたい。とすると、土師器小皿や坏を主体的に出土する98 号土壙も97号土壙と同様に16世紀代に遡ることも考えられる。

出土遺物(185)

768~797は糸切り底の土師器小皿である。口径は8.2~9.4cmを測るやや大きめのもので、口縁部は短く内弯ぎみに立ち上がる。底部はやや上げ底状になるものと平底状をなすものとがある。調整は体部が回転ナデ、内底面はナデ仕上げである。797は器高が2.5cmと高いものである。内外面に油煙が付



185. 98号土壙出土遺物実測図(1/3)

着している。灯明皿に転用されたものであろう。

798~801は、口径が12.8~13.8cm、底径が8.8~9cm、器高は2.7~2.9cmの土師器坏である。口縁部がストレートに立ち上がるもの(798・799)と小さく直口ぎみに立ち上がるもの(800・801)とがある。調整は体部が回転ナデであるが、内底面は回転ナデ(798・799)とナデ(800・801)がある。798は内外面に油煙痕があり、灯明皿への転用品か。

102号土壙(186)

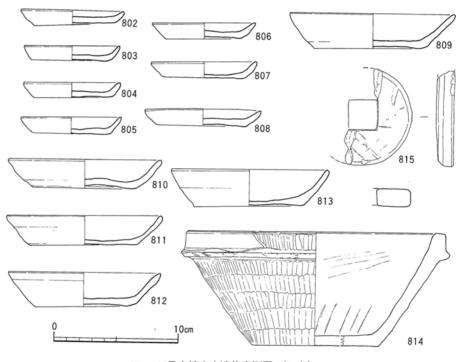
102号土壙は、C区 東部のC~D-IIにある 大型の土壙で、東穂 107号井戸跡と重複、下土 を重複と重な、不壁し長をで、を260cm、幅215cmのの形を呈する。は25をや急で、を連載をで、を連載をで、30cmを配前をといるが、ないるが、ないないである。97・98号とに古りまた。16世も考えられる。

出土遺物(187・ 188・295)

802~808は糸切りの土



186. 102号土壙全景(北より)



187. 102号土壙出土遺物実測図1(1/3)

師器小皿で、口径は $7.8\sim9.4$ cm。 $809\sim813$ は土師器坏で、口径は $12.4\sim13.2$ cm、器高は $2.4\sim3$ cmを測る。816は瓦質の片口鉢で、口径は25cmを測る。胎土は微細砂粒と雲母を含み、淡灰褐色。

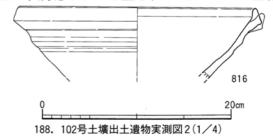
814はⅢ類の滑石製石鍋で、口径20.8cm、底径10cm、器高は9.2cm。鍔の断面形は不等辺台形状をなし、鍔の下には5段に鑿の加工痕がある。815は直径8cmの滑石製円盤で、2.3cmの角孔がある。

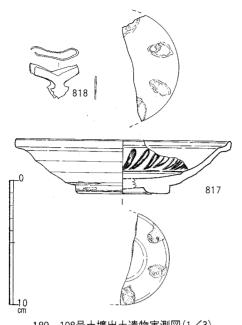
1547は土錘で長さは55.9mm、厚さが10.3mmで円孔径は2.6mm。重さは6gである。

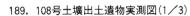
108号土壙(付図1)

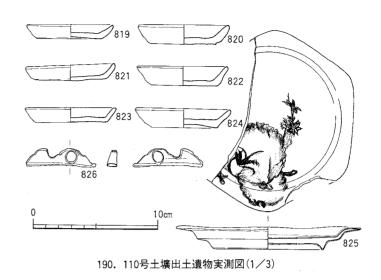
108号土壙は、C区東南部のD-Ⅱ区にあり、東小口壁は156号土壙に切られ、南側壁は157号土壙の北壁を切っている。平面形は、長さが260cm、幅は120cmの長方形プランを呈し、N-87°-Eに主軸

方位をとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、壁高は50cmを測る。 壙底は中央部が浅く凹レンズ状に窪み、断面形は舟底状をなしている。 覆土中からは土師皿のほかに備前の擂鉢片や肥前の碗などが出土しているが、量的には少ない。









出土遺物 (189)

817は南宋の青磁皿で、口径17cm、底径7.4cm、器高は4.4cm。 全面にオリーブ色の透明釉がかかり、見込と畳付には胎土目

の目跡がついている。818は銅製の飾金具か。三ッ葉状の装飾枝がつく。

1 1 0 号土壙(付図1)

110号土壙は、C区北西端のE-V区にあり、すぐ東には89号石積土壙が、また南へ4mの距離に は76号石積土壙がある。南壁が撹乱壙で消失しているが、平面形は一辺が200cmほどの方形をなそう。 壁面はやや急峻に立ち上がり、壁高は50~55cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形をなす。土壙

内からは土師皿や瓦質鉢と肥前磁器皿などが出土している。時期的に は17世紀中葉頃であろう。

出土遺物(190·237)

819~824は、糸切り底の土師器小皿である。口径は7~7.8cm、底径は 5.2~5.8cmで器高は1.1~1.6cmである。体部は回転ナデ調整。825は肥 前染付の六角形皿で、口径は14.6cm、器高は1.7cmである。水色に施釉 された見込には花と雪を描いている。高台内にはハリ支え痕がある。 1660~70年代の製品である。959は三猿の置人形。

826は青銅製の飾金具。山形の把手には9mmの円孔がある。

111号土壙(付図1)

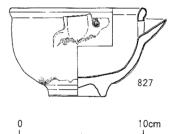
1 1 1 号土壙は、B区北端のE-Ⅳ区に小型の土壙で、22号 建物跡基礎石列の北東隅角に隣接している。平面形は、長さ 166cm、幅133cmを測る隅丸の方形プランを呈し、深さは50cm。 主軸方位はN-65°-Wにとる。楕円形状の壙底は、中央が 浅く凹み、壁面はやや急峻に立ち上がる。17世紀後半。

出土遺物(191・295)

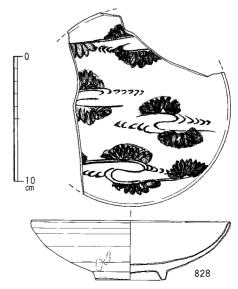
827は鉄釉の肥前陶器片口。口径11cm、器高は7cm。ロクロ 成形で高台は無釉。17世紀前半。1549は長さ33.9mmの土錘。

1 1 9 号土壙(付図1)

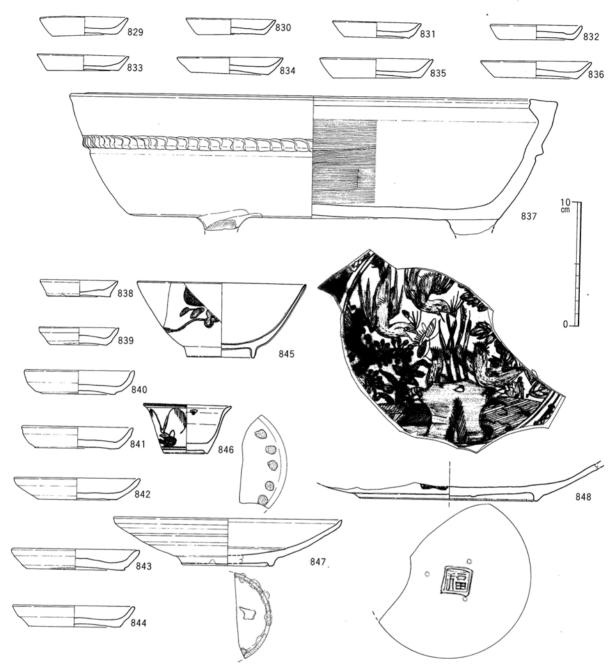
119号土壙は、C区西部のE-V区に位置する小型の土



191. 111号土壙出土遺物実測図



192. 119号土壙出土遺物実測図(1/3)



193. 131:132号土壙出土遺物実測図(1/3)

壙で、96号石積土壙から北へ2mの距離にある。平面形は、95×105cmの円形プランを呈し、壁高は40cm を測る。壁面は急峻で、断面形は逆台形をなす。肥前の磁器皿等が出土している。17世紀中葉。

出土遺物(192)

828は肥前磁器の染付皿で、口径は15.8cm。見込には呉須で菊流水文を描く。畳付は釉はぎで、砂目が付着している。1630~40年代。

1 3 1 号土壙 (付図1)

131号土壙は、C区西部のE-V 区に位置し、南壁はビル建物の基礎杭 で消失している。西隣の90号石積土壙 とともに130号建物跡の西妻側基礎石



194. 131号土壙出土遺物(1/4)

列の内側に並んでいる。平面形は、長軸150cm、短軸125cmの楕円形プランを呈し、 $N-54^{\circ}-E$ に主軸方位をとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、断面形は逆台形をなす。

出土遺物(193・194・294)

829~836は、糸切り底の土師器小皿。法量から口径が7.2~7.4cmと小さいもの(829~833)と8.6~9.2cmと大きめのもの(834~836)とがある。内面は回転ナデ調整。837は瓦質の脚付き火舎で、口径は38.4cm。口縁部は内唇が張り出し、体部には刻み目の凸帯が巡る。調整は内面がハケ目、外面は凸帯依り上が縦、下が横方向の研磨を施こす。胎土は砂粒と白色粒を含み、暗褐色。1495は「元豊通寳」。

1 3 2 号土壙(付図1)

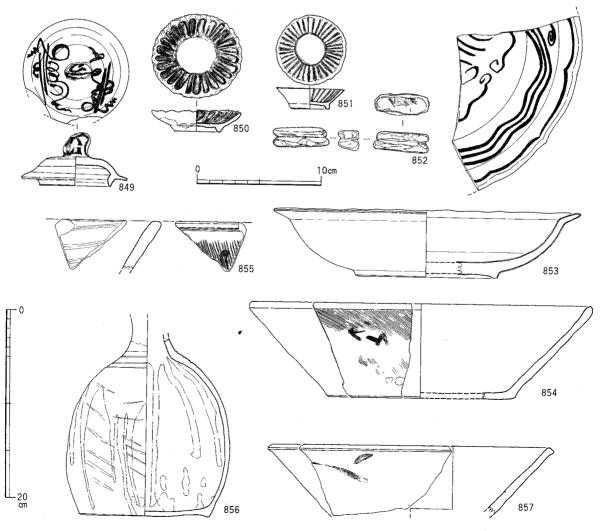
132 号土壙は、C区西部のF-V区に位置し、すぐ南には89号石積土壙がある。平面形は長さ167cm、幅148cmの方形で、壁高は65cmを測る。底面は平坦で、南西隅には 50×60 cmのピットがある。

出土遺物(193)

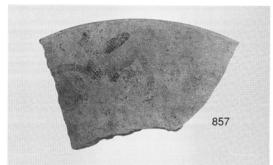
838~844は糸切り底の土師器小皿。845は肥前色絵の磁器碗で、口径13.4cm。畳付は釉はぎ。17世紀後半。846は明末の景徳鎮窯染付小坏。釉薬は淡青白色の半透明で、畳付は釉はぎ。847は李朝の白磁皿で、口径は18cm。釉薬は灰白色の半透明釉で見込と畳付には胎土目跡が残る。848は有田窯の染付皿で、見込には芙蓉文を描く。高台内には3本のハリ支え痕があり、その中に角に福の銘がある。

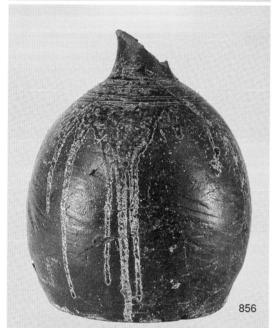
1 4 2 号土壙(付図1)

142号土壙は、C区南部のD-V区にあり、83号土壙の東南隅壁を切っている。平面プランは径が

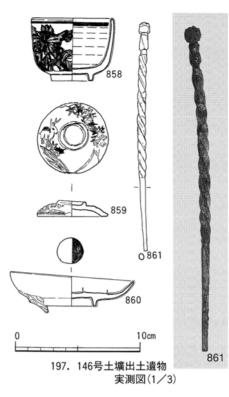


195. 142·143·144号土壙出土遺物実測図(1/3·1/4)





196. 144号土壙出土遺物(1/3)



80~85cmの円形を呈し、壁高は45cmを測る。北壁側には半月形のフラット面がつき、壙底は楕円形のいわゆる2段掘りの構造をなす。

出土遺物(195)

849は1630~40年代 の肥前染付蓋。獅子 の摘みをつけ、宝文様 を描く。釉薬は半透 明の淡灰色。

1 4 3 号土壙

(付図1)

143号土壙は、C 区南端のC・D-V区

198. 146号土壙 出土遺物(1/2) にあり、南東壁は144

号土壙に切られている。平面形は、長さ187cm、幅148cm の隅丸方形プランを呈し、壁高は42cmを測る。底面は浅い凹レンズ状をなし、断面形は逆台形をなす。

出土遺物(195・240・241)

850·851は、型押成形の磁器小皿で、口縁部は輪花状をなす。釉薬は明青灰色。853は、肥前青磁の大皿で口

径は32.4cmを測る。畳付は釉はぎで、高台内には蛇の目状の痕が残る。 $1650\sim60$ 年代。 $854\cdot855$ は墨書のある土師質の鉢。854は口径36.4cmで、文字は判読不能。

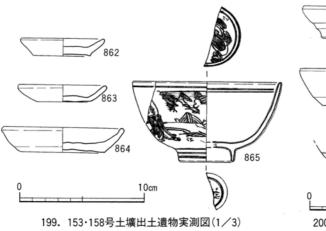
852は滑石製石鍋の再利用した有溝石錘。1009は丸瓦で「・三郎」の印刻がある。1021は軒平瓦。

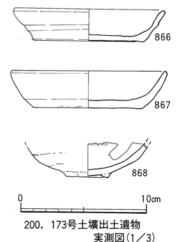
1 4 4 号土壙 (付図 1)

1 4 4 号土壙はC-V区にあり、143号土壙よりも新しい。平面形は、長軸120cm、短軸88cmの楕円形プランを呈し、壁高は32cm。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。17世紀後半。

出土遺物(195)

856は陶器壷で、鉄 釉の上から灰釉をかけている。内面に青 海波文の叩き痕が残 る。857は土師質の鉢 で、口径は30.4cm。 体部には「四百」と読 める横書きの墨書が ある。



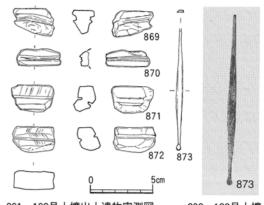


1 4 6 号土壙(付図1)

146号土壙は、C-V区にある楕円形の土壙で、北壁は145号建物跡の基礎石列に切られている。底面はフラットで、断面形は逆台形をなす。壁高は27cm。

出土遺物(197・198)

858は磁器小坏。圏線の中に花文を描く。859は色絵の蓋で、口径は5.6cm。鹿と紅葉を描いている。860は肥前磁器皿で、口径は9.8cm。灰色釉と茶色釉をかけ分け、見込は蛇の目釉はぎ。畳付は鉄銹。861は銅製の金火箸。基部は螺旋状に捻り、端部は珠状に丸くおさめている。



201. 182号土壙出土遺物実測図 (1/3)

202. 182号土壙 出土遺物(1/2)

153号土壙(付図1)

153号土壙は、E-Ⅲ区にあり、71号井戸跡のすぐ東に位置している。平面形は、径が150cmほどのやや不整な円形プランをなし、壙底までの深さは37cmである。壁面は緩やかで、断面形は逆台形を呈する。肥前磁器の皿が出土しており、17世紀中葉頃か。

出土遺物(199・241)

862・863は糸切り底の土師器小皿。口径は6.8~7.2cmで、体部の調号整は回転ナデ。864は口径10cm、底径6.6cm、器高2cmの土師器坏。体部は横ナデで底部は糸切り。1022は軒平瓦。

158号土壙(付図1)

158号土壙は、D-II区にある不整形の土壙で、長さは250cm、幅は225cm。壁面はやや緩やかで、壁高は45cm。底面は平坦で、断面形は逆台形をなす。礫石に混じって土師皿や磁器碗が出土している。

出土遺物(199)

865は景徳鎮窯の磁器碗で、口径11.7cm、高台径4.2cm、器高は6.3cm を測る。万頭心の見込に草花文を描き、高台内には銘がある。釉薬は透明な薄水色で、呉須は濃淡で描き分ける。16世紀末。

173号土壙(付図1)

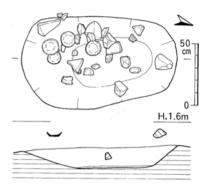
173号土壙は、 $C-\Pi$ 区にある不整形の土壙で、104号土壙の北 2mの距離に位置している。長さは220cm、幅は135cmを測り、壙底は 浅い凹レンズ状をなす。17世紀代以前に遡る可能性がある。

出土遺物(200)

866・867は糸切り底の土師器坏。口径は12.2~12.6cm、器高は2.5~3cm。体部は回転横ナデ。868は型づくりの碗で、輪積み痕が残る。

182号土壙(付図1)

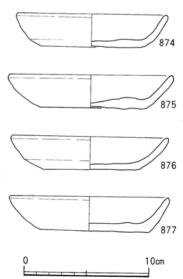
182号土壙は、C区北部のE-Ⅲにある土壙で、207号土壙を切っている。東南へ2mの距離には183号建物跡が位置している。平面形は、160×200cmの不整な円形プランを呈する。壁面はほぼ垂直で、底面は浅い凹レンズ状をなす。壁高は33cm。遺物は土師皿と滑石製品で、97・98号土壙と同様に16世紀代に遡る可能性も否定でない。



203. 195号土壙実測図(1/30)



204. 195号土壙全景(東より)



205. 195号土壙出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(201・202・294)

869~872は、滑石製石鍋を転用した有溝石錘である。870は鍔を再利用したもの。871は鍔の上縁に溝を切ったものである。長さは3.2~3.4cm。

873は銅製の耳掻き。1501は1023年初鋳の「天聖 元寳」、1502は1107年初鋳の「大観通寳」。

195号土壙(203・204)

195号土壙は、E-m区に位置する小型の土 壙で、183号建物跡の南2mの距離にある。平面形 は、長軸126cm、短軸75cmの楕円形のプランを呈し、主軸方位をN-15° -Wにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。壁高は16cm。遺物は土師器坏と17世紀初めの陶器壷片が出土しているが、それは壙底よりかなり浮いた状況にあり、16世紀代に遡ることも考えられる。

出土遺物(205)

874~877は糸切り底の土師器坏である。口径は 12.2~13.2cm、器高は2.6~2.8cmを測る。調整は 体部が回転ナデ、内底面はナデである。胎土には 砂粒を含み、色調は黄橙色~明褐色。

198号土壙(206・207)

198号土壙は、C区北部のE-Ⅱ区にある土 壙で、183号建物跡の東側基石列の円礫群を切っ ている。平面形は、長さが205cm、幅が146cmの隅 丸長方形プランを呈し、N-11°-Wに主軸方位

をとる。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は35cmを測る。 底面は平坦であるが、西小口壁側にむかって緩やかに傾斜 している。 壙底上には183号建物跡の基石である円礫が散 らばっていた。 遺物は土師皿片がわずかに出土している。

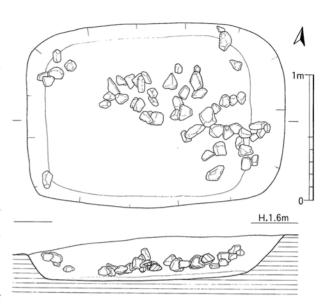
199号土壙(207・208)

199号土壙は、C区北部のE-Ⅱ区にある小型の土壙で、183号建物跡の東側基石列内に198号土壙と並列して位置している。平面プランは、長軸114cm、短軸82cmの楕円形を呈し、主軸方位をN-15°-Wにとる。壁面は緩やかで、壁高は22cm。壙底は中央が浅く凹み、

断面形は逆台形をなす。東側壁上には柱の 礎石らしき人頭大の円礫が据えられている。

出土遺物(209)

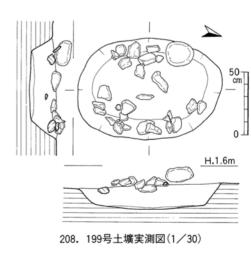
878は底径が15.6cmの滑石製石鍋で、内底 面には炭化物が付着している。



206. 198号土壙実測図(1/30)



207. 198・199号土壙全景(西より)



0 20cm

209. 199号土壙出土遺物実測図(1/3)

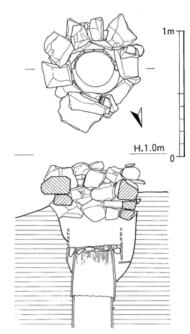
4). 井戸跡 (SE)

井戸跡は、すべてで39基を検出した。基本的には円~楕円形プ ランの掘り方内に井側を埋置するものである。その井側の構造と しては、1).素掘りのもの(SE-67·100·172)や2).桶を重ねてその 上縁に円礫石を積み上げるもの(SE-12)。3). 凝灰岩質のを板石材 を6~7角形に組み合わせたもの(SE-49·69)。4). 平瓦を巻いたも の(SE-66·71·74)。5). 半円形の陶板を円形に組み合わせたもの (SE-03)などがある。この井側の構造的な相違は、時間的あるい は技術的な進捗に起因することは容易に推察できる。それは出土 する遺物からみても明らかである。つまり素掘りの井戸跡から出 土する遺物は近世以前に遡りうるものをも含んでいる。これに対 して瓦巻きの井戸跡から出土する遺物は、わずかな混入を除くと ほとんどすべてが近世のもので、なかには近代のものまで含んで いるものもある。また、瓦巻きの井戸跡には瓦巻きのままのもの (SE-66·70)と瓦の上面に厚さ5cmほどの板石を1枚あるいは2枚敷 いて円孔を穿ち、その円孔に陶管を接して漆喰で繋いでいるもの (SE-04·06)とがある。これは前者が近世期の内に廃絶されるのに 対し、後者は近代まで使用されていたことを意味するがその開鑿 が近世に遡るものか近代に開鑿されたのかは明らかではない。

一方、分布的には素掘りの井戸跡など比較的古い様相をもつものは、調査区の北東側に拡がる石組みの護岸跡の内側に立地する傾向がある。これに対して、瓦巻きの井戸跡などは護岸跡の南西域に分布する傾向がある。殊に石蓋をした新しいものは南側の潟内に比較的まとまり、博多川添いの西側ではあまりみられないようである。なお、これらの井戸跡については調査上の諸制約から瓦巻きのものについては上面の構造についてのみ調査し、完掘はしていない。

12号井戸跡(210~213)

12号井戸跡は、B区北東部のC-II区に位置する小型の石積 みの井戸跡である。北西へ6mの距離には97号土壙がある。立地 的には、調査区の東隅から西にむかって弧状にのびる砂丘線上に 築かれた石組護岸跡の東辺部の護岸上に占地しており、護岸施設 が江戸時代の初頭に埋め立てられた後に開鑿されている。井戸跡 は石積みの井戸で、下部構造には桶側を井筒として用いている。 井戸跡の上部構造は、花崗岩礫を円形に組んだもので、内法は 35cmを測る。石組みには10~30cm大の角礫や扁平な割石を用い、 2~5石をやや上開きぎみに面を揃えて丁寧に組み上げている。石 組みの高さは約50cmを測る。次に、石組みの下には井筒に桶を置 いている。桶は石組みの基底面から20cm程のところで検出した。



210. 12号井戸跡実測図(1/30)



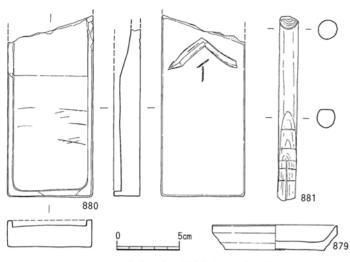
211. 12号井戸跡全景(東より)



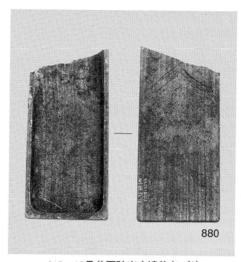
212. 12号井戸跡断面(南より)



213. 12号井戸跡井側桶跡(南より)



214. 12号井戸跡出土遺物実測図(1/3)



215. 12号井戸跡出土遺物(1/3)

完存している2段目の桶側の深さが40cmであることからすると、1段目の桶側は石組みの基底面直下か ら差込まれていたものと推測される。桶は底を上に、口を下にして被せるように重ねているが、1段目 の桶の口径が45cmで、2段目の桶は口径33cm、底径28cm、深さ40cmのもので大きさに差がある。その差 異を埋めるためか継目の隙間には拳大の小石を並べて詰めていた。2段目の桶側の下には、更に3段目 の桶を継ぎ重ねていた。その接合面は密着しており、2段目のものと同規格品を用いたものであろう。



216.71号井戸跡全景(東より)

井筒の掘り方は桶に密着して小さく掘っている。

出土遺物(214·295)

880は、幅6.6cmの砂岩質の硯である。裏面には「ヘ」の下に 「イ|字形の刻書がある。881は不明木製品で、先端部は刃物で 削り出している。1150は土錘で、口径48.2mm、厚さ11.5mm、孔 径5.6mmで重さは10gを測る。

7 1 号井戸跡 (2 1 6)

71号井戸跡は、C区北側のE-Ⅲ区にあり、南側は152号井 戸跡を切っている。掘り方の平面形は直径が220~230cmの円 形を呈し、やや西壁寄りに瓦巻きの井側を掘り込んでいる。井 側は、12枚の平瓦を繋げて円形につくり、内法は75cmを測る。 井側は3段目を確認したところで以下の検出を中断した。遺物 は土師器のほかに18世紀後半~19世紀代の肥前の色絵磁器皿



217. 99号井戸跡全景(北より)



218. 100号井戸跡全景(西より)

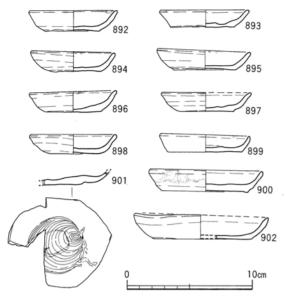


出土遺物(219

· 2 3 8 · 2 9 5)

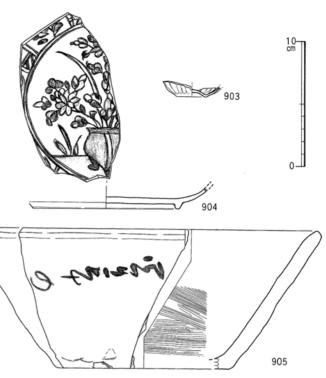
882~889は糸切り

7887 底の土師器小皿で、 口径は7.2~9.2cmで 889 ある。体部は回転ナ デ調整。890は口径 12.8cm、底径9.2cm、 器高2.8cmの土師器



220. 100号井戸跡出土遺物実測図(1/3)

坏である。底部は糸切り。891は口径4.8cm の磁器紅皿。釉薬は灰白色。986は径13.7cm の三つ巴文の軒丸瓦。巴文の尾は長く、12



221. 138号井戸跡出土遺物実測図(1/3)

個の連珠文はやや太い。1551·1552は土錘。1551は長さ44.2mm、厚さ10.3mm、重さは6g。1552は長さ43.5mm、厚さ11.7mm、重さは6g。

9 9 号井戸跡 (2 1 7)

99号井戸跡は、C区南東部のC-II区に位置する素掘りの井戸跡である。北壁側は100号井戸跡と東壁側は97号土壙と重複している。平面形は、120~130cmの円形プランを呈し、深さ120cmを測る。壁面は標高0.35mの井戸底へむかってやや急峻に窄まる。底面の壁面には薄い濃灰色の粘質土層があり、木質の井側の可能性が考えられる。

100号井戸跡(218)

100号井戸跡は、C-II区にある素掘りの井戸跡である。南壁は99号井戸跡と重複し、東には64号石積土壙が隣接している。平面形は、直径が160~180cmの円形を呈し、深さは115cm。壁面は比較的緩やかに窄まり、井戸底の標高は0.38m。底面には拳~人頭大の礫石が散乱していた。遺物は土師皿のほかに17世紀前半の肥前陶磁器碗が出土している。

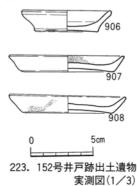
出土遺物(220・222)

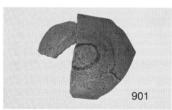
892~901は、糸切り底の土師器小皿。口径が6.8~7.4cmと小さめのもの(892~899)と9.2cmと大きいもの(902)とがある。体部は回転ナデ調整。892~897・899・900には油煙がついており、灯明

皿への転用品か。901の底面には墨痕がある。902は 口径10.8cmの土師器坏。

1 3 8 号井戸跡(付図1)

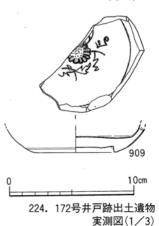
138号井戸跡はC-V区にある井戸跡で、東へ 3mの距離には88号石積土壙がある。平面形は115cm







222. 100·138号井戸跡出土遺物 (1/3)



×145cmの楕円形を呈し、検出面より1m下の標高0.25mの地点で調査を中断したために井側は未確認である。17世紀末~18世紀中葉の磁器皿や鉢が出土しているが、上層からは19世紀代の瀬戸美濃の磁器碗も出土している。

出土遺物(221・222)

903はガラス製容器。904は肥前染付皿で、見込には草花文を描く。釉薬は透明な淡灰色で、全面に貫入がある。高台内にはハリ支え痕がある。1680~1700年代。905は土師質の鉢で、「・・三十の」と読める墨書がある。

152号井戸跡(付図1)

152号井戸跡は、E-IV区にあり、北壁は71号井戸跡に切られている。 平面形は185cm×210cmの円形をなし、その中央に75~90cmの楕円形の井筒跡がある。しかし、25cmほど掘り下げて調査を中断したが、瓦巻きの井側は未検出で、桶あるいは曲げ物を井側とした可能性が考えられる。

出土遺物(223)

906~909は、糸切り底の土師器小皿。907·908は油煙がついており、灯明皿に転用されている。口径は906が7.4cm、907·908が9.4cmである。

172号井戸跡(付図1)

172号井戸跡は、D-II区に位置し、南には104号土壙が隣接している。 平面形は、長軸355cm、短軸195cmの長楕円形をなし、80cmほど掘り下げた標高0.7mの面で $60\sim80$ cmの円形の井筒跡を検出した。井筒跡は10cmほど掘り下げたが瓦片は検出しなかった。井側は桶か曲げ物か。

910





225. 40号溝出土遺物 実測図(1/3)





出土遺物(224)

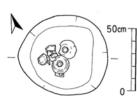
909は、底径6cmの龍泉窯系青磁皿。碁笥底で、見込には菊花文を描く。釉薬は淡黄茶緑色のやや濁った透明な釉。底面は黒く塗っている。

5). 溝遺構

溝は2条を検出した。この内1条(SD-139)は建物跡の基礎石列に伴う可能性の高いもので、一般的な町割に街路の側溝や町家群の排水路的な溝は検出されなかった。

40号溝(付図1)

40号溝は、B区西端のE-WI区にある南北方



H.1.5m

227. 26号ピット 実測図(1/30)

向の細く短い溝である。溝幅は35~45cm、長さは210cm を測る。深さは15cmで断面 形は逆台形をなす。

出土遺物(225)

911は、青銅製の不詳な金 具。扁平で身厚はきわめて 薄い。





228. ピット出土遺物(1/4)

139号溝(付図1)

139号溝は、 $C-IV\cdot V$ 区にある東西方向の浅い直線的な溝で、その西端の延長線上には145号建物跡の基礎石列が続いている。建物跡の基礎石列の掘り方かとも考えられる。長さは $8.3\,\mathrm{m}$ 。

出土遺物(226)

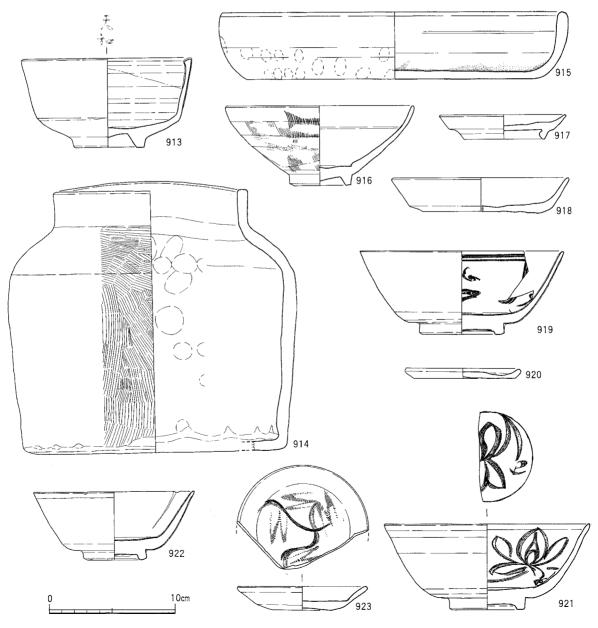
912は、1630~40年代の肥前磁器の染付小皿。見込には扇文を描き、畳付は釉はぎ。口径は9.2cm。

6). ピット (227・228)

調査区内からは多くのピットが検出された。この中には26号ピットのように小土壙的なものや小さな柱穴もある。柱穴は調査区の北部に比較的まとまり、建物跡を構成するものもある。

出土遺物(229)

 $913\cdot 914$ はSP-50出土。913は鉄釉陶器の片口。ロクロ成形で見込には「天和」の銘がある。17世紀前半。914は瓦質の壷で口径は15.3cm。915は瓦質の鉢。916は II 類、923は II-1 類の同安窯系青磁。919は II-4 類、921は II-4 類の龍泉窯系青磁。

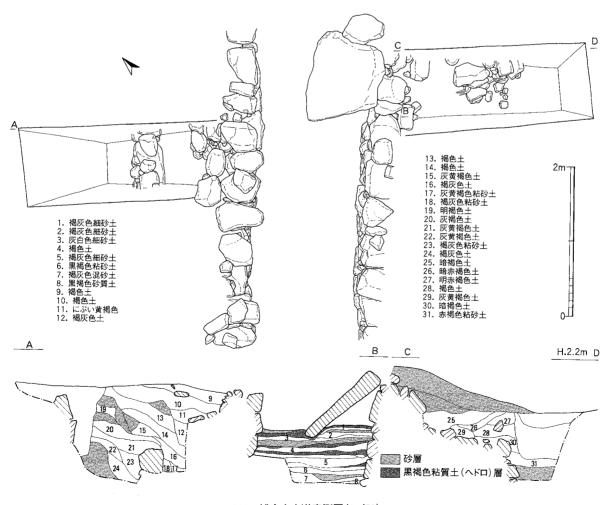


229. ピット出土遺物実測図(1/3)

7). 博多大水道 (230~234)

A区の南方約30mの地点(D区)で、地盤の陥没により石積みの水路が発見された。いわゆる「博多大水道」である。当初は撹乱による削平が著しいために、その存在は予想されながらも調査の対象地域にはなっていなかった。しかし、石積みが良好な状況で発見されたことにより、その規模と構造の確認を目的としてトレンチを設定し、長さ約4mほどを調査した。

石積みの水路は、ほぼ東西方向に直流しレヴェル的には西方の博多川にむかってわずかに傾斜している。石壁は、その基底面に径10cmほどの松杭を横枕に敷き、その上に石材を横に並べて積み上げている。ただし、松杭は前面のものを確認したのみで、裏面に幾本が敷かれているかは明らかでない。石積みは、30~60cm大の花崗岩質の割石を6~8段積み上げている。石壁は、面を内側に揃えて基本的には石材を横に並べて野面積みにして丁寧に積み上げている。溝幅は、基底面で約140cm、上面で150cmあり、深さは130cmを測る。この石壁の外側には、石壁状の基石列が更にもう1列並んでいる。溝幅は3.6 m、つまり2間幅になる。石壁裏込めとの間に間隙があり、かつ掘り方も外側石列の覆土上から切り込んでいる。面的には未確認ではあるが現水路の構築前に1次的な水路的石積みの存在が想起される。なお、東方の第96次調査区では、外側の石積みは検出されていない。また、南壁側の溝底には径が20~25cmの太い丸太材3本が115cmと135cmの間隔で打ち込まれており、その先端は鋭い鉈状のもので切り取られていた。水路の構築にさいして破却された橋脚材かとも推測される。この溝底上にはヘドロ層と砂層が互層的に堆積しており、その中からは18世紀~19世紀の陶磁器片や櫛、寛永通寳などが出土している。この溝底の30cmほど上面には粗製のモルタルで溝底が造られており、石壁との隙



230. 博多大水道実測図(1/50)



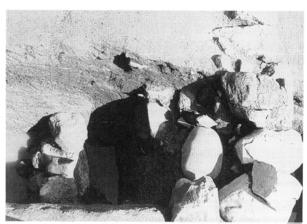
231. 博多大水道全景(西より)



232. 博多大水道断面(東より)



233. 博多大水道南側壁(東より)



234. 博多大水道北側壁裏込め(西より)

間には粘土で目張りがされていた。このモルタル床の上面にも30~40cmの厚さでヘドロ層と砂層が互層をなしていた。この石壁の上縁には、姪浜石と云われる砂岩質の一枚石が蓋石として被せられていた。一枚の大きさは90×140cm、厚さは15~25cmである。この石蓋の架構が、『石城遺聞』(1889年)に云う明治13(1880)年の「寿小路」となる道路化工事の跡と考えられる。

また、博多大水道の築造時期は定かではないが、『筑陽記』(宝永二年=1705)には「今ハ川端町と云所に繊き溝川」

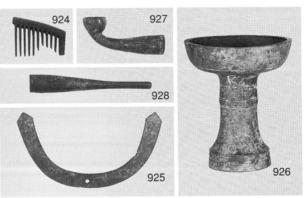
とある。正保三年(1646)や明暦二年(1656)の絵図にも深く切れ込んだ水路が描かれており、その成立が窺い知れる。なお、詳細は第96次調査の報告で改めて検討したい。

出土遺物(235・236)

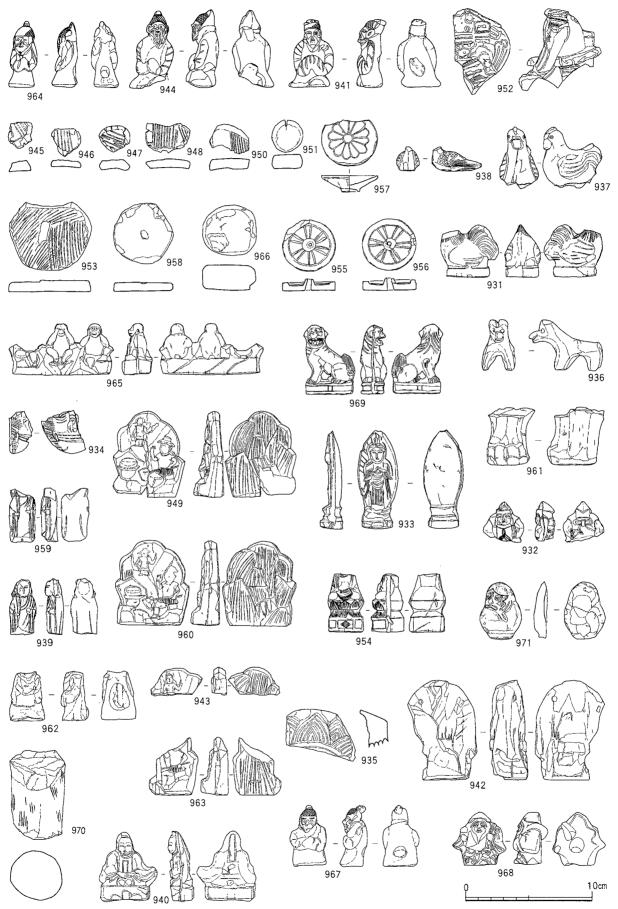
924は柘植の櫛。925は幅7.9cm、厚さ0.5mmの銅製の飾金具。926は銅製の仏飯器で、器高は7cm。927・928は銅製煙管の吸い口と雁首。929・930は寛永通寳である。



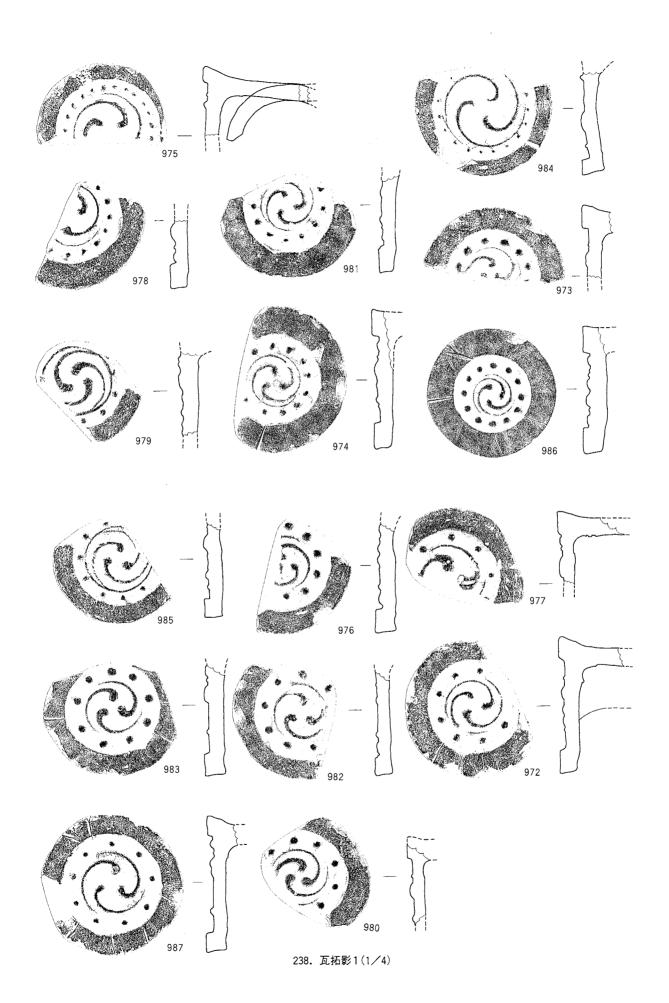
235. 博多大水道出土遺物実測図(1/3)

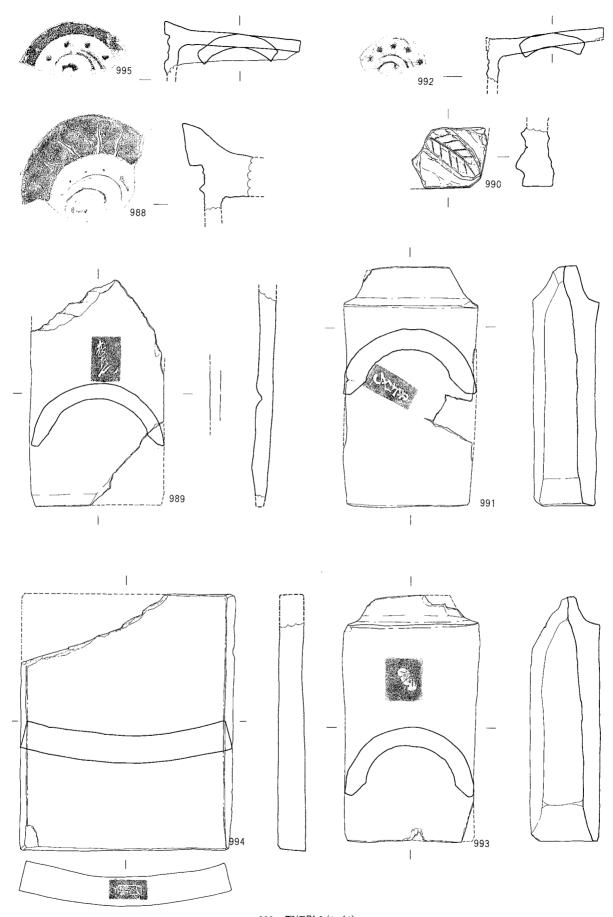


236. 博多大水道出土遺物(1/2)

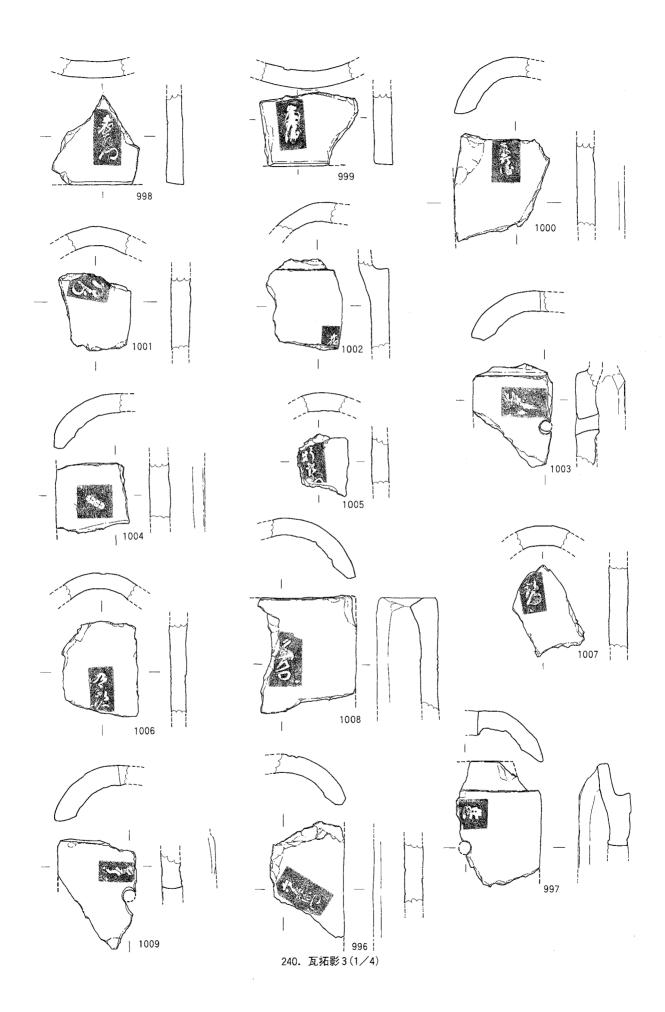


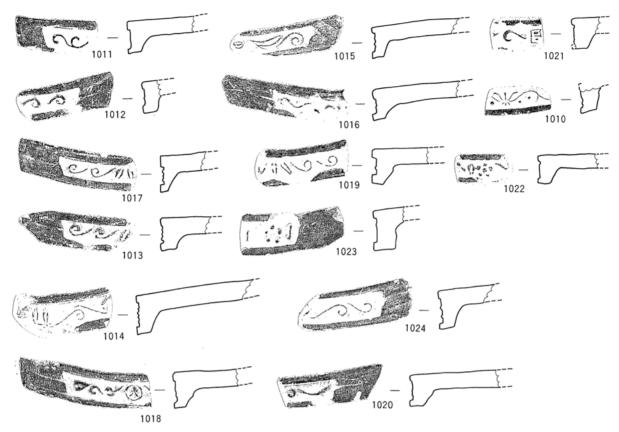
237. 土製品実測図(1/3)



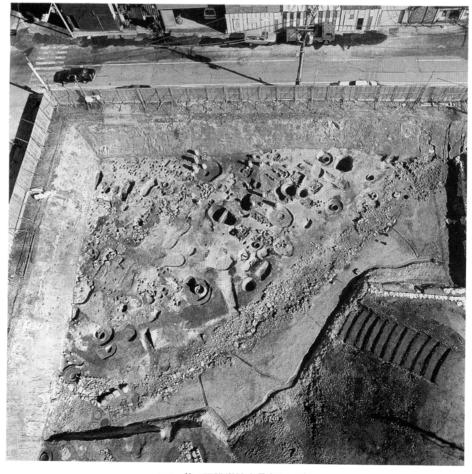


239. 瓦拓影 2(1/4)





241. 瓦拓影 4 (1/4)



242. 第2面護岸跡全景(西より)

5. 第2期の遺構(付図2)

第2期とした時期は、調査区の南東端から北西へ弧状にのびる石積みの護岸跡が「息の濱」の南西縁として機能していた16世紀代以前の時期のものである。年表的に云えば、概ね室町時代後期から安土桃山時代のものであり、細かくは更に幾期かに区分されよう。

検出された遺構は、石積土壙や土壙、柱穴などがあるが、数量的には少ない。また、分布的に観ても護岸跡の北東域の比較的狭い範囲に限られ、かつ散漫的な在り方を示している。これは「息の濱」の南西縁と云う調査地の占地的な制約に因るものである。しかしながら、その在り様は町の中心域に対する縁辺域



243. 151号石敷遺構全景(東より)



244. 151号石敷遺構実測図(1/60)



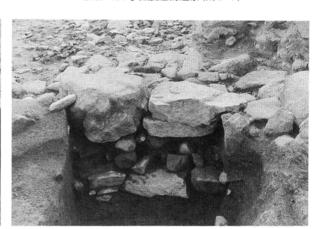
245. 151号石敷遺構近景(西より)



246. 151号石敷遺構近景(南より)



247. 151号石敷遺構横断面(南より)



248. 151号石敷遺構裏込め(東より)

の土地活用、あるいは都市計画の一側面を垣間見る一助となろう。なお、護岸跡の北東域に立地する 第1期の遺構とした建物跡や土壙の中には、時代的の遡る可能性のあるものもあり、幾許かは遺構が密 になる要素もある。

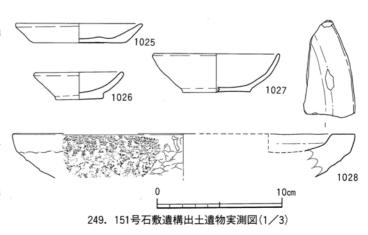
1). 石敷遺構

石敷遺構は、建物の基礎石列や石積みの護岸跡とは明らかに異なるもので、床面上に扁平な割石や 礫石を敷き詰めたものである。調査では1ケ所が確認された。

151号石敷遺構(243~248)

151号石敷遺構は、C区北辺のE·F-VI区の調査区南東端から北西方向へ弧状にのびる石積み護

岸跡の北西端に位置する。石敷きは、石積み護岸跡の基底石の前面に30~60cmの大きな割石を横にして据え、その上面に同大の石材を護岸跡(砂丘)側に持ち送る様にして積み上げ、石壁面を築いている。この石壁は長さ5mほどが直線的に南へのび、そこから護岸跡の曲面に沿って約120°東へ矩形に屈曲している。この屈曲してのびる石列は護岸跡の基



石上にはなく、暗灰褐色の粘砂土上に据え置かれている。石敷きは、石壁の前面に30~50cm大のやや扁平な割石を石壁に平行して密に敷き並べ、隙間は小礫で埋めている。この大きめの割り石敷きは、石壁の前面140cmほどまでで、それから西は小礫をびっしりと敷き詰め、その南側前面は直線的に面を揃えている。この石敷きは、上縁に面を揃える様にして敷き、レヴェル的には博多川にむかう南西方向に傾斜している。石敷端は標高0.5mである。この石敷遺構は、そのほとんどが道路下にあり全容は明らかでない。これ故に機能的には即断しがたいが、護岸跡の外縁に石壁を築くこと。浜底に石を敷いて面的な安定を保つ必然性を勘案すれば、舟着き場的な機能が考え易い。また、石敷き上からは17世紀に下る遺物は出土していない。

出土遺物(249・239・241)

1025~1027は糸切り底の土師器。1025は小皿で、口径は10.2cm、器高は1.5cm。1026は土師器小坏で口径7.4cm、器高は2.2cm。1027は坏で口径10.2cm、器高は3.1cm。体部は回転ナデ、内底面はナデ調整。1028は凝灰岩質の茶臼で、口径は36.2cm。

988は三つ巴文の軒丸瓦。巴文は細く尾が長い。珠文は小さい。1010は軒平瓦である。

2). 護 岸 跡

A区の南東隅からC区北西辺の中央部にかけては、室町時代末頃の砂丘面が弧状に連なっている。この砂丘面は、「博多濱」とともに貿易都市「博多」を構成する「息の濱」の南西縁にあたり、その南には博多川から入海状の潟が弯入していた。この息の濱南西縁の砂丘面には、砂丘面に沿って強固な石積みの護岸施設が築かれていた。護岸跡の石積みは、砂丘の緩斜面が浜底へと移行するその変換線上に縦が20~40cm、横が30~60cmの大きめの割石や転石を横にして据えて基石とし、浜に沿って弧状に列



250. 護岸跡全景(西より)



251. 護岸跡全景(東より)



252. 護岸跡北部石積(西より)



253. 護岸跡中央部石積(西より)

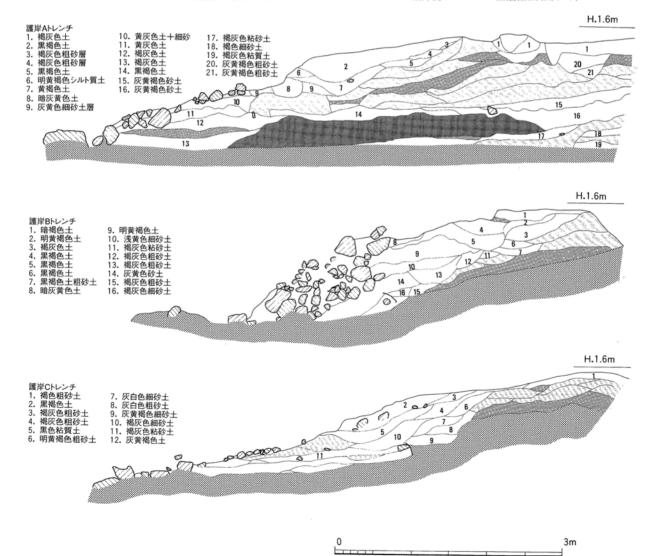
っている。次に、この基石列の上面には20~30cm大の転石や円礫を砂丘の傾斜面に沿って隙間なく敷き並べ、その礫石群の上層には幾許かの砂層を間層にして同大かやや小振りの礫石を敷き重ねて強固に補強している。更に、基石列の前面に同様の石材を数枚敷き並べているところもある。また、Bトレンチでは基石の内側に板材を立てて土砂留めをしている。何れにしろ波に洗われる基底面ほど堅固な造りをしている。この護岸跡の北西端には舟着き場的な機能が考えられる石敷きの遺構が付設して







255. 護岸跡 Bトレンチ土層断面(南より)



256. 護岸跡 A~Cトレンチ土層断面図(1/50)

いる。護岸跡の南東部 には土師皿や陶器片が 大量に投棄されていた が、北西側ではやや稀 薄な状況にある。これ は弯入部にあたる南東 部が意図的に埋められ たことを意味しよう。 また、鉄滓や鞴の羽口 片がまとまって出土し、 近接する鍛冶工房の存 在が示唆される。この 南東部の海底面にはへ ドロ層が互層的に堆積 し、このヘドロ層中か らはサメやイルカの頭 骨が出土している。こ れは周辺域が潟状をな し、ある時期に短時日 で埋立てられたと推察 される。上層には17世 紀代の遺物も含むが状 況的には、16世紀末~ 17初頭頃まで機能して いたもであろう。



257. 護岸跡 B トレンチ石積裏込め板検出状況 (東より)



258. 護岸跡 Dトレンチ土層断面(西より)



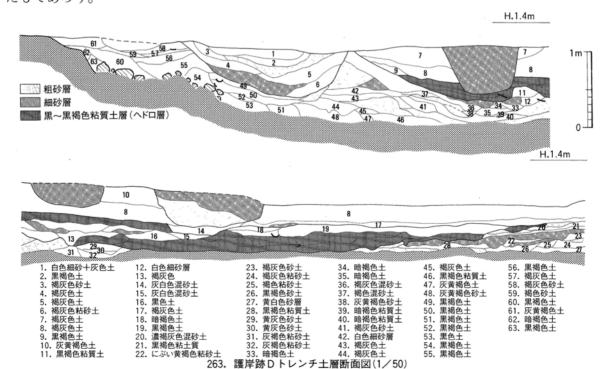
259. 護岸跡東部遺物出土状況(南より)

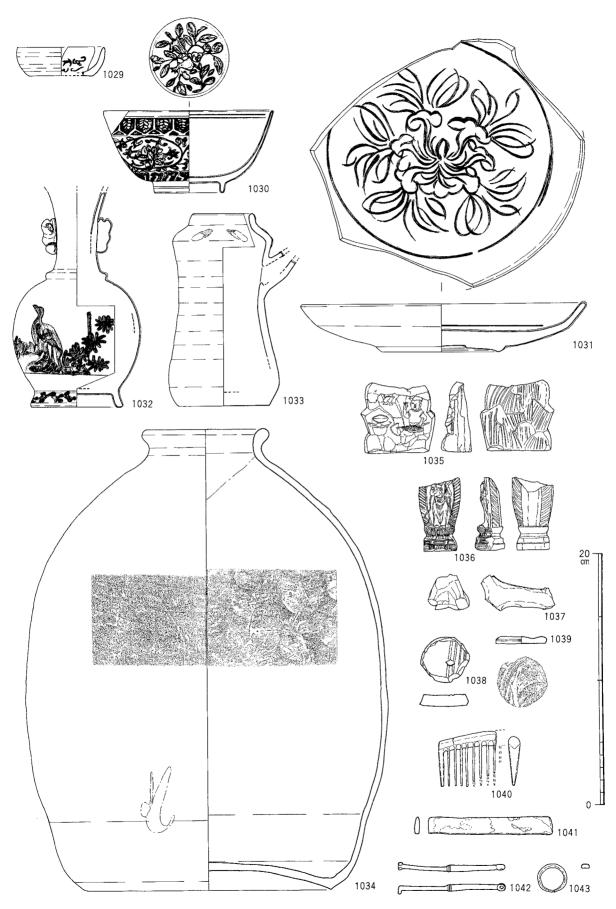


260. 護岸跡埋立地漆器椀出土状況(西より)



261. 護岸跡埋立地サメ下顎骨出土状況(南より) 262. 護岸跡埋立地イルカ頭骨出土状況(南より)

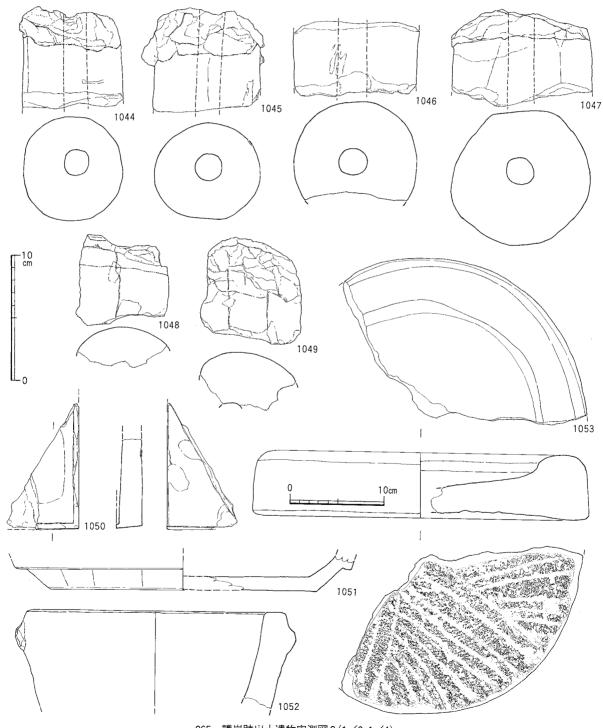




264. 護岸跡出土遺物実測図1(1/3)

出土遺物(264·265)

1029は糸切り底の土師器小坏で、体部には墨書痕がある。1030は1680~1700年代の肥前染付磁器碗である。見込には草花文、胴には花唐草文を描く。1331は肥前青磁の大皿で、見込には圏線と陰刻の草花文を描く。半透明な淡灰緑色釉をかけ、高台内は釉薬を拭き取っている。1032肥前染付の磁器壷で、頸部には一対の竜耳がつく。胴部には花鳥文を描き、高台内には目砂が付いている。1640~60年代。1033は鉄釉の油差し。1034は李朝陶器壷。胎土は精緻で、焦げ茶色の釉薬がかかる。器高は36.4cm。1035~1039は土製人形と円盤。1040は漆塗りの櫛。1042は錠前の鍵。1043は銀製指輪。1044~1049は鞴の羽口。1050は硯。1051·1052は滑石製石鍋。1053は擦臼。



265. 護岸跡出土遺物実測図2(1/3·1/4)

3). 石積土壙 (SQ)

第2期の石積土壙は、2基を検出した。規模的には小さく方形プランをなす。構造的には、小礫で石室

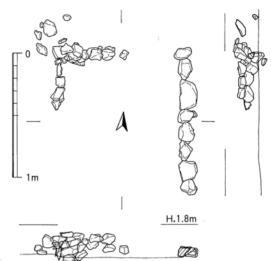
状に築いたもので、中世以降の博多では通有にみられる ものである。立地的には、第2期の遺構群の南西限をな す護岸跡の縁辺にあり、隣接して位置している。また、 機能的には便所や溜め枡など色々なの用途が想起され るが、何を目的として築かれたかは明らかでない。

63号石積土壙(266・268)

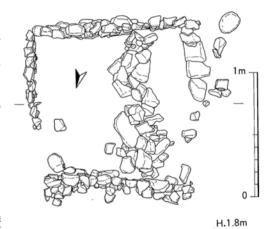
63号石積土壙は、C区東端のC-I区にある小型の石積土壙で、すぐ西には64号石積土壙が位置している。石積みは、東側壁と北小口壁と西側壁の隅角部を残して大半が消失しており、遺存状況は良くない。平面形は、側壁の長さが110cm、小口壁の幅が90cmの方形プランをなす。石積みは、15~20cm大の扁平な転石を基石とし、上面のレヴェルを合わせて水平に据えている。北小口壁と西側壁では、基石上に拳大の礫石を面を内側に揃えて1~3段積み上げて壁面を造っている。床面は、淡黄褐色の砂上に達し、水性の堆積層などはみられなかった。調査区西側の埋立地上に拡がる一群とは石材や壁面の構築法が明らかに異なるが、それが時間的要因に因るものかは即断しがたい。遺物は、土師皿片と磁器小片がわずかに出土しているのみで、細かな時期は決しがたい。

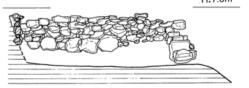
6 4 号石積土壙 (2 6 7 ・ 2 6 8 ・ 2 6 9 ・ 2 9 4)

64号石積土壙は、C-I区に位置する小型の石積土壙で、東には63号石積土壙が、西には100号井戸跡が隣接してある。平面形は、北壁長が120cm、南壁長が115cm、東壁長が110cm、西壁長が120cmの北西壁側が広い四辺形状の方形プランを呈する。主軸方位はN-12°-Wにとる。壁面は、10~20cm大の転石を基石とし、上面のレヴェルを水平



266. 63号石積土壙実測図(1/30)





267. 64号石積土壙実測図(1/30)



268. 63・64号石積土壙全景(西より)



269. 64号石積土壙北壁(南より)

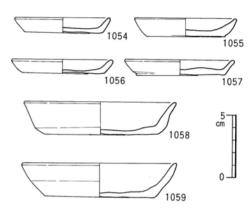
に合わせて据えている。この基石上に拳大の礫石を5~7段積み上げて壁面を造っている。壁面は、礫石の面を内側に揃えて隙間なく布目積み状に丁寧に積み上げている。ただし、南壁の西側と東壁は大きめの転石を基石とせず、基底面から礫石を積み上げて壁面を造っているが、この小礫石の基底面は南壁の基石上面のレヴェルにほぼ等しい。壁面の裏込めは北壁にしかなく、壁体は薄い造りである。また、西壁側には大きめの転石で床面を区切っているが、その石積みは乱雑である。床面は砂層に達しいるが、水性の堆積層などはみられなかった。遺物は土師皿や瓦質の鉢と陶磁器の小片がわずかに出土しているほかに、1023年初鋳の「天聖元寳」(1474)も出土している。

4). 土 壙(SK)

第2期の土壙は、すべてで10基を検出した。しかし、護岸跡 北東域の砂丘上に立地する第1期とした土壙のなかには遡る 可能性をもつものもあり、若干増加することもありうる。平 面的には、円形~楕円形プランのものと方形~長方形プラン のものがあり、その深さにも深浅の差がある。また、機能的 には一二のものを除くと基本的には土師皿などの「廃棄穴」である。



270. 101号土壙全景(北より)



271. 101号土壙出土遺物実測図(1/3)

101号土壙(270)

101号土壙は、C区北端のE-I区にある小型の土壙で、東に67号井戸跡が、南には102号土壙が 隣接して位置している。平面形は、長軸85cm、短軸75cmの円形プランを呈する。壁高は、23cmを測り、

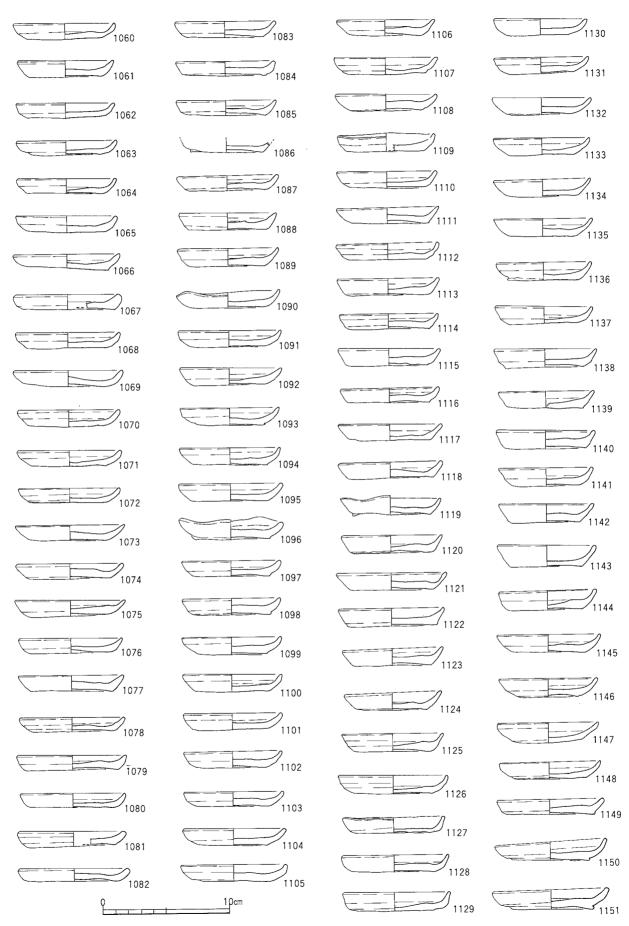
1m

272. 104号土壙実測図(1/30)

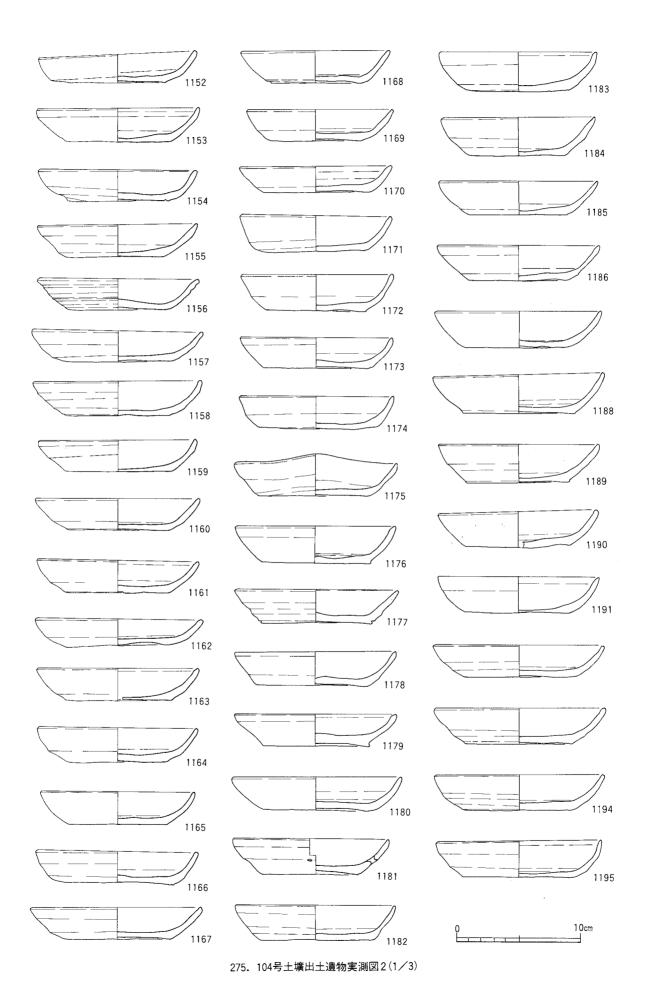
底面は浅井凹レンズ状をなす。土壙上面には土師器に 混じって人頭大の扁平な円礫があり、掘立柱建物跡の



273. 104~107号土壙全景(北より)



274. 104号土壙出土遺物実測図1(1/3)



礎石の可能性もある。覆土中からは、土師皿や坏と瓦質の鉢がわずかに出土している。

出土遺物(271)

1054~1057は糸切り底の土師器小皿である。口径は7.6~8.8cm、器高は1.1~1.5cmを測る。体部は

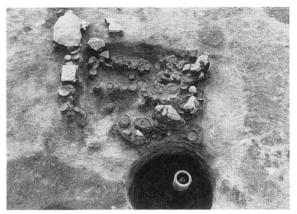
回転横ナデ、内底面はナデ調整。1058·1059は土師坏で、口径は12.2~12.4cm。1058は口縁部が小さく外反する。体部は回転ナデ。淡黄橙色。

104号土壙(272・276)

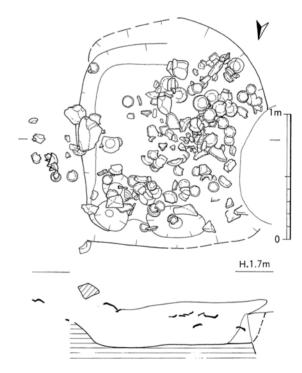
104号土壙は、C区東部のD-Ⅱ区にあり、北 西隅は174号井戸跡に切られている。土壙の南には 105・106号土壙が隣接して位置し、更にその南には 石積みの護岸跡が弧状にのびている。平面形は、西 壁が曖昧に消失しているが、東西長180cm、南北長 155cmの長方形プランに復原できよう。主軸方位は $N-71^{\circ}-E$ にとる。壁面は緩やかに立ち上がり、 壁高は20cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形 をなす。土壙内には土師器の小皿や坏が多量に廃棄 されていた。これらの土師器は、西壁際に厚く堆積 し、東壁際は稀薄な状況を呈している。このことか らすると土師器は、西壁側から投棄されたものと推 測される。また、東壁際には扁平な割石材が壁に沿 って並び、石材の基底面下には土師器が敷かれてい る。この石には赤変があり、土壙上層には炭片の混 入があることから土壙の埋没後は炉跡的に使われた ものと考えられる。

出土遺物(274・275)

 $1060 \sim 1151$ は糸切り底の土師器小皿である。口径は $7.8 \sim 9.2$ cm、器高は $1.1 \sim 1.6$ cmを測る。体部がストレートにのびるものと内弯ぎみに立ち上がるものとがある。調整は体部が回転ナデ、内底面はナデて



276. 104号土壙全景(北より)



277. 105号土壙実測図(1/30)



278. 105号土壙全景(東より)



279. 105号土壙銅銭出土状況(西より)

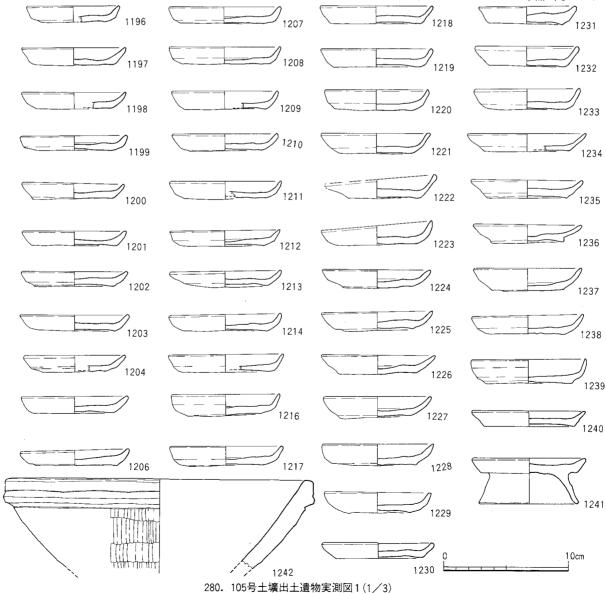
仕上げ、底面には板目圧痕の付いたものもある。 $1152\sim1195$ は土師器坏である。口径は $11.8\sim13.8$ cm、器高は $2.1\sim3.2$ cm。体部は内弯ぎみに立ち上がり、底部は平底とやや上げ底ぎみのものがある。1181の体部には小さな円孔が穿たれている。体部はナデ~回転ナデ調整で、底部は糸切り。いずれも胎土は良質で、焼成は良好。色調は淡黄~黄橙色。

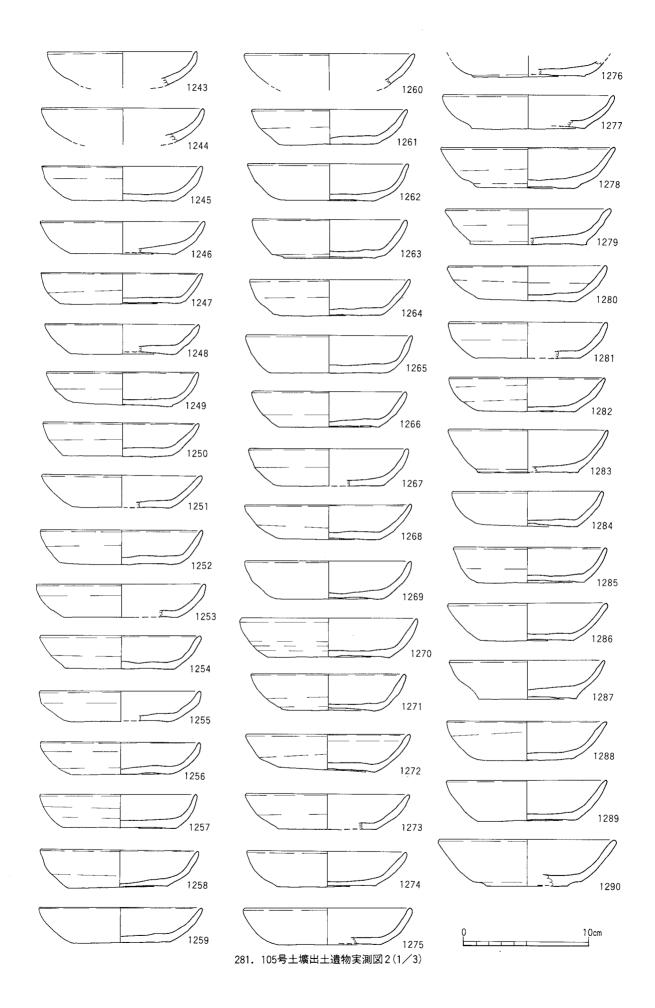
105号土壙(277~279)

105号土壙は、C-II区にある土壙で、北壁は106号土壙を切り、西壁は75号井戸跡にきられている。平面形は、南北長が180cm、東西長が150cmを測る隅丸の長方形プランをなし、 $N-77^{\circ}-E$ に主軸方位をとる。壁高45cmの壁面はやや急峻に立ち上がり、断面形は逆台形をなす。北壁下には $25\sim45$ cmの楕円形の小穴が掘られている。底面は平坦であるが、東壁際が浅い凹レンズ状をなす。土壙内からは土師器皿や擂鉢のほかに獣骨片と判読不能な銅銭2枚が出土している。また、土師皿等は北壁側と西壁側に偏ってまとまっており、この方面から投棄したものと推察される。

出土遺物(280·281)

 $1196\sim1240$ は糸切り底の土師器小皿で、口径が7.4cmと小さいもの(1196)と8.2 \sim 9.4cmの大きめのもの(1197 \sim 1240)がある。体部は回転ナデ調整で、内弯ぎみに立ち上がるものとストレートにのびるものがある。1241は台付の皿で、口径は9.2cm、高台の高さは2.5cmを測る。1243 \sim 1290は土師器坏。1243 \sim





1244·1260は丸底、1245~1259·1260~1290は平底。体部は回転ナデ調整。底部は糸切り後に板目圧痕の付くものもある。1242はⅢc類の滑石製石鍋。鍔の上下には凹線状の切り込みがある。

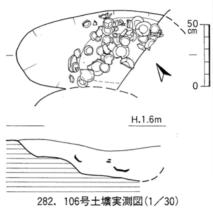
106号土壙(282・283)

106号土壙は、C-II区にある小型の土壙で、東小口壁は105号土壙に切られて消失している。平面形は、長軸が140cm、短軸は70cmに復原される楕円形プランを呈し、主軸方位をN-59° -Wにとる。西小口壁側は中段に半月状の小さなフラット面を造る2段掘りの構造をなし、底面は東小口壁側

が低くなる。壁高は 37cm。土壙の下層面 からは土師皿と銅銭1 枚がまとまって出土 した。

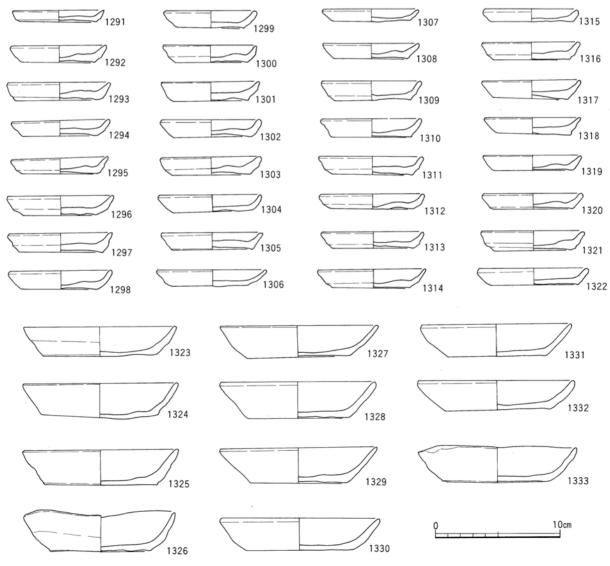
出土遺物(284)

1291~1322は糸切り底の土師器小皿。 口径が7.4~7.8cmの

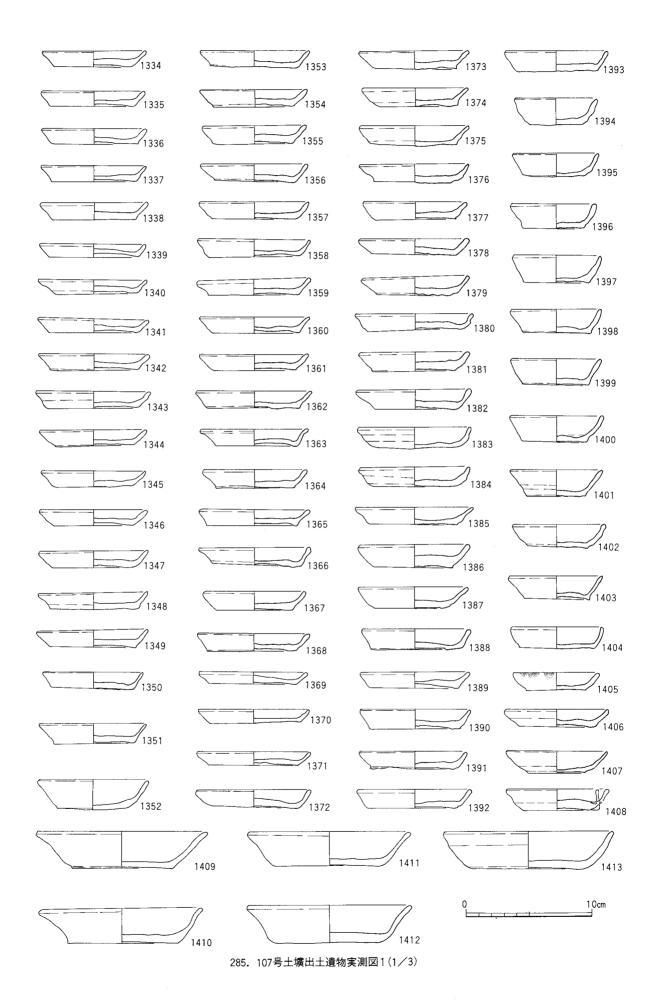




283. 106号土壙全景(南より)



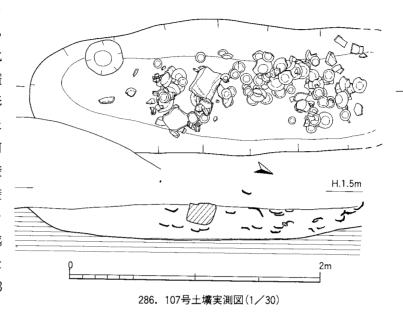
284. 106号土壙出土遺物実測図(1/3)

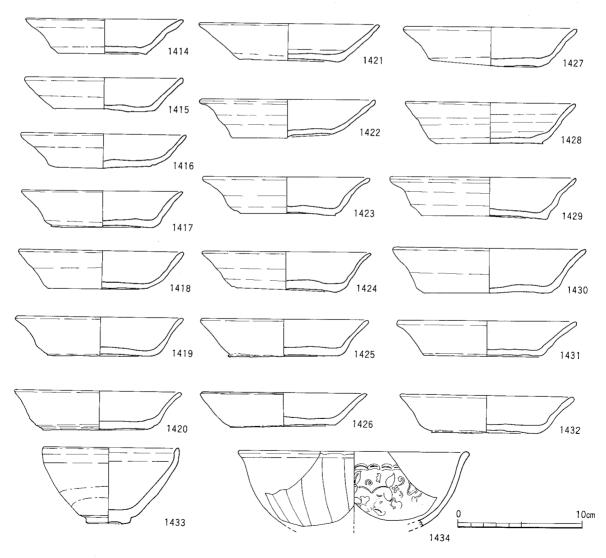


ものと8~9.2cmのものがある。体部は内弯するものと短く直口するものがあり、回転ナデ調整。1323~1333は土師器坏で、口径は12.2~13cm。体部は回転ナデ調整で、底部は糸切り。

107号土壙(286・288)

107号土壙は、C-II区にあり、東壁南側は155号井戸跡に、北小口壁は164号井戸跡と165号土壙に切られて消失している。平面形は、短軸が110cmで長軸は320cmほどの長楕円形プランになろう。N-19°-Wに主軸方位をとる。壁面はやや緩やかに立ち上がり、壁高は30cm。断面形は浅い舟底状をなす。土壙内からは200個体を越える土師皿がまとまって出土したほかに土錘や判読不明の銅銭が3枚出土している。





287. 107号土壙出土遺物実測図 2(1/3)

出土遺物(285・287・295)

1334~1408は糸切り底の土師器小皿で、口径が8.2~9.4cmのもの(1334~1393)と7.2~7.6cmの小さいもの(1394~1403)とがあり、器高は後者が1.8~2.3cmと高く小坏状をなす。1405は灯明皿に転用されている。1409~1432は土師器坏。口径は12.8~15.6cm。体部は回転ナテ調整。1433は口径10.7cm、器高6.1cmの天目碗。腰から高台は無釉。1434は型押し文の龍泉窯系青磁碗で口径は16.2cm。胎土は白灰色で、釉薬は透明な淡青緑色。1548は土錘で長さ55.9mm、厚さ10.3mm、重さは6g。

169号土壙(289)

169号土壙は、D-I区にある小型の土 壙で、南へ2mの距離には65号石積土壙と214 号土壙が並んである。平面形は150cm×165cm の方形プランを呈し、北東壁隅は168号土壙の 西小口壁を切っている。壁面はやや急峻に立 ち上がり、東壁は小さく弯曲している。壁高 は35cm。底面は浅い凹レンズ状をなし、直径 が5cmほどの海獣の脊椎骨がT字状に置かれ ていた。遺物は土師皿や瓦質鉢片がわずかに 出土している。

2 1 1 号土壙(付図 2)

211号土壙は、E-Ⅱ区にある 不整形の土壙で、上面には183号建物跡がある。平面形は長さ500cm、幅300cmほどに復原されるが、北壁~東壁側は明瞭でない。深さは25~30cmで、底面には拳大~人頭大の転石が敷石状に拡がっている。

出土遺物(290)

1435~1440は糸切り底の土師器 小皿で、口径は7.6~8.4cm。1441~ 1450は土師器坏。口径は12~13. 2cm。体部は回転ナデ調整。

2 1 2 号土壙 (付図 2)

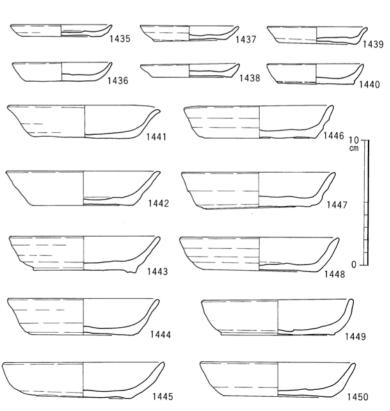
212号土壙は、E-Ⅱ区の183 号建物跡の下層に拡がる集石群 (213号土壙)の中にある小型の土壙



288. 107号土壙全景(東より)



289. 169号土壙全景(西より)



290. 211号土壙出土遺物実測図(1/3)

である。平面形は長軸が102cm、短軸が53cmの楕円形プランを呈し、主軸方位を $N-10^{\circ}-E$ にとる。断面形は浅い舟底状をなしている。

出土遺物(293)

1451~1455は糸切り底の土師器坏で、口 径は13.8~15.8cm。体部は回転ナデ。

2 1 3 号土壙 (付図 2)

213号土壙は、E-II区にあり上面には183号建物跡が位置している。平面形は明瞭でないが、床面には長さ8.5 m、幅2.5~4 mの範囲に扁平な転石が石敷状に拡がっており、建物跡の敷石とも考えられる。遺物は石敷に密着して土師皿や陶器甕等が出土している。

出土遺物(293)

1456・1457は糸切り底の土師皿。1458~1460は坏で、口径は11.6~12.8cm。1461は

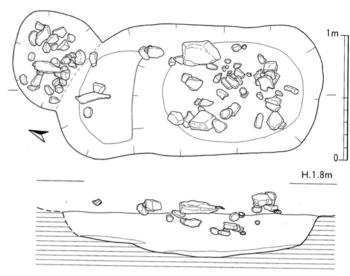
口径3cm、器高3.2cmの瀬戸の小壷。1462は輝緑凝灰岩質 の四葉形の硯で、長さ8.1cm、幅6.4cm、厚さは0.9cm。

214号土壙(291・292)

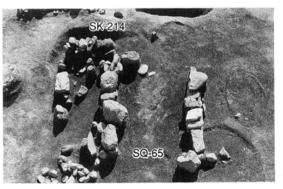
2 1 4 号土壙は、D-I区にあり、西壁は65号石積土 壙に切られている。平面形は、長さ217cm、幅105cmの隅 丸長方形を呈し、N-24°-Wに主軸方位をとる。北小 口壁下には平坦面を造る2段掘りの構造をなす。壁面は やや急峻で、壁高は36cm。底面は凹レンズ状をなす。

出土遺物(293)

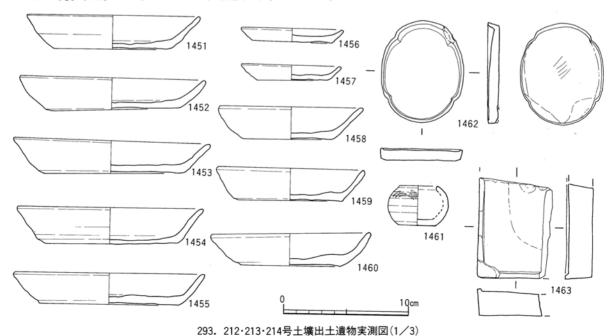
1463は硯。陸部はわずかに凹み、墨痕が残っている。

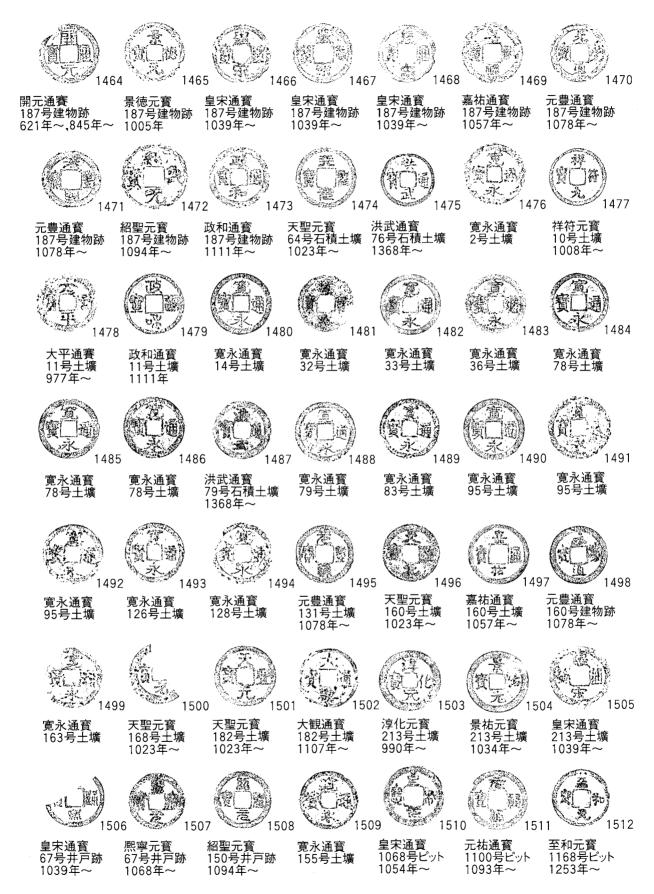


291. 214号土壙実測図(1/30)

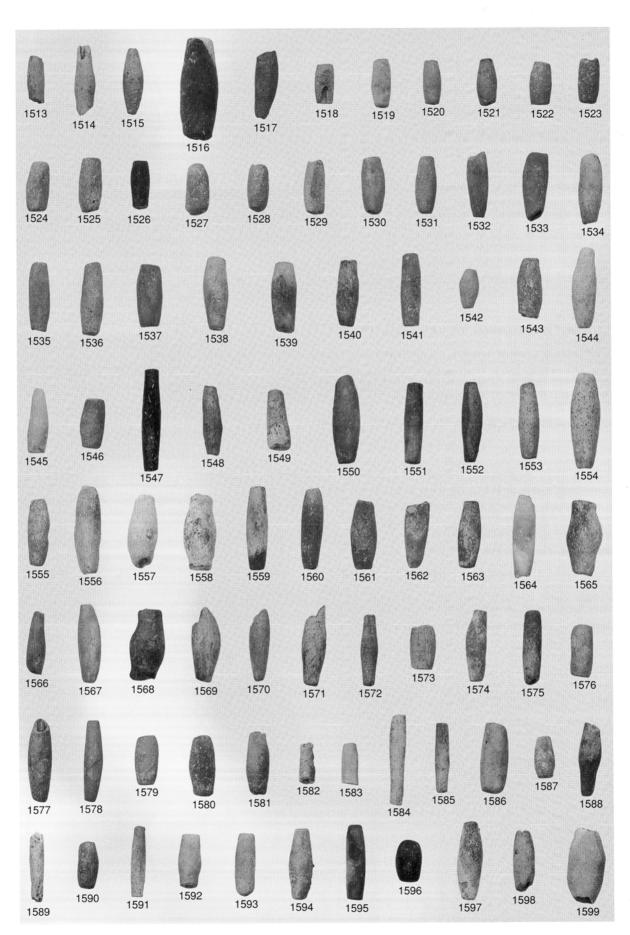


292. 65号石積土壙・214号土壙全景(北より)

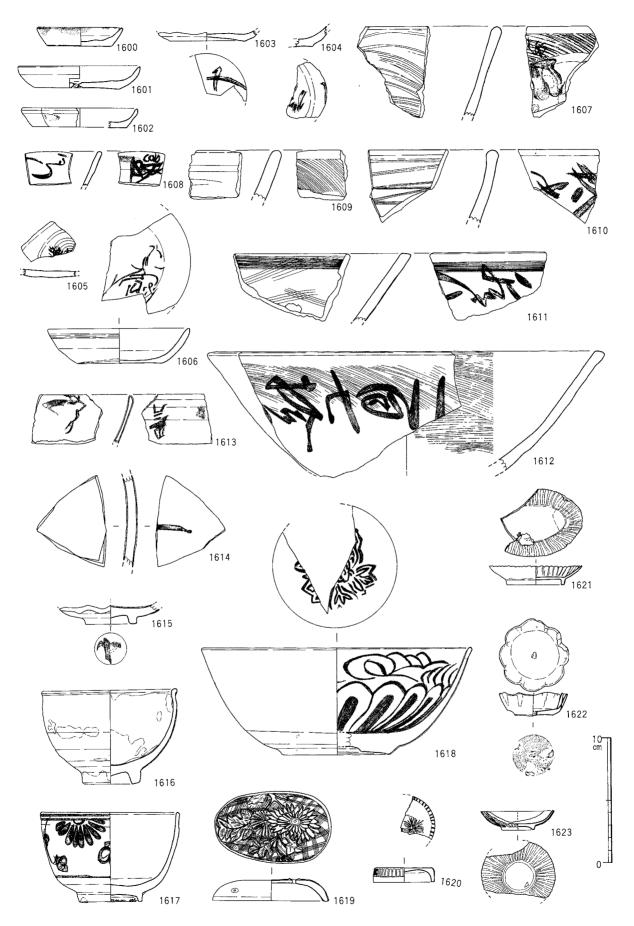




294. 銅銭拓影(2/3)



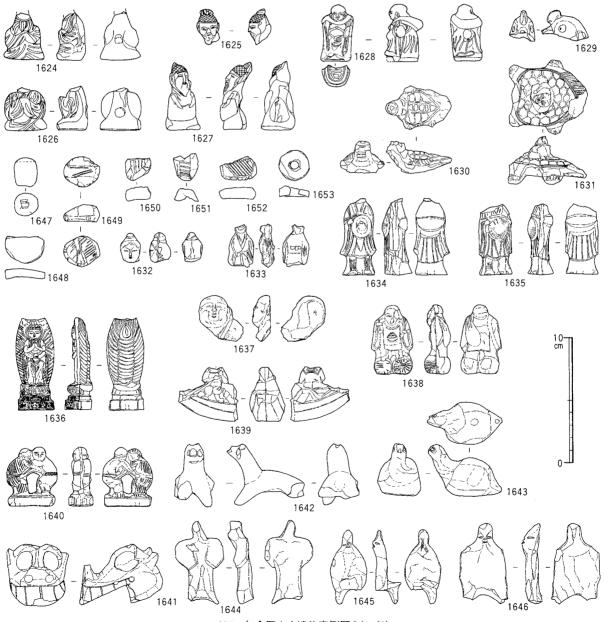
295. 土 錘(1/2)



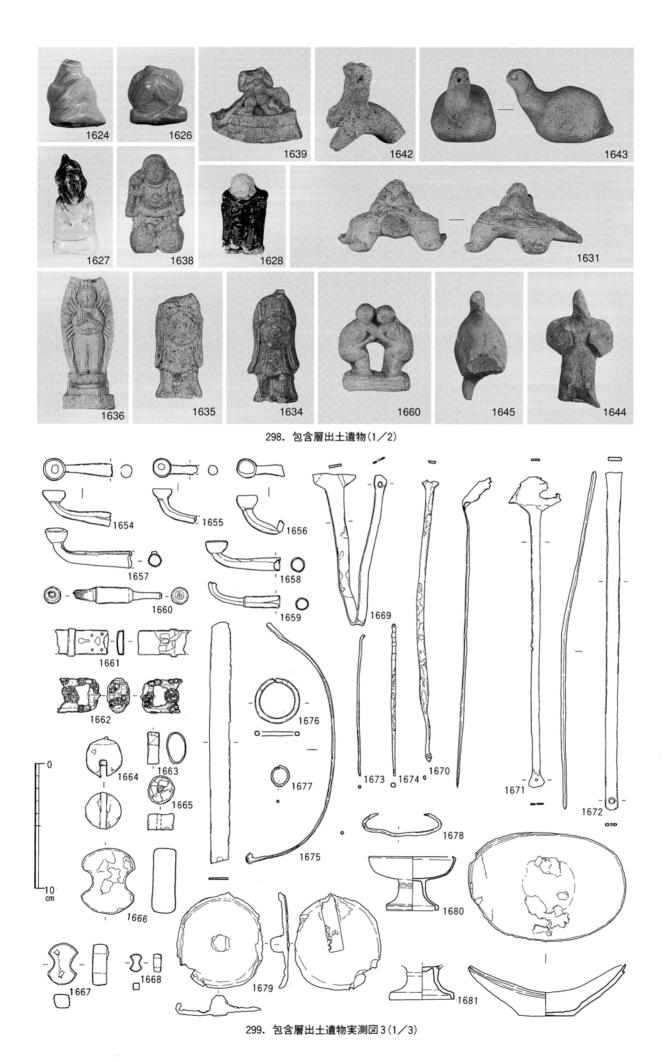
296. 包含層出土遺物実測図1(1/3)

6. 包含層出土の遺物

1600~1605は土師器小皿。1600は灯明皿に転用されたもの。1601は底部に円孔を穿つ。1602~1605は体部や底部に墨書がある。1606は口径11.4cmの土師器坏で、内底面に絵文様の墨書がある。1607~1612は墨書のある土師質の鉢。1612は口径31.8cmで、体部には「二百七拾」あるいは「三百七拾」と読める墨書がある。1613・1614は墨書のある陶器碗。1615は磁器碗。1616は口径10.5cmの陶器碗で不透明な淡灰緑色の釉薬を施釉しているが、ピンホールが多い。1617は1610~30年代の染付碗。呉須で菊唐草文の濃淡を描きわけ、半透明の淡青灰白色の釉を施釉している。1618は波佐見窯の鉄青磁鉢。透明な淡青緑色の釉をかけ、印花文を施文する。1619は型押成形の水滴で、色絵の菊文を描く。1620は合子の蓋。1621は型押成形の笹皿。1624~1627は胡人風の灯芯立て。顔面は鉄釉で、底部から背には円孔がある。1628は肥前窯系窯の根付けで、底面には印刻がある。1629は三彩の磁器人形。1630~1640は素焼きの人形。1642~1646は手捏ね人形。1654~1659は銅製の煙管の雁首と吸い口。1662は刀の把頭か。1664は銅鈴。1666~1668は分銅。1667は重さ26.84gで8匁、1668は重さ3.28gで1匁分銅であろう。1663・1671・1672は銅製杓子の柄。1679は飾金具。1682は9~12.2cmの小判形の銅製碗。



297. 包含層出土遺物実測図 2(1/3)



Ⅲ. お わ り に

博多遺跡群第89次調査では、中世末から近世の遺構や遺物が検出された。ここではその確認された成果の中から二三について問題点を簡単に整理し、今後の課題としたい。

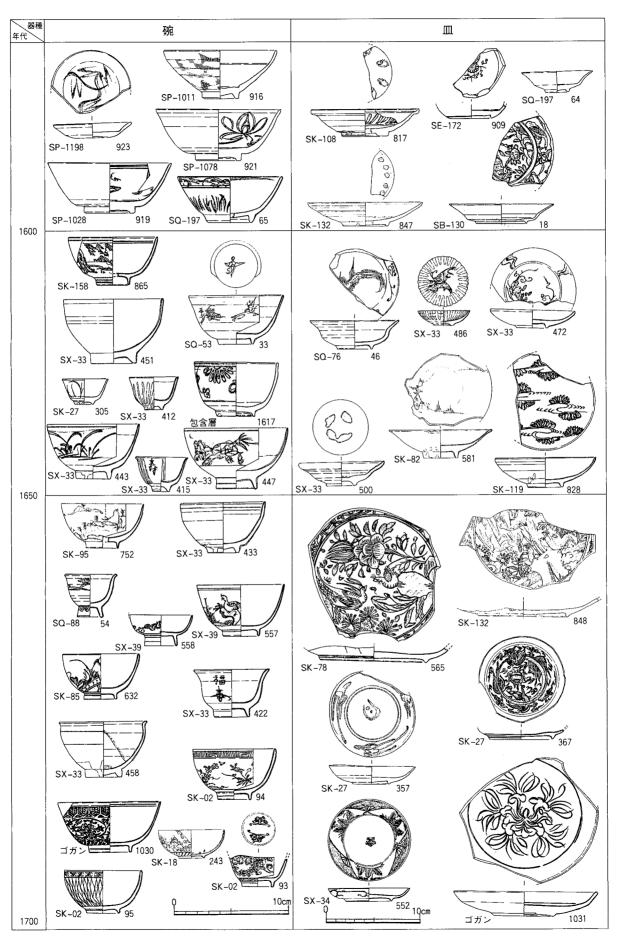
はじめに、今回の調査では石積みの護岸跡を検出した。この石積護岸跡は、「息の濱」の南西縁にあたり中世末の汀線と町割の復原が可能となろう。構造的には、汀線に沿って大きな割石を基石として列ねて並べ、その上縁に転石や礫石を砂丘面に貼り付ける様にして積み重ねている。更にその上面には小振りの円礫や角礫を覆い被せる様にして強固なものとし、打ち寄せる波頭の浸食から「息の濱」の汀と内接する街並を守っている。この護岸跡の北西端には、護岸基石列の上に壁体を築き、その前面の海底面には平石を石畳状に敷き並べている。安定した海底面の確保を要する必然的な要因としては舟着き場としての機能が想起される。このことは北流する那珂川が「息の濱」の西で大きく開口していたことが海岸線の古環境復原でも明らかにされていることから容易に理解できよう。ただし、海底の石敷き面の深度は浅く、構造船の接岸は不可能である。沖に停泊した本船とを結ぶ艀船の接岸施設として理解するのが順当であろう。換言すれば、「息の濱」西部の汀が博多の物資の集散地、つまりは物流拠点としての機能を果たしていたものと考えられる。

次に、「息の濱」の町割は天正12年の太閤町割を基本としている。この太閤町割は、地形に制約された中世博多の街区を、市小路町を中軸に長方形街区と短冊型地割りとで整然と区切るものであった。しかし、この町割の西限は洲崎町から土居町流までであり、「息の濱」西南縁の89次調査区周辺には及んでいない。綱輪町から掛町、麹屋番と続く弧状の道路は、この町割の規制から外れ、汀線の堰堤に沿って自然発生的にできた道路と考えられる。更に、17世紀初頭には「息の濱」と「博多濱」間の湿地が埋立てられる。この時点で石積護岸跡と舟着き場は機能を喪失し、掛町筋から麹屋番の西南域に生じた新たな都市空間には橋口町、川端町、片土居町等の街並が生まれ、江戸時代を通して商工人町として発展していく。いずれにしても中世末〜近世における「息の濱」の変遷を窺い得るものである。

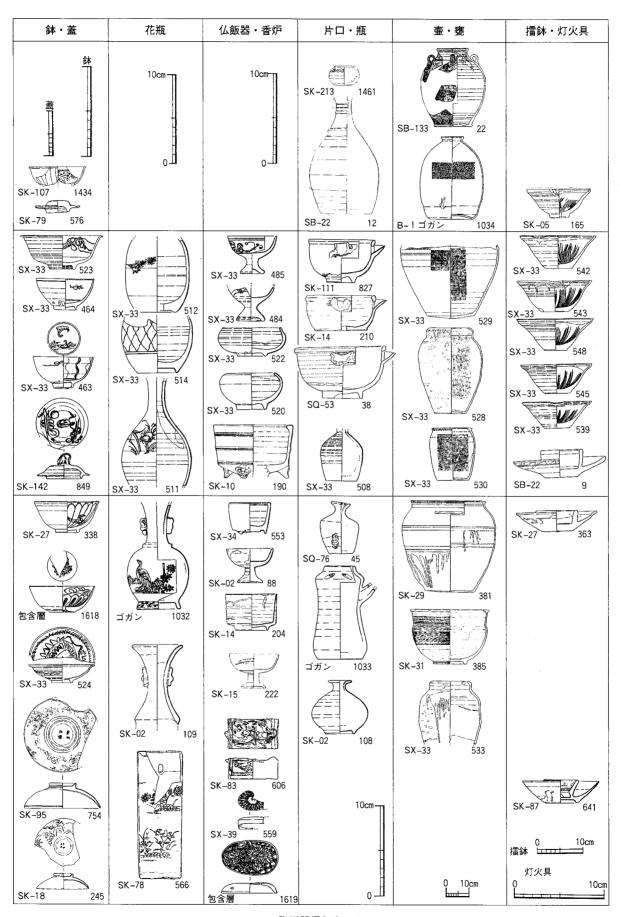
第3には、18世紀前半の塵芥穴(2号土壙)から木簡が出土した。位置的には麹屋番中に含まれる。この木簡には「和泉屋」と書かれたものが5点あり、うち2点には「いつ巳屋半三郎」なる人名が記載されている。『博多津要録』の元文五年庚申歳(1740)三月の条に「津中呉服店御停止ニ付月延之事」の記録があり、この中に洲崎町上の呉服商和泉屋半兵衛ほか4人の名がある。これは博多の呉服商を福岡に移して経済の活性化を企図したものである。この福岡出店に応じた和泉屋半兵衛は御褒美頂戴と相成るが、結果的には藩の政策は失敗し、延享三年(1746)に博多での呉服店の営業が許されるが、経営的には藩の規制を受け続ける。この呉服店和泉屋は文化文政期までに洲崎町上から姿を消す。木簡に記された「和泉屋」が元文年間の「和泉屋」と同じ和泉屋か、また、半三郎が半兵衛の一族かは明らかでないが、時空的には近い時期にあり、そこに住む人々と街並の在り方を復原する資料となろう。

また、89次調査では6棟の基礎石列と20基の石積土壙を検出した。基礎石列は棟筋を並べて対峙し、石積土壙を内包するものもある。これは江戸や大坂などの蔵基礎の土台工法と似ており、瓦片も出土している。瓦葺きの土蔵か大型の町家が建ち、その中に半地下蔵的石積みを付設していたものと推察される。この建物群は麹屋町西の川端町内に位置し、通筋に直交している。

最後に、調査では伊万里などの肥前陶磁器が多量に出土した。これらは早い段階から博多に流入しているが、製品としては秀品とは言い難いものが多い。整理にあたっては大橋康二氏の適切な指導を受けたが、詳細な検討までには至っていない。試案として編年的な羅列に留め、96次調査の報告時に改めて検討を加えたい。同時に護岸跡や街並の復原についても検討したい。



300. 陶磁器編年表 1



301. 陶磁器編年表 2



302. 須崎町上・麹屋番推定復原図(文化文政年間)(1/1,000)

博 多 61

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第556集 1998年3月13日発行

発行 福岡市教育委員会

印刷 ㈱九州カスタム印刷



